

四街道市館ノ山遺跡（3）

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXII—

平成28年9月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう たて やま い せき 四街道市館ノ山遺跡 (3)

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXII—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第759集として、独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市館ノ山遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

館ノ山遺跡に関する報告書は3冊目となりますが、隣接区の既報告と同様、古墳時代～奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字館ノ山688-1ほかに所在する館ノ山遺跡（遺跡コード228-020）の第6次調査として実施した調査区であり、「(6) 地点」或いは、「地点」を省略した「(6)」等と表記した。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、第1・3～5章、第6章第2・3節を主任上席文化財主事 木原高弘、上席文化財主事 香取正彦、第2章・第6章第1節を上席文化財主事 田村 隆が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関から御指導・御協力を得た。
千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。









第1図 国土地理院発行 1/50,000地形図

「成田」(NI-54-19-10)、「東金」(NI-54-19-11)

「佐倉」(NI-54-19-14)、「千葉」(NI-54-19-15) (平成9～15年発行)

第4～6図 独立行政法人都市再生機構作成 物井地区現況図 (1/2,500)

- 8 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による1969(昭和44)年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第Ⅸ系)で、図面の方位はすべてその座標北を示す。
- 10 遺構及び遺物の凡例は、以下のとおりである。

遺構		カマド構築材 (山砂・粘土)		炉・カマド内 火床部		焼土分布		床面硬化面
遺物		(断面) 土器・土師器		(断面)須恵器		(器面) 黒色処理		(器面)赤彩

- 11 旧石器時代の遺物の凡例は、各遺物分布図に示した。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
1 調査の経緯と経過	1
2 調査・整理の方法	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
1 遺跡の位置と地形	2
2 館ノ山遺跡の概要と周辺の遺跡	3
第2章 旧石器時代	17
第3章 縄文時代	22
第4章 弥生時代	22
第5章 古墳時代以降	29
第6章 まとめ	68
第1節 旧石器時代	68
第2節 弥生時代	68
第3節 古墳時代以降	69

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	館ノ山遺跡の位置と周辺の遺跡……………4	第23図	SI169 (2)……………37
第2図	館ノ山遺跡(6)地点調査範囲……………6	第24図	SI170 (1)……………38
第3図	グリッド設定法……………6	第25図	SI170 (2)……………39
第4図	物井地区遺跡分布図……………7	第26図	SI171 ……40
第5図	館ノ山遺跡下層確認グリッド位置・ 本調査範囲……………8	第27図	SI172 ……41
第6図	館ノ山遺跡周辺の地形及び遺構全体図…9, 10	第28図	SI173 ……42
第7図	館ノ山遺跡(6)地点遺構分布図……………11	第29図	SI174 ……44
第8図	旧石器時代集中1遺物分布図……………18	第30図	SI175・SI182……………44
第9図	旧石器時代石器(1)……………19	第31図	SI176 (1)……………46
第10図	旧石器時代石器(2)……………20	第32図	SI176 (2)……………47
第11図	縄文土器……………22	第33図	SI176 (3)……………48
第12図	SI161 (1)……………23	第34図	SI177 ……50
第13図	SI161 (2)……………25	第35図	SI178 (1)……………51
第14図	SI163 ……25	第36図	SI178 (2)……………52
第15図	SI165 ……26	第37図	SI179 ……53
第16図	SI168 ……28	第38図	SI180 ……54
第17図	SI162 ……30	第39図	SI181 ……55
第18図	SI164 ……31	第40図	SI183・SK419 ……57
第19図	SI166 ……32	第41図	SI184 (1)……………58
第20図	SI167 (1)……………34	第42図	SI184 (2)……………59
第21図	SI167 (2)……………35	第43図	弥生時代～奈良・平安時代 竪穴住居跡の時期区分……………71, 72
第22図	SI169 (1)……………36		

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表……………5	第3表	旧石器時代集中1遺物組成表……………21
第2表	旧石器時代石器計測表……………21	第4表	弥生・古墳・奈良・平安時代土器 一覧表……………61

図版目次

- 図版1 遺跡周辺航空写真
- 図版2 館ノ山遺跡空撮（北から）
館ノ山遺跡空撮（上から）
- 図版3 調査前風景（北から）、調査前風景
（南東から）、確認状況（南から）、
発掘風景（1）～（3）、
旧石器時代集中1遺物出土状況（1）・
（2）
- 図版4 27W-17下層土層断面、
SI161、SI161遺物出土状況、
SI162、SI162カマド、SI163、
SI164、SI164カマド
- 図版5 SI165、SI165炉、SI166、SI166貯蔵穴遺
物出土状況、SI167、SI167カマド、
SI167焼土・遺物出土状況、SI168
- 図版6 SI168炉、SI169、SI169旧カマド、SI169
遺物出土状況、SI170、SI170カマド、
SI171、SI171遺物出土状況
- 図版7 SI172、SI173、SI174、SI174カマド、
SI175、SI176、SI176カマド、SI176遺物
出土状況
- 図版8 SI176貯蔵穴土層断面、SI177、SI178、
SI178カマド、SI179、SI179カマド、
SI179カマド遺物出土状況、SI179遺物出
土状況
- 図版9 SI180、SI180遺物出土状況、SI181、
SI182、SI183、SI183カマド、SK419、
SI184
- 図版10 旧石器時代石器
- 図版11 縄文土器、弥生土器（1）・
古墳時代土器（1）
- 図版12 弥生土器（2）・古墳時代土器（2）
- 図版13 古墳時代土器（3）
- 図版14 古墳時代土器（4）
- 図版15 古墳時代土器（5）
- 図版16 古墳時代土器（6）
- 図版17 古墳時代土器（7）
- 図版18 古墳時代土器（8）
- 図版19 古墳時代土器（9）、土製品、支脚
- 図版20 石器、鉄製品等

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過（第1図）

独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区土地区画整理事業地内には多くの埋蔵文化財が分布する。その取扱いについては、千葉県教育委員会と都市再生機構との協議により、一部の保存地域を除き記録保存の措置が講じられることになり、公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年以前は財団法人千葉県文化財センター）が昭和59年から調査を実施し、調査成果として平成27年度までに21冊の報告書を刊行している¹⁾。

記録保存の対象とされたのは、清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、御山遺跡、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、棒山・呼戸遺跡、高堀遺跡、館ノ山遺跡、古屋城跡、北ノ作遺跡、嶋越遺跡、郷遺跡、中久喜遺跡の15遺跡である。

今回報告する館ノ山遺跡は事業地の南東側に位置する。発掘調査は、平成9年度から開始され、平成26年度まで6次にわたって行われた。このうち5次までの成果については、既に刊行された2冊の調査報告書に収められている。

本書に収録したのは、第6次（＝（6）地点）の調査成果である。発掘調査期間、担当者などは以下のとおりである。

調査研究部長 伊藤智樹

整理課長 今泉 潔

調査期間 平成26年7月1日～平成26年11月20日

調査面積（規模）3,351㎡（確認調査）上層471/3,351㎡・下層76/3,351㎡
（本調査）上層3,170㎡・下層68㎡

調査担当者 主任上席文化財主事 糸川道行、文化財主事 山岡磨由子

整理作業は平成27年度に行い、平成28年度に報告書を刊行した。

平成27年度 文化財センター長 小久貫隆史

整理課長 岸本雅人

整理期間 平成27年4月1日～平成28年2月29日

整理内容 水洗・注記、接合・実測、挿図・図版作成、原稿、編集

整理担当者 主任上席文化財主事 木原高弘、上席文化財主事 田村 隆、香取正彦

平成28年度 文化財センター長 上守秀明

整理課長 山口典子

内 容 報告書印刷・刊行

担 当 者 主任上席文化財主事 井上哲朗

2 調査・整理の方法（第1～3図）

物井地区では、事業範囲全域を公共座標（旧座標…国家標準直角座標第Ⅸ系）に基づく方眼網で覆って

調査を行っている。方眼は50m×50mの区画を大グリッドとし、名称は方眼網の北西角を起点にして、東へ1・2…、南へA・B…として、5Nのように両者を組み合わせて大グリッドの名称としている。その内部を100分割した5m×5mの区画が小グリッドで、北西隅を00、南東隅を99としている。00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、大グリッドと組み合わせて5N-75のように表記した。遺構・遺物の位置はこの方眼網に基づいて記録した。平成9・10年度調査の東調査区と(6)地点がほぼ接する位置にある27V-00グリッドは、旧座標でX=-35,300.000、Y=33,150.000であるが、世界測地系ではX=-34,944.7805、Y=32,856.3106、北緯35°41′04.12369″、東経140°11′46.80916″である²⁾。遺構・遺物の標高は、東京湾平均海面(T.P.)からの海拔高で記録した。

6次の調査範囲は、東側の舌状台地部の平成9・10年度調査の東調査区に接する北西側の一部と南側の中央から先端にかけてで、対象面積は併せて3,351㎡である。上層について平坦部は南北方向に、緩斜面部は東西方向に間隔をあけて約2m幅のトレンチを入れ、合計471㎡の確認調査を行った。その結果、大きく攪乱されていた北西側及び南側の台地先端部を除いた範囲から堅穴住居跡が確認され、3,150㎡の上層本調査を実施することとなった。本調査範囲からは、弥生時代後期の堅穴住居跡4軒、古墳時代前期の堅穴住居跡1軒、古墳時代後期の堅穴住居跡14軒(うち1軒は平成9・10年調査範囲において調査された残りの部分)・土坑1基、奈良・平安時代の堅穴住居跡4軒・堅穴状遺構1基が検出された。

下層は、2m×2mのグリッドを設定し、合計76㎡の確認調査を実施した。その結果、調査地のほとんどで関東ロームVI層までが流出していることが判明したが、台地南端部は比較的よく遺存しており、1か所のグリッドにおいてIV層下部～V層にかけて石器が出土した。周囲まで分布が広がることが予想されたため隣接する確認グリッドまでの範囲68㎡について下層本調査を実施することとなった。本調査範囲からは、石器集中地点が1か所検出され、29点の石器が出土した。

上層の遺構番号は、堅穴住居跡・堅穴状遺構を示す略号SIの後に3桁の数字を付与した。館ノ山遺跡(4)の調査で使用された番号に連続する形で、SI161～SI184を付した。なお、従来の報告では「SI-160」と、記号と番号の間に「-」を入れているが、本報告では省略した。

遺物の注記は、市町村コード、遺跡コード、調査地点、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号の順で書き込んだ。グリッドをもとに取り上げた遺物は、グリッド名を記載している。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形(第1・2・4図、図版1)

四街道市は、印旛沼に南西側から注ぐ手繰川と鹿島川支流の小名木川の源流部に位置する。市域の北東端部に当たる物井地区は、両水系に挟まれており、台地は両水系の小支谷によって浸食され、樹枝状の複雑な地形を示している。標高は30m前後である。

館ノ山遺跡は物井地区の南東部に位置し、鹿島川本流に西側から入り込む支谷の北岸に面する台地上に位置する。台地は西・東側から谷に挟まれ、付け根は狭い尾根状となり、現在宅地・畠地となっている北西側に大きな台地が続く。

今回調査対象となった(6)地点は、幅約70m、長さ150mの細長い尾根状の舌状台地で、台地の付け根付近を除けば中・近世城館の築造に伴う地形の改変を受けていないため、自然地形を保っている。上部の平坦面は標高約29.0m～32.5mで、幅20m～40mであった。斜面は東・西側とも比較的急峻である。

2 館ノ山遺跡の概要と周辺の遺跡（第1・2・4～6図）

館ノ山遺跡の既報告の調査成果に今回の（6）地点を加えて、遺構の検出状況を概観する。

旧石器時代は、西調査区においては中世の台地整形のために立川ローム層が削平されている箇所が多く、後世の遺構覆土内などから約30点の石器が出土したのみであった。今回報告の南東調査区から、Ⅳ層下部～Ⅴ層にかけて石器集中地点が1か所検出された。

縄文時代の遺構は、既報告の地点からのみ確認され、東調査区から後期の竪穴住居跡3軒、西調査区から早期と考えられる陥穴3基が検出された。今回報告する南東調査区では縄文時代の遺構は検出されておらず、竪穴住居跡の分布が広がらないことが確認された。

弥生時代の遺構は、今回報告の南東調査区の台地先端付近から後期の竪穴住居跡が4軒並ぶように検出された。

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居跡が西・東調査区において1軒ずつ検出されており、今回報告する南東調査区において1軒検出された。散在的な分布状況といえる。中期・後期の竪穴住居跡は、西・東調査区では71軒検出された。台地高所の平坦面では重複が著しく、南西側は中世の台地整形によって多くが破壊されていると思われる。5世紀中葉～7世紀の所産である。北側に続く同じ台地に位置する馬場No-2遺跡に分布が広がっていると思われる。今回報告の南東調査区では、西・東調査区ほどの竪穴住居跡の重複はみられないが、後期の竪穴住居跡15軒が検出された。

奈良・平安時代は、西調査区北側中央に8世紀前葉～後葉の竪穴住居跡5軒のまとまった分布がみられる。東調査区では9世紀中葉～後葉の竪穴住居跡3軒が検出された。今回報告の南東調査区では8世紀前葉～中葉の竪穴住居跡2軒が検出された。

中・近世は、中世城館に関する台地整形区画3か所、溝状遺構20条、空堀2条、土塁1条、掘立柱建物跡13棟、方形竪穴状遺構2基、井戸状遺構7基、地下式坑20基、土坑・小穴・焼土520基である。中世城館に関する遺構は西調査区に集中している。館跡の主体は、緩斜面を整形して建てられた掘立柱建物跡と地下式坑、井戸状遺構、館を防御する空堀である。遺物の主な時期は15世紀前葉～16世紀初頭であり、特に15世紀後半の遺物が多く出土している。

検出された主な遺構は、旧石器時代、弥生時代後期、古墳時代後期の竪穴住居跡である。ここでは物井地区内における当該期の遺跡について概要とその特徴を記しておく。

館ノ山遺跡の周辺には旧石器時代の重要な遺跡が多く分布している。御山遺跡は代表的な複合遺跡である。第Ⅱ文化層（Ⅸ層～Ⅹ層）は直径20mほどの環状廃棄帯で、一般的剥片生産を基調とする端部整形石器が出土している。これにコンヴァージェントフレイク（石刃）が少量伴う。前者の石材の多くは下野－北総回廊北縁部の珪化岩であり、後者にはより遠隔地の珪質頁岩が使われている。第Ⅴ文化層（Ⅶ層）は黒色安山岩製大型石刃と、大型剥片からなるキャッシュである。第Ⅷ文化層には、高原山産黒曜石製両面加工石器（Ⅷa層）と、下野－北総回廊北縁部の各種珪化岩を素材とする石刃石器群（Ⅷb層）から構成される。

出口・鐘塚遺跡（1）はⅨ層中部を産出層準とする大規模な遺跡である。石器群は多数の廃棄ブロックの集合で、総数は1,442点である。主に房総半島南部の石材を使った剥片石器群である。垂飾かと想定される穿孔品が2点ある。なお、本遺跡と同一層準には下野－北総回廊北縁部の珪化岩を素材とする石刃石器群（押沼石器群）が含まれ、回廊の南北に分布する石材の消費状況の違いに注目すべきである。



- 遺跡群・古墳群
 - 古墳時代後期の集落
 - 城館跡
- (番号は第1表と対応)

第1図 館ノ山遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	館ノ山遺跡	25	郷野遺跡	49	平賀遺跡群・一ノ台遺跡	73	本佐倉城跡
2	北ノ作遺跡	26	権現堂遺跡	50	八木山ノ田遺跡	74	佐倉（鹿島）城跡
3	古屋城跡	27	岩富明代台西遺跡	51	六崎貴舟台遺跡	75	岩名姿山砦跡
4	入ノ台第2遺跡	28	岩富漆谷津遺跡	52	六崎大崎台遺跡	76	下山砦跡
5	千代田遺跡V区	29	太田・大篠塚遺跡	53	寺崎向原遺跡	77	大原館跡
6	千代田遺跡I区	30	東向井城跡	54	生谷境堀遺跡	78	小竹城跡
7	池花古墳群・池花遺跡	31	中野戸崎砦跡	55	飯重新畑遺跡	79	洲崎砦跡
8	千代田古墳群	32	馬渡大内城跡	56	江原台遺跡	80	仲台砦跡
9	清水・新久・出口古墳群	33	大篠塚城跡	57	白井南遺跡	81	白井城跡
10	御山古墳群	34	小篠塚城跡	58	飯郷作遺跡	82	白井城御屋敷跡
11	鶴口遺跡	35	神門城ノ内城跡	59	岩名天神前遺跡	83	田久里砦跡
12	馬場No-1遺跡	36	馬渡館跡	60	平賀遺跡群・仲ノ台遺跡	84	白井田宿内砦跡
13	内黒田遺跡群	37	馬渡馬場館跡	61	平賀遺跡群・駒込遺跡	85	稲荷台砦跡
14	和良比遺跡群・和良比堀込城	38	坂戸馬場館跡	62	平賀遺跡群・油作第2遺跡	86	謙信一夜城跡
15	相ノ谷遺跡	39	坂戸尾牛城跡	63	平賀遺跡群・油作第1遺跡	87	忍台城跡
16	西向井遺跡	40	岩富城跡	64	高岡砦跡	88	志津大口館跡
17	大山砦跡	41	原屋敷跡	65	時崎城跡	89	上峠城跡
18	池ノ尻館跡	42	堀之内城跡	66	石川館跡	90	生谷館跡
19	殿台館跡	43	中台城跡	67	高崎的場遺跡	91	生谷砦跡
20	鹿渡城跡	44	作遺跡	68	城城跡	92	白井屋敷跡
21	東作砦跡	45	中山城跡	69	金部田城跡	93	吉見城跡
22	妙見砦跡	46	福星寺館跡	70	太田要害城跡		
23	元堀城跡	47	木出城跡	71	長勝寺脇館跡		
24	岩富遺跡群	48	高岡遺跡群	72	本佐倉大堀遺跡		

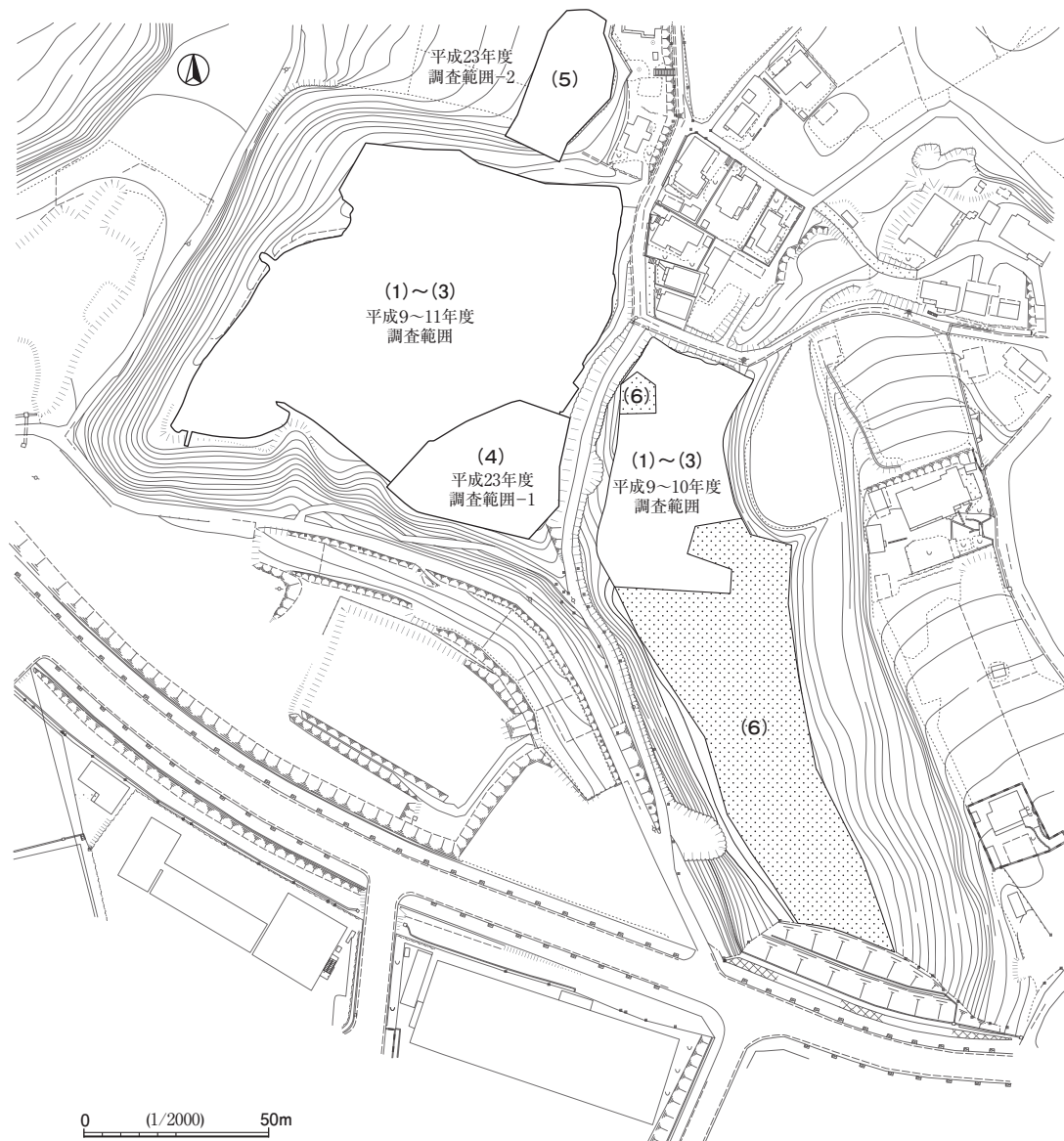
小屋ノ内遺跡第I文化層第1地点（IX層）は、環状ブロック群と認識されているが、正確には、小支谷に開口する馬蹄形ブロック群である。詳しい産出層準は不明であるが、IXb層直下となろうか。遺物総数は649点であり、房総半島南部産の石材を素材とする剥片石器群である。馬蹄形集中内部に2か所の炭化物集中がある。第III文化層（IV・V層）第24地点では、石器分布からやや離れた場所から、焼土と炭化物を伴う土坑を検出している。

なお、物井地区に隣接する内黒田地区からも重要な資料が得られている。池花南遺跡第1文化層（IX中層）には、上記小屋ノ内遺跡第I文化層とほぼ同一層準から環状ブロック群が出土している。やはり、内部に炭化物片集中を含み、使用石材も房総半島南部産（特に保田層）が多い。池花遺跡第3文化層（III層）は遠隔地産珪質頁岩（矢子層）を素材とする両面加工石器が多数出土している。

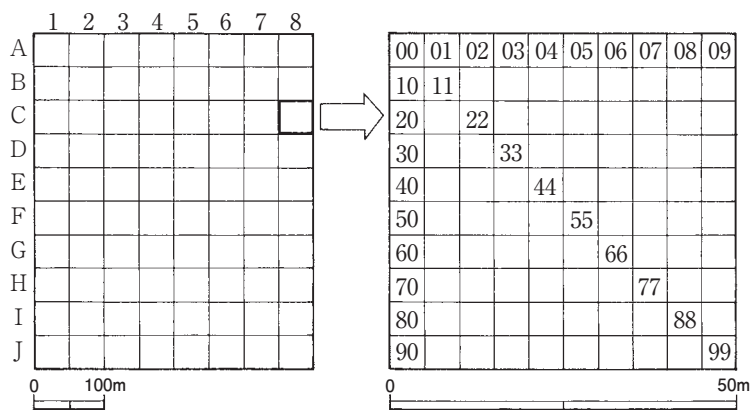
以上のように、物井地区の旧石器時代石器群の特徴は、①下野－北総回廊北縁部～奥羽山地の石材と、房総半島南部の石材とが交叉するエリアであったこと、②旧石器時代前半期には、環状・馬蹄形ブロック群をはじめ、繰り返し地域集団の集合キャンプが設置される地理的な位置を占めていたこと、という2点に要約される。

弥生時代後期の遺構がまとめて検出された遺跡は少ない。北西側から入り込む鹿島川の支谷の最奥部周辺に立地する御山遺跡では、竪穴住居跡2軒が遺跡の南西端から検出された。1軒からは在地系の「白井南式」土器が出土している。御山遺跡と谷を挟んで位置する新久遺跡からは、竪穴住居跡が18軒検出された。出土土器は南関東系が主体である。小屋ノ内遺跡からは、竪穴住居跡22軒と北端に壺棺墓1基が検出された。分布は新久遺跡に隣接する東側に14軒、館ノ山遺跡と同じ小名木川の谷津に面する南側に5軒、東側に3軒分布する。出土土器は、在地系の「白井南式」と南関東系が混在する。

古墳時代後期の集落は、東側の鹿島川本流及び小名木川の谷津に近い場所に営まれている。まとまった



第2図 館ノ山遺跡(6) 地点調査範囲



第3図 グリッド設定法



第4図 物井地区遺跡分布図



第5図 館ノ山遺跡下層確認グリッド位置・本調査範囲

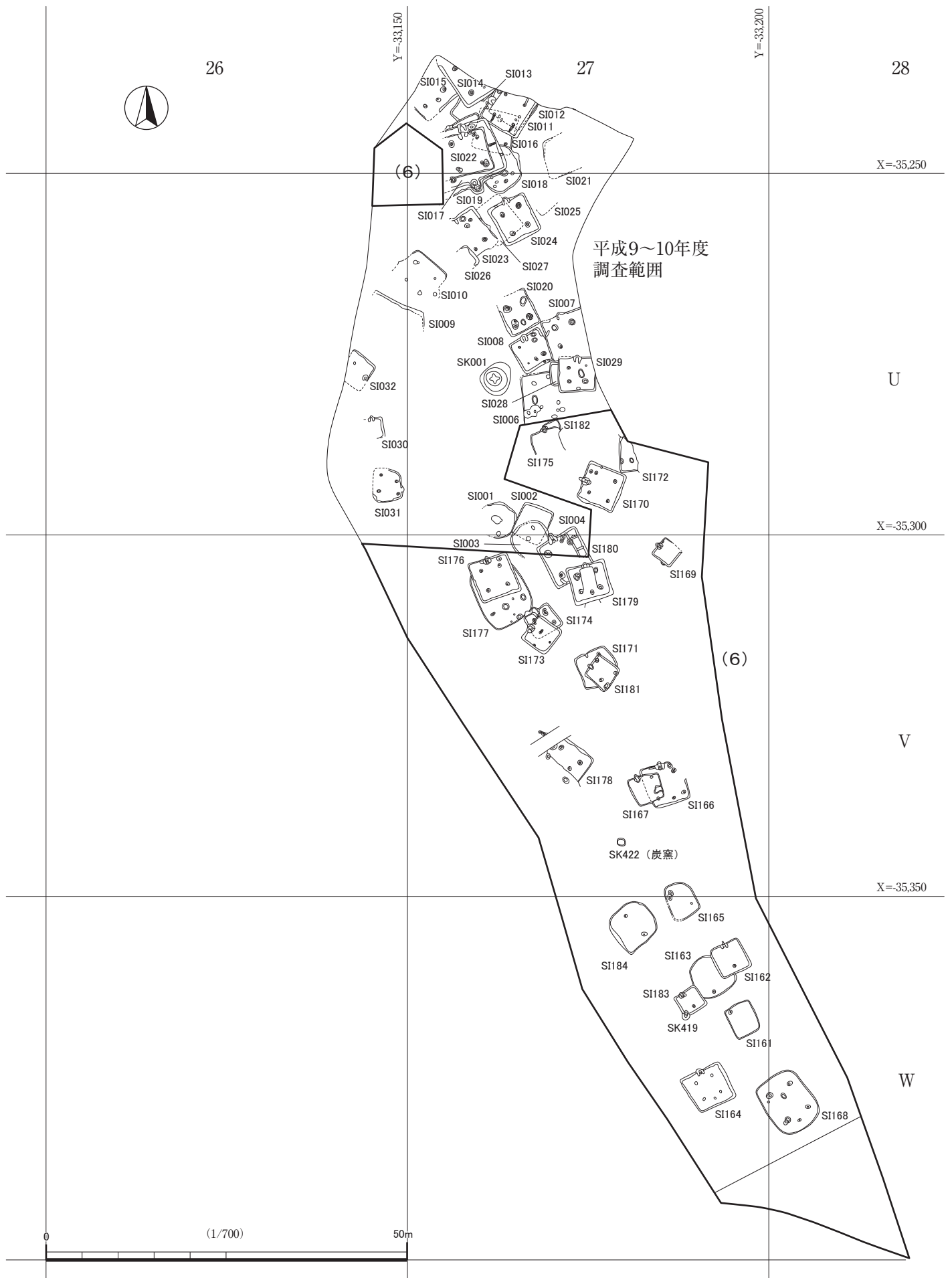
規模の集落が見つかったのは館ノ山遺跡のみである。ほかでは小屋ノ内遺跡から6世紀後葉～7世紀の竪穴住居跡11軒、稻荷塚遺跡から7世紀代が主体の竪穴住居跡11軒、郷遺跡から7世紀前半～中葉の竪穴住居跡が5軒、北ノ作遺跡から7世紀中葉の竪穴住居跡が3軒、嶋越遺跡から7世紀後葉の竪穴住居跡が2軒検出された。地区外では、館ノ山遺跡の対岸の台地上に位置する入ノ台第2遺跡から80軒の竪穴住居跡が検出されている。

古墳群は、西側の手繰川東岸の支流と小名木川北岸の支流に挟まれた分水嶺付近に分布する。清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡にわたって分布する中小規模の前方後円墳、帆立貝式古墳、陸橋部を持つ円墳、単純円墳は物井古墳群として括られている。6世紀中葉～8世紀初頭に営まれたもので、既知の古墳は40基を数える。主な埋葬施設は、箱式石棺と木棺の2種であり、その多くが墳裾部の地山を掘り込んだ墓坑内に設けられるいわゆる変則的古墳に属し、後から追加されたとみられる周溝内土坑も多数検出されている。墳丘の地山内に主体部が検出されない円墳も数基あり、墳丘封土内に主体部が設けられ



第6図 館ノ山遺跡周辺の地形及び遺構全体図

(太線 = (6) 地点)



第7図 館ノ山遺跡（6）地点遺構分布図

ていたようである。円墳の1基S08号墳からは下総型埴輪が多量に出土し、旧印旛郡域では最南部の出土例である。

御山古墳群は、御山遺跡に分布する古墳群で、円墳7基、方墳4基が調査された。円墳は南群3基と北群4基の2群に分かれる。主体部は、南西側のうち2基は裾部に箱式石棺が検出され、北東側は石棺が検出されず、1基は墳頂直下の墳丘内に主体部を設けていた可能性が高い。北群は6世紀後半～末にかけて、南群は6世紀末～7世紀初頭頃に形成されたと想定される。方墳の主体部は、2基は箱式石棺、1基は横口式木槨を墳丘裾の地山内に設けており、変則的古墳の伝統を受け継いでいる。7世紀中葉～後葉に築かれたものである。

そのほかに小屋ノ内遺跡では、遺跡の南側を中心に6世紀前半の円墳6基、稲荷塚遺跡からは円墳2基が検出されている。

次に、物井地区が位置する鹿島川水系および印旛沼周辺の多くの遺跡について、主に地区別に概要を記す。物井地区の遺跡は鹿島川の小支流がつくる樹枝状台地上に位置している。またこの地は、鹿島川支流の小名木川と鹿島川との合流地点の西側に望む台地上である。

物井地区近隣および小名木川流域において、旧石器時代、弥生時代、古墳時代後期および中世の主な遺跡として次のものがある。

物井地区近隣の旧石器時代の遺跡としては、西隣に位置する内黒田遺跡群がある。前述の池花南遺跡、池花遺跡のほかに大割遺跡が所在し、大割遺跡では、第1（Ⅸc層主体・2ブロック）・第2（Ⅸa層主体12ブロック）・第3（Ⅴ層・3ブロック）・第4（Ⅳ層・3ブロック）・第5（Ⅲ層・4ブロック、ナイフ形石器群）・第6（Ⅲ層・2ブロック、石槍主体石器群）・第7（Ⅲ層・3ブロック、細石刃石器群）文化層の石器群が出土している。池花遺跡では、前述の第3（Ⅲ層・10ブロック、石槍製作）文化層のほかに、第1（Ⅵ層・3ブロック）・第2（Ⅲ層・1ブロック、小型、横長剥片素材ナイフ形石器）文化層の石器群が出土している。池花南遺跡においては、第1（Ⅸc層主体・18クラスター構成の環状ユニット）文化層のほかに、第2（Ⅳ層・堅穴遺構）、第3（Ⅲ層・6ブロック・内4ブロック、折断石刃主体石器群）文化層の石器群が出土している。池花南遺跡第1文化層の環状ユニット出土石器740点は県指定有形文化財（考古資料）となっている。

弥生時代の遺跡としては、内黒田遺跡群の池花南遺跡および館ノ山遺跡北隣台地上に位置する馬場No-1遺跡がある。池花南遺跡では、弥生時代前期～中期の土器包含層が検出されている。馬場No-1遺跡では中期後半の方形周溝墓群が調査されている。馬場No-1遺跡は物井遺跡群に囲まれる立地であり、周辺に集落跡の存在が推定される。古墳時代後期については、北西隣の台地上に千代田遺跡Ⅰ区、千代田遺跡Ⅴ区が位置し、集落跡が調査されている。北隣の鶴口遺跡では方墳が調査され、また、弥生時代後期の堅穴住居跡1軒が調査されている。中世については、物井地区内の北ノ作遺跡および四街道市指定史跡の古屋城跡が所在する。

小名木川流域の主な遺跡は次のとおりである。旧石器時代の遺跡は、遺物（ほぼ石器）だけの遺跡であり、地表下約2mの立川ローム層最下層まで石器が出土することから、大規模な調査において明確になることが多い。小名木川最上流域の台地上に位置している和良比遺跡群では、住宅団地造成に伴う調査で、6地区においてⅢ層～Ⅸ層中から5,000点以上の石器が出土し、古い方からⅠ～Ⅳに区分されている。弥生時代では鹿島川合流地点付近の東側台地上に相ノ谷遺跡、西向井遺跡が位置している。相ノ谷遺跡では

中期後半、西向井遺跡では後期の集落跡が調査されている。古墳時代後期では、合流地点付近の西側台地上の入ノ台第2遺跡で大規模な集落跡が調査されている。中世の遺跡では小名木川最上流域の台地上に和良比堀込城が位置し、和良比遺跡群の調査時に調査が行われている。現在は一部が四街道市により「堀込城跡緑地」として保存整備され、土塁などを目にする事ができる。ほかの城館跡は、小名木川流域においては、小支流の最奥部の台地上および小名木川両岸の台地上に分布している。

物井地区の東側を北流する鹿島川流域の遺跡の分布は次のとおりである。鹿島川と小名木川との合流地点から南側の上流域では、東側の台地上に岩富遺跡群が位置している。工業団地造成に伴い大規模な調査が行われた。旧石器時代の遺跡では、星谷津遺跡、向原遺跡、栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡などが調査されている。弥生時代では、鹿島川西側の台地上に位置している郷野遺跡で中期後半の集落跡が調査されている。古墳時代後期は、岩富遺跡群の遺跡が調査されている。集落跡と古墳群があり、両者を共有する遺跡もある。集落跡としては、南広遺跡、腰巻遺跡、タルカ作遺跡などがある。古墳群としては立山遺跡、大作遺跡、池向遺跡などがある。また、やや上流の東側台地上に位置する岩富漆谷津遺跡、前述の郷野遺跡とその南隣の権現堂遺跡、合流地点東側台地上の太田・大篠塚遺跡で集落跡が調査されている。中世では、鹿島川両側のやや突出した台地上に城館跡が位置し、東西相対するように分布している。

鹿島川と小名木川との合流地点北側から印旛沼までの鹿島川下流域では、低地が幅広くなり、増水時には沼の様相になると思われる。合流地点下流域および印旛沼周辺では多くの遺跡が所在し、主な遺跡は次のとおりである。鹿島川支流の高崎川北側台地上に位置している高岡遺跡群で、住宅団地造成に伴う大規模な調査が行われ、旧石器時代では、高岡大福寺遺跡、高岡大山遺跡の集落跡調査時に調査が行われている。ほかには、印旛沼西岸の平賀遺跡群において、宅地等造成に伴う大規模な調査で、一ノ台遺跡の調査が行われている。弥生時代では、高岡遺跡群内の高岡大山遺跡（中期後半～後期の集落跡）、高岡大福寺遺跡（後期の集落跡）、高岡谷津遺跡（後期の集落跡）が調査され、高崎川南側の台地上では、八木山ノ田遺跡（中期後半の集落跡）、六崎貴舟台遺跡（中期後半の方形周溝墓群、後期の集落跡）が調査されている。

また、鹿島川と高崎川の合流地点の南に望む台地上では、六崎大崎台遺跡（中期後半の環濠集落跡・方形周溝墓群、後期の集落跡）、寺崎向原遺跡（中期後半の方形周溝墓群、後期の集落跡）が調査されている。また、合流地点の西側を望む台地上では、生谷境堀遺跡（後期の集落跡）、飯重新畑遺跡（後期の集落跡）が調査されている。印旛沼周辺では鹿島川河口西側台地上の江原台遺跡（後期の集落跡）、印旛沼に流入する手繰川東側台地上の臼井南遺跡群（後期の集落跡）、やや上流西側台地上の飯郷作遺跡（後期の集落跡・方形周溝墓群）、鹿島川河口東側台地上には岩名天神前遺跡（中期前半の再葬墓群）、西岸台地上で、平賀遺跡群内の一ノ台遺跡（後期の集落跡）、仲ノ台遺跡（後期の集落跡）が調査されている。岩名天神前遺跡では北関東の土器と南関東の土器が同一墓域に混在している。また、臼井南遺跡で出土した土器に南関東と北関東の特徴を持つ土器群が、印旛沼周辺の後期在地系土器群として「臼井南式」の設定がなされている。古墳時代後期としては、前述の高岡大山遺跡、六崎大崎台遺跡、江原台遺跡で集落跡が調査されている。印旛沼西岸の平賀遺跡群では駒入遺跡、油作第2遺跡、油作第1遺跡で集落跡が調査されている。中世では多くの城館跡が所在している。高崎川流域では両側のやや突出した台地上に立地し、相対するよう分布する傾向がある。また、高岡大福寺遺跡では中世寺院跡、六崎貴舟台遺跡では中世集落跡が調査されている。印旛沼に面した地域では、拠点ごとに分布が集中する傾向がある。特に臼井城跡周辺では顕著であると思われる。

以上のように、物井地区周辺は豊かな水と河川や沼の交通路を基盤として多くの遺跡が形成され、また、文化や地域勢力などの融合、対立が繰り返されてきたと思われる。

注1 物井地区の既刊の発掘調査報告書は以下のとおりである。

- (財) 千葉県文化財センター 1994『四街道市御山遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－』
- (財) 千葉県文化財センター 1999『四街道市出口・鐘塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』
- (財) 千葉県文化財センター 2005『四街道市小屋ノ内遺跡(1) 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2006『四街道市小屋ノ内遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2007『四街道市小屋ノ内遺跡(3)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2008『四街道市郷遺跡・中久喜遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2009『四街道市稲荷塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2009『四街道市清水遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2011『四街道市館ノ山遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2011『四街道市新久遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2011『四街道市清水遺跡・新久遺跡 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ－』
- (財) 千葉県教育振興財団 2012『四街道市出口遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2013『四街道市北ノ作遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2013『四街道市出口遺跡 旧石器時代編－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2013『四街道市館ノ山遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅤ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2013『四街道市御山遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2014『四街道市嶋越遺跡(1)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2015『四街道市出口・鐘塚(2)・(3)・(4)遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2016『四街道市清水遺跡(3)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2016『四街道市嶋越遺跡(2)－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ－』
- (公財) 千葉県教育振興財団 2016『四街道市高塚遺跡－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩⅠ－』

2 変換値はWeb版TKY2JD Ver.1.3.80による。

周辺の遺跡一覧表の遺跡調査報告書(旧石器時代、弥生時代、古墳時代後期)

- 1・2・9・10は物井地区の既刊発掘調査報告書
- 4 四街道市教育委員会 1990『千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書』
- 5・6 四街道千代田遺跡調査会 1972『千代田遺跡－千葉県印旛郡四街道町－』
- 7・13 (財) 千葉県文化財センター 1991『四街道市内黒田遺跡群－内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 11 (財) 印旛郡市文化財センター 2009『四街道市鶴口遺跡－(仮称) 亀崎介護老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財調査－』
- 12 (財) 印旛郡市文化財センター 2007『千葉県四街道市馬場No-1遺跡－物井の里宅地造成地内埋蔵文化財調査－』
- 14 (財) 印旛郡市文化財センター 1991『千葉県四街道市和良比遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ－四街道市和良比地区埋蔵文化財調査－』
- 15・16 東京電力北総線調査会 1982『北総線－東京電力北総線設置工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』

- 24 記述した遺跡は次のとおりである。
- (財) 千葉県文化財センター 1978『佐倉市星谷津遺跡』
 - (財) 千葉県文化財センター 1983『佐倉市立山遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1985『佐倉市タルカ作遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1987『佐倉市腰巻遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1989『佐倉市向原遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1990『佐倉市大作遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1991『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1993『佐倉市南広遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』
 - (財) 千葉県文化財センター 1995『佐倉市池向遺跡－佐倉第三工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅡ－』
- 25 (財) 印旛郡市文化財センター 2002『千葉県四街道市郷野遺跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)－』
- 26 (財) 印旛郡市文化財センター 2004『千葉県四街道市権現堂遺跡－四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)－』
- 27 (財) 印旛郡市文化財センター 2012『千葉県佐倉市岩富明代台西遺跡(第4次・第5次)－岩富6-263線埋蔵文化整理業務委託－』
- 28 佐倉市教育委員会 1983『岩富漆谷津 太田宿』
- 29 日本文化財研究所 1978『太田・大篠塚－千葉県佐倉市太田・大篠塚遺跡発掘調査概報－』
- 48 (財) 印旛郡市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅰ 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ)』
- (財) 印旛郡市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅱ 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ)』
 - (財) 印旛郡市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅲ 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅲ)』
 - (財) 印旛郡市文化財センター 1993『千葉県佐倉市高岡遺跡群Ⅳ 佐倉市高岡地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅳ)』
- 49・60・61・62 平賀遺跡群発掘調査会 1986『平賀 平賀遺跡群発掘調査報告書』
- 63 (財) 印旛郡市文化財センター 1991『千葉県印旛郡印旛村油作第1遺跡発掘調査報告書－印旛村立平賀小学校建設予定地内埋蔵文化財調査－』
- 50 佐倉市教育委員会 2000『千葉県佐倉市八木山ノ田遺跡(第2次)－不特定遺跡発掘調査助成事業－』
- 51 (財) 印旛郡市文化財センター 1989『千葉県佐倉市六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書－六崎貴舟地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査－』
- (財) 印旛郡市文化財センター 1995『千葉県佐倉市六崎貴舟台(第4・5次)遺跡発掘調査報告書－佐倉市石川春地区店舗及び宅地造成予定地内埋蔵文化財調査－』
 - (財) 印旛郡市文化財センター 1999『千葉県佐倉市六崎貴舟台遺跡(第7次)－佐倉市石川分譲住宅建設に伴う埋蔵文化財調査－』
 - (財) 印旛郡市文化財センター 2001『千葉県佐倉市六崎貴舟台遺跡(第8次)』
 - (財) 印旛郡市文化財センター 2002『千葉県佐倉市六崎貴舟台遺跡(第10次)』
- 佐倉市教育委員会 2011『千葉県佐倉市城次郎丸遺跡(第6次)・六崎貴舟台遺跡(第6次) 不特定遺跡発掘調査助成事業』

- 52 大崎台遺跡発掘調査団 1973『大崎台遺跡』
 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1984『大崎台遺跡発掘調査概報－大崎台遺跡B地区・C地区－』
 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1985『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』
 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1986『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』
 佐倉市大崎台B地区遺跡調査会 1987『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅲ』
 佐倉市教育委員会 1997『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅳ（写真編）』
 佐倉市教育委員会 1998『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅴ』
- 53 佐倉市寺崎遺跡群調査会 1987『千葉県佐倉市寺崎遺跡群発掘調査報告書 向原遺跡・上城堀遺跡・一本松遺跡』
- 54・55 佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会 1974『飯重』
- 56 (財)千葉県文化財センター 1977『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ 第1次・第2次調査』
 (財)千葉県文化財センター 1980『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
 (財)千葉県文化財センター 1981『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
 (財)印旛郡市文化財センター 2005『千葉県佐倉市江原台遺跡－国立佐倉病院統廃合後における後医療機関増築工事のための埋蔵文化財調査－』
- 57 佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会 1975『臼井南 千葉県佐倉市臼井南遺跡調査報告書』
- 58 (財)千葉県文化財センター 1978『佐倉市飯合作遺跡』
- 59 明治大学 1974『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群 明治大学文学部研究報告 考古学 第四冊』
 また、下記の文献を参考とした。
 (財)印旛郡市文化財センター 2004『印旛の原始・古代－旧石器時代編－』
 (財)千葉県史料研究財団 2003『千葉県の歴史 資料編 考古2（弥生・古墳時代）』
 (財)千葉県史料研究財団 2003『千葉県の歴史 資料編 中世1（考古資料）』

第2章 旧石器時代

館ノ山遺跡からは旧石器時代の遺物集中地点が1か所検出された。他に後世の遺構覆土内で出土した石器が1点ある。はじめに、出土した石器と石材の分類基準を示す。

石器の分類

ナイフ形石器 斜めの刃部を確保するために、ブランクの縁辺を粗くカットした石器である。刃器の一種である。

石核 打面や作業面を整えることなく、ブランクを生産する石核であり、小型の礫を素材とする場合と、大型厚手の剥片を素材とする場合がある。この定義は珪質頁岩Hに適用される。両極剥離による石核もあるが、これは黒色安山岩に適用される。

剥片 上記石核と対応する。原礫面を留めるA類と、原礫面を残さないB類に大別される。縁辺に使用痕と判定される刃こぼれのつくものをC類とする。

破片 ブランク生産に随伴する、最大長10mm以下の破破片である。これよりも大型のチャンク状破破片も含める。

主要石材の分類

黒色安山岩 扁平小型の原石で、万田野層産である。

珪質頁岩H 保田層群産の珪質頁岩である。

集中1

出土状況（第8図、図版3・4）

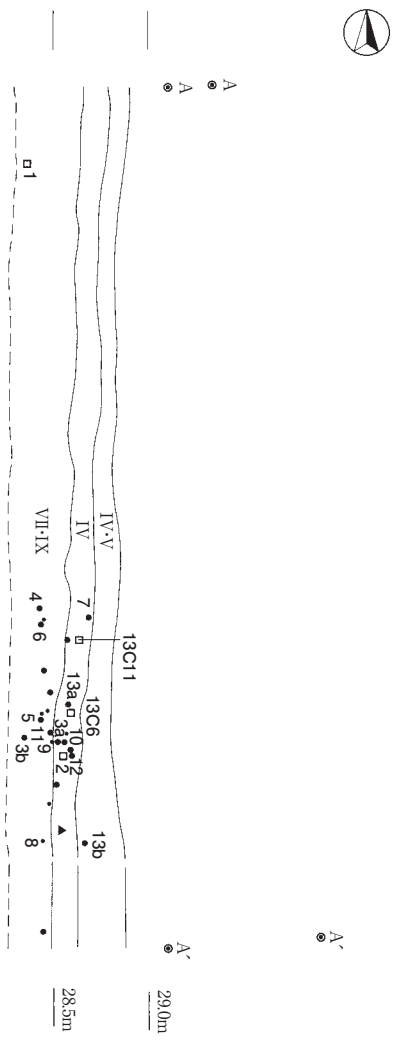
28W-81・82グリッドを中心とする小規模な集中である。やや離れて、28W-72グリッドからも1点の遺物が出土している。この遺物はやや出土層準が低く、本集中との関係は断定できないが、便宜的にここで扱う。28W-72以外の遺物は28点で、直径1m強の狭い範囲に集中している。遺物の垂直分布は単峰形の分布で、その平均標高は28.51mである（ $d=0.08$ 、中央値28.50m）。集中地点付近で実測された土層断面図によれば、IV・V層とVI層との境界はほぼ28.6mであり、VI層とVII～IX層（第2黒色帯）との境界は28.5m位である。また、土層断面図を作成した場所と集中との間隔は4mほどであり、この間に大きな土層傾斜は認められない。以上の観察結果に従う限り、本集中の出土層準はVI層下部と判断される。分布投影図によると、IV・V層出土は1点、VI層は13点、VII層～IX層は14点である。また、掘り込みを示唆するような異常分布も確認できない。ところが、遺物台帳には全てIV・V層出土という注記が加えられている。おそらく、現地調査終了後、出土遺物の形態や技法に基づいて判断された結果が追加されたようであるが、本報告では、実態に即して、VI層下部石器群であると判定しておきたい。

出土遺物（第9・10図、図版10）

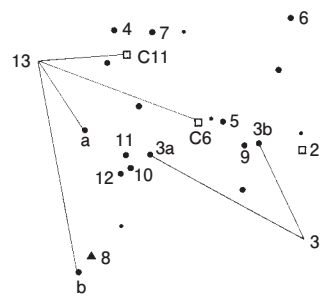
本ブロックからは合計27点の遺物が出土した（第3表）。細部加工のある石器は1点のみで、剥片剥離に伴う残渣の集合である。黒色安山岩と珪質頁岩Hの2種が主に消費されている。

1は石核である。黒色安山岩の小型扁平な礫（長さ60mm程度）を両極加撃で半割している。これはミカン割りの一種であるが、小型円礫を消費する第1段階としてしばしば両極加撃によるミカン割りが採用さ

(器種別)



28W-82



- 石核
- ▲ ナイフ形石器
- 剥片
- ・ 碎片
- ◎ セクションポイント

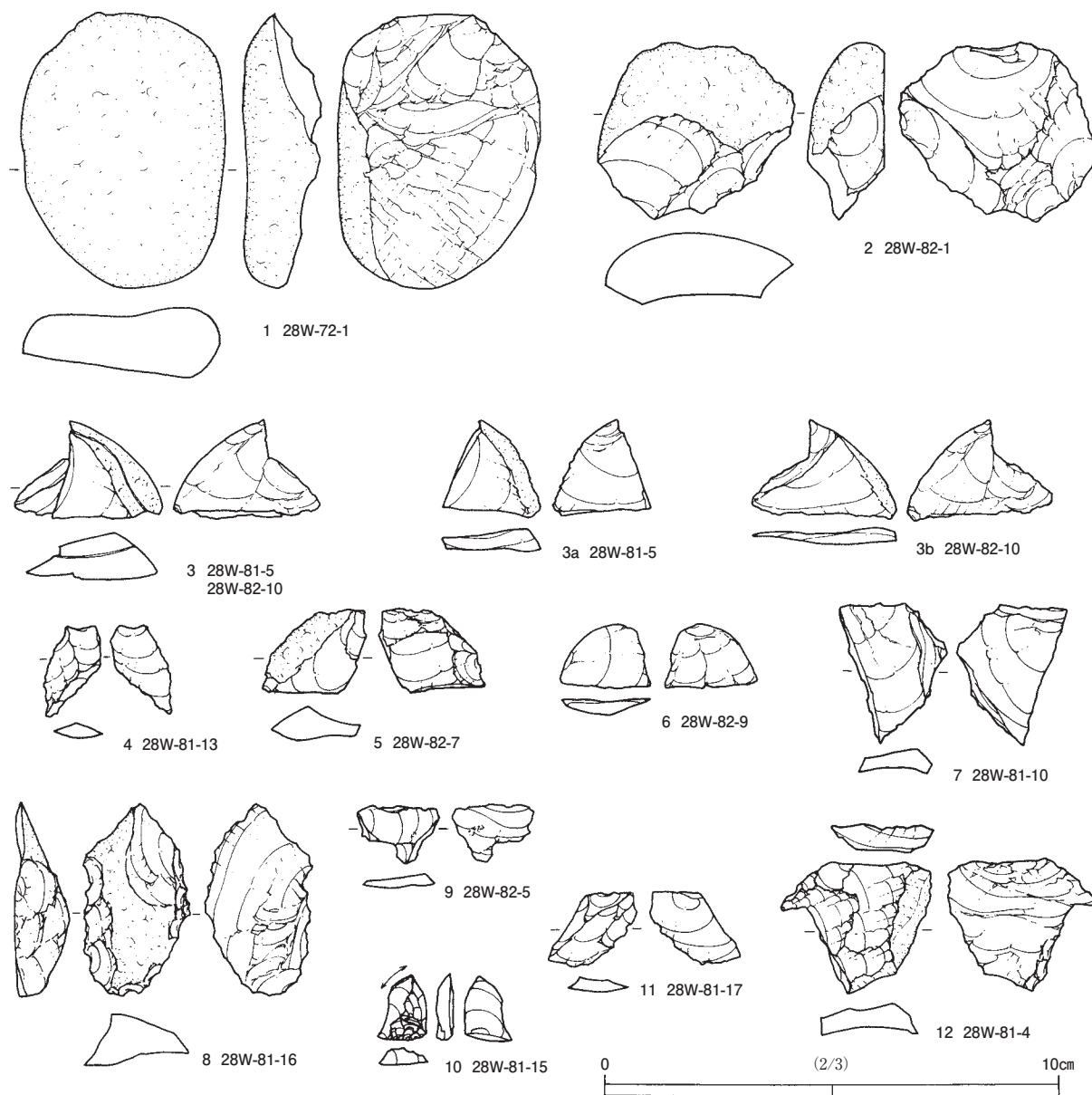
(石材別)

28W-82



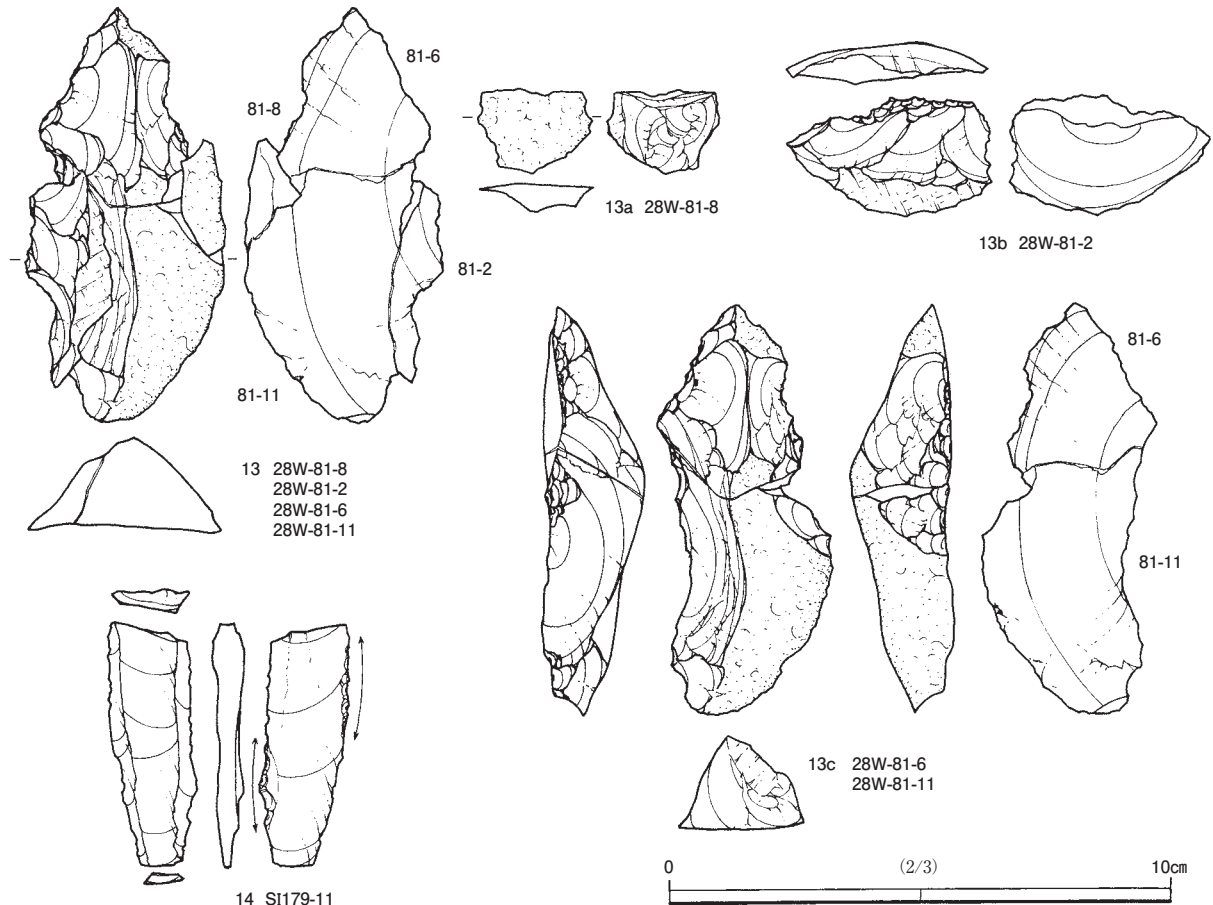
- 黒曜石
- ◎ 珪質頁岩
- 黒色安山岩
- チャート

第8図 旧石器時代集中1 遺物分布図



第9図 旧石器時代石器（1）

れる。2は黒色安山岩製の石核である。1と同じように小型扁平な長円形の重円礫製である。薄手のブランクのため、周縁からの剥離による剥片生産が試みられている。3は両極剥片の接合したものである。1のような半割礫をさらに加撃し、薄い不定型な剥片が剥離されている。2例とも尾部を欠損する。4～7は同種の黒色安山岩製の両極剥片である。8はナイフ形石器である。切り出し型石器に類似するが、尖頭部がある。厚手であり、加工具の一種と見られる。9は黒曜石製の小剥片である。10は保田層産珪質頁岩製の使用痕付き剥片である。長さが13.5mmときわめて小型であるが、先端部片側に密集した微細剥離が認められる。11は保田層産珪質頁岩製の剥片である。背面には加撃方向のそろった剥離痕が数面ある。10、11のような小型剥片が連続的に剥離されていることに注意したい。12はチャート製の剥片である。13は保田層産珪質頁岩の接合資料である。石核と剥片の接合例であるが、留意すべき点がある。ブランクは、礫面付き大型の剥片である。剥離面から礫面に向かって剥片が連続的に剥離されているが、ブランクの厚みがそれほどないので、剥片は横長になる。13bは典型的な剥片であるが、3面の先行剥離痕とともに、打



第10図 旧石器時代石器（2）

面に沿って小剥離痕が連続的に観察される。これと類似する小剥離痕は石核側にもあり、剥片の剥離と縁辺部の小剥離とが反復されていることがわかる。さらに、石核が半分に分れた後でも、割れた面に接する縁辺にも小剥離が加えられている。この小剥離に関しては、打点を打面縁辺に近い位置に確保するための加撃縁調整と見られるが、鋸歯縁状の石核縁辺を加工具として使うための調整剥離を兼ねたものであった可能性も否定できない。

まとめ

Ⅵ層下部を中心とする層準から出土した小規模な集中である。遺物数も多くなかったが、大別して3種のプライマリー・リダクション（ブランク生産手法）を確認した。

1. 小型扁平な亜円礫を両極加撃で消費するもの
2. 小型扁平な円礫の周辺に加撃点を廻すもの
3. 大型の礫を分割し、分割片の周縁部に打点を配するもの

1と2の素材は万田野層産の黒色安山岩亜円礫である。3の素材は保田層産珪質頁岩の河床礫である。推定原産地との直線距離は前者が40km、後方で70kmである。これは非現実的な最低距離である。他にごく少量の黒曜石とチャートがある。黒曜石の産地は不詳であるが、チャートは黒色安山岩とともに採集された可能性がある。

石器群は一般的な剥片をベースとするもので、これ以前からの長い伝統を引き継いだ石器群と言える。なお、Ⅸ層中部以降、プリズマチックな石刃生産が断続的に確認されるが、本集中にはその片鱗もない。

第2表 旧石器時代石器計測表

グリッド・遺構	遺物番号	水準値	挿図番号	器種	石材	長mm	幅mm	厚mm	重g	
28W-72	1	28.359	1	石核	黒色安山岩	60.5	44.1	17.4	59.8	
28W-81	1	28.438		碎片	黒曜石	6.6	11	4.7	0.2	
	2	28.65	13 b	剥片B	珪質頁岩H	23	40.2	7.4	6.1	
	3	28.471		碎片	黒曜石	5.8	9.9	3.4	0.2	
	4	28.615	12	剥片A	チャート	28.7	33.5	7.7	6.9	
	5	28.547	3 a	剥片A	黒色安山岩	20.5	21.1	5.4	2.7	
	6	28.595	13 c	石核	珪質頁岩H	41.1	30.4	19.6	15.6	
	7	28.469		剥片B	黒色安山岩	14.4	13.5	6.5	1.1	
	8	28.546	13 a	剥片A	珪質頁岩H	15.8	20.3	0.5	1.7	
	9	28.44		碎片	黒色安山岩	10.3	10.2	3.5	0.4	
	10	28.686	7	剥片B	黒色安山岩	31	24.9	5	2.9	
	11	28.625	13 c	石核	珪質頁岩H	54.1	35.8	20.1	28.1	
	12	28.568		剥片B	黒色安山岩	20	11	2.8	0.6	
	13	28.416	4	剥片B	黒色安山岩	19.8	11.1	2.6	0.6	
	14	28.447		剥片B	黒色安山岩	16.8	13.8	3.1	0.8	
	15	28.585	10	剥片AC	珪質頁岩H	13.5	10.5	4.5	0.7	
	16	28.542	8	ナイフ形石器	黒色安山岩	42.7	22.5	13.6	10.6	
	28W-82	17	28.488	11	剥片B	珪質頁岩H	17.5	12.8	3	0.8
		18	28.43		碎片	珪質頁岩H	7.5	5.6	1.6	0.1
1		28.53	2	石核	黒色安山岩	39.2	38.5	17.1	31.1	
2		28.565		碎片	黒色安山岩	8.8	14.6	4.6	0.3	
3		28.481		碎片	黒色安山岩	11	7.8	2.5	0.2	
4		28.5		剥片A	黒色安山岩	13.2	22.3	7.5	2.4	
5		28.515	9	剥片B	黒曜石	12.6	17.9	2.2	0.6	
6		28.455		碎片	黒色安山岩	6.6	6.6	2.6	0.1	
7		28.422	5	剥片A	黒色安山岩	18.1	19.1	8.3	3.1	
8		28.452		剥片A	黒色安山岩	7.3	11.2	4.7	0.4	
SI179	9	28.446	6	剥片A	黒色安山岩	14.2	20.1	0.8	1	
	10	28.34	3 b	剥片A	黒色安山岩	21.4	31.4	5.7	3.1	
	11		14	石刃BC	珪質頁岩H	48.8	16.2	5.5	5.6	

第3表 旧石器時代集中1遺物組成表

	ナイフ形石器	石核	剥片A	剥片AC	剥片B	碎片	合計
黒色安山岩	1	2	6		5	4	18
黒曜石					1	1	2
珪質頁岩H		1	1	1	2	1	6
チャート			1				1
合計	1	3	8	1	8	6	27

同時に、本石器群の内容は、以後長期間維持される一般的剥片を基盤とする石器群に連続する。

SI179出土遺物（第10図、図版10）

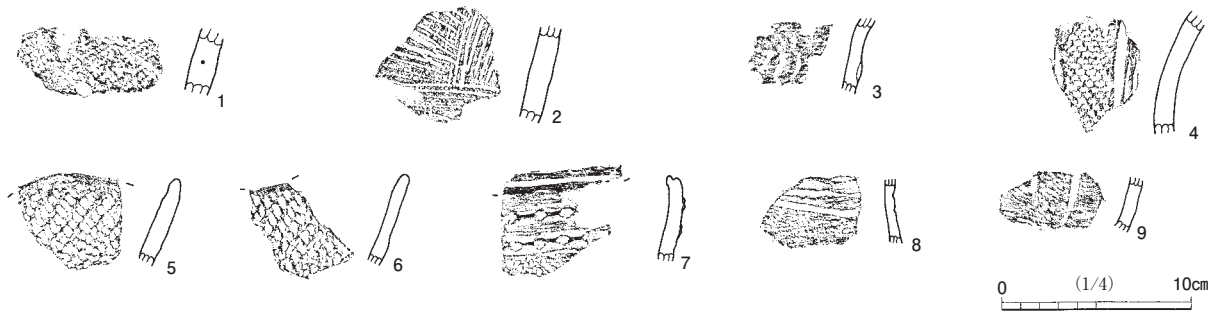
遺構調査時に覆土中から出土した遺物である。素材は非常に硬く固結した保田層産珪質頁岩で、頭部と尾部を欠損している。背面二稜型、横断面台形となる平行石刃である。腹面左右側縁部にそれぞれ1か所ずつの使用痕が観察される。使用痕は長さ20mm～25mmで、硬質な対象（例えば骨）との反復接触によって生じている。この部分に陸続する側縁には顕著な刃こぼれは認められない。この石器が生産された時期に関しては、集中1とそれほど大きな隔たりはないと思われる。

第3章 縄文時代

調査区内に縄文時代の遺構はなく、ほとんどが古墳時代の竪穴住居跡の覆土内から少量出土した。

遺構外出土土器（第11図、図版11）

1は黒浜式土器の胴部片で、RL縄文を施す。胎土中に繊維を含む。2は諸磯c式土器の胴部片で、半截竹管による直線・斜行の集合沈線が施される。3は阿玉台式土器の胴部片で、爪形文が施される。胎土中に石英・長石を多く含む。4は加曾利E式土器の胴部片である。LRLの縄文が施され、沈線区画による磨消懸垂文が施される。5～9は堀之内式から加曾利B式の土器である。5・6は粗製の口縁部片である。波状を呈し、外面にLR縄文が施される。7は波状の口縁部で、口唇部に沈線、口縁部に2条の紐線文、胴部にRL縄文が施される。8は上方に2本の横沈線、下方にRL縄文が施される。9は沈線区画内にLR縄文が施される。



第11図 縄文土器

第4章 弥生時代

弥生時代の遺構は、後期竪穴住居跡が4軒である。調査区である南に延びる舌状台地の南端部に集中している。舌状台地の尾根状部に一列に並んで分布している。

SI161（第12・13図、図版4・11・12・19・20）

位置 南東調査区南側にあり、27W-39グリッド周辺に位置する。遺構の東側は斜面である。

形状・規模 四辺はややゆるやかな弧を描く隅丸長方形である。主軸方向の長軸は4.75m、短軸は3.94m、深さは0.5mである。主軸はN-24°-Wである。

床面 硬化範囲は不明瞭である。

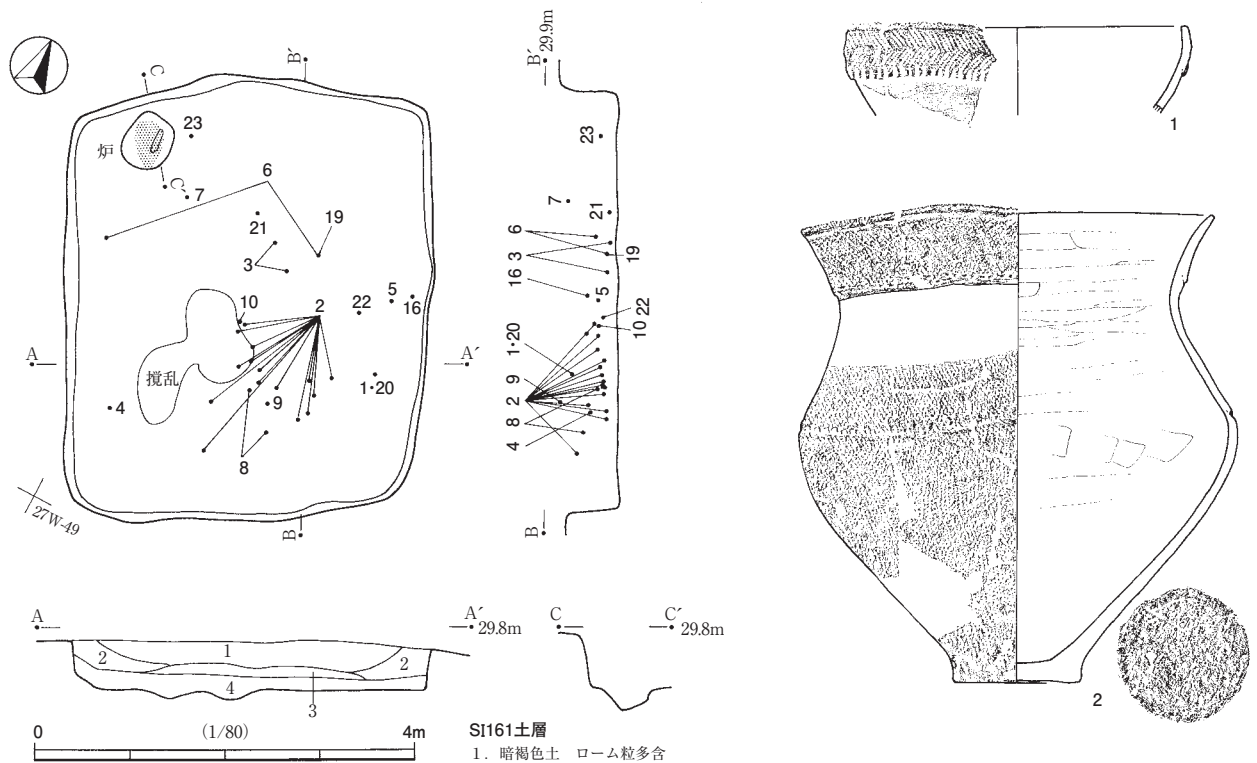
柱穴・貯蔵穴 主柱穴は検出されなかった。

炉 北東隅付近に検出された。長径60cm、短径50cm、深さ20cmである。

堆積土 上層はローム粒を含む暗褐色土、下層はローム粒・ロームブロック主体である。

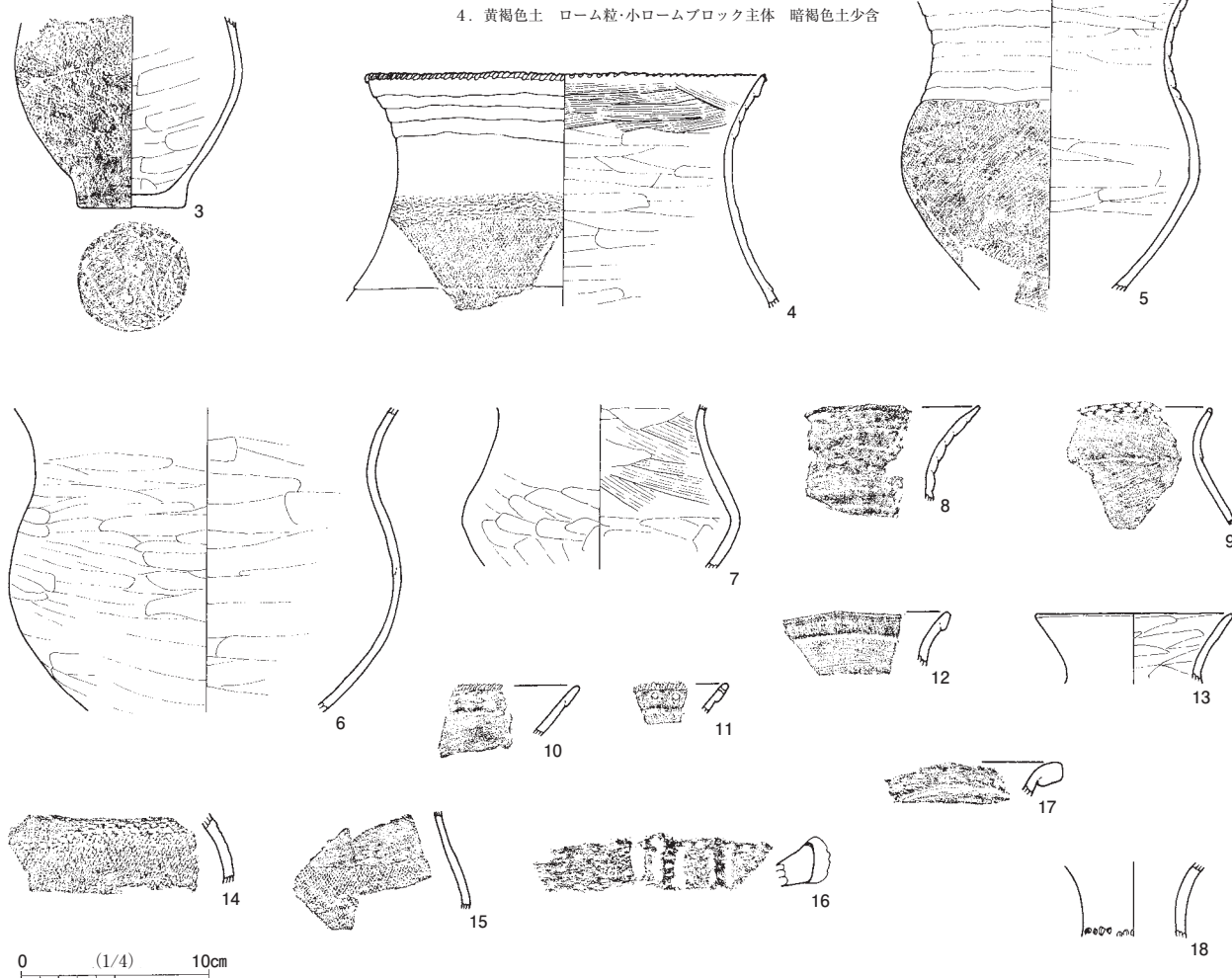
重複関係 なし。

遺物 東側を中心に土器が出土した。1は椀または高杯の口縁部から体部である。口縁部は折返し状である。口唇部は単節縄文、口縁部は羽状縄文が施される。下端にはオオバコの穂の押捺によるキザミが施



SI161土層

- 1. 暗褐色土 ローム粒多含
- 2. 黄褐色土 ローム粒主体 暗褐色土少含
- 3. 黒褐色土 少量のローム粒・ロームブロック含
- 4. 黄褐色土 ローム粒・小ロームブロック主体 暗褐色土少含



第12図 SI161 (1)

される。南関東系の土器である。

2～9・14・15・19～22は甕である。2は複合口縁をもち、口縁部及び胴部に単節RL縄文が施される。胴部中位の輪積痕による段には連続刺突文が施される。底部は木葉痕が残される。3は小型の甕で、胴部外面は単節RL縄文が施される。底部は木葉痕が残される。4の外面は口縁部から頸部にかけて輪積痕を4段有し、頸部上位に3条のS字状結節文、その直下から胴部に附加条のRL縄文が施される。胴部上位に輪積痕の段を一段残す。口唇部は単節縄文の押捺によるキザミが施される。内面は、口縁部付近はハケ状工具によるナデ、横方向のヘラナデが施される。5は小型の甕で、外面は頸部に多段の輪積痕を有する。胴部は附加条のLR縄文が施される。6・7は無文の頸部から胴部で、内外面はヘラナデが施される。7は内面にハケ状工具によるナデが施される。8・9は口縁部から頸部で、8は口縁部から頸部の外面に多段の輪積痕が残され、口唇部には単節縄文が押捺される。9は頸部が短く、胴部との境に段を有する。口唇部は工具による押捺が施され、小波状を呈する。14・15は胴部付近の破片である。14は単節RL縄文、15は附加条のLR縄文が施される。19～21は胴部下位から底部である。19は附加条のLR縄文、20は単節RL縄文、21は附加条のRL縄文が施される。20～22は底部外面に木葉痕が残される。

10～13・16～18は壺である。10・11は同一個体の口縁部付近である。折り返し状で、口唇部に単節縄文が押捺される。11は径2mmほどの孔が2か所穿たれている。12・13は小型の壺の口縁部付近で、12は折り返し状の口縁帯を有する。16～18は長頸の壺である。16・17は口縁部付近で、16は、キザミが施される棒状浮文が2本貼り付けられる装飾壺である。18は頸部に刺突文が施される。2～5・8～11・14・15は在地系、それ以外は南関東系の土器である。

23・24は土製紡錘車である。23は円板状のもので、周縁がわずかに欠損する。径4.5cm、厚さ20.5mm、孔径5.5mm～6.0mmを測る。重量は44gである。24は断面形が台形のもので、約1/2欠損する。最大径3.8cm、厚さ27.5mm、孔径6mmを測る。重量は17gである。

25は暗青灰色をした中生代珪質頁岩製の剥片である。背面には大きくジョイント面が残され、この面を切る右からの剥離痕末端が観察される。打面は2枚の剥離面から構成される。打瘤が発達し、末端はヒンジフラクチャーとなる。右側縁は折れ面にも見えるが、石核側面を切り取った面である。使用痕は顕著でないが、背面左側縁に微細な刃こぼれを認める。この縁辺角は平均43度である。最大長33.5mm、最大幅22.0mm、最大厚8mm、重量は6.6gである。26は灰黄色の軽石である。実測面は鋭利な刃物で切断された面で、図の中央部に刀子状金属器刃先かと推定される半月形の切截痕が残されている。図の左縁辺の丸い部分は原石原礫面であり、裏面は一枚の切截面である。最大長34.5mm、最大幅28.0mm、最大厚21.5mm、重量は5.4gである。

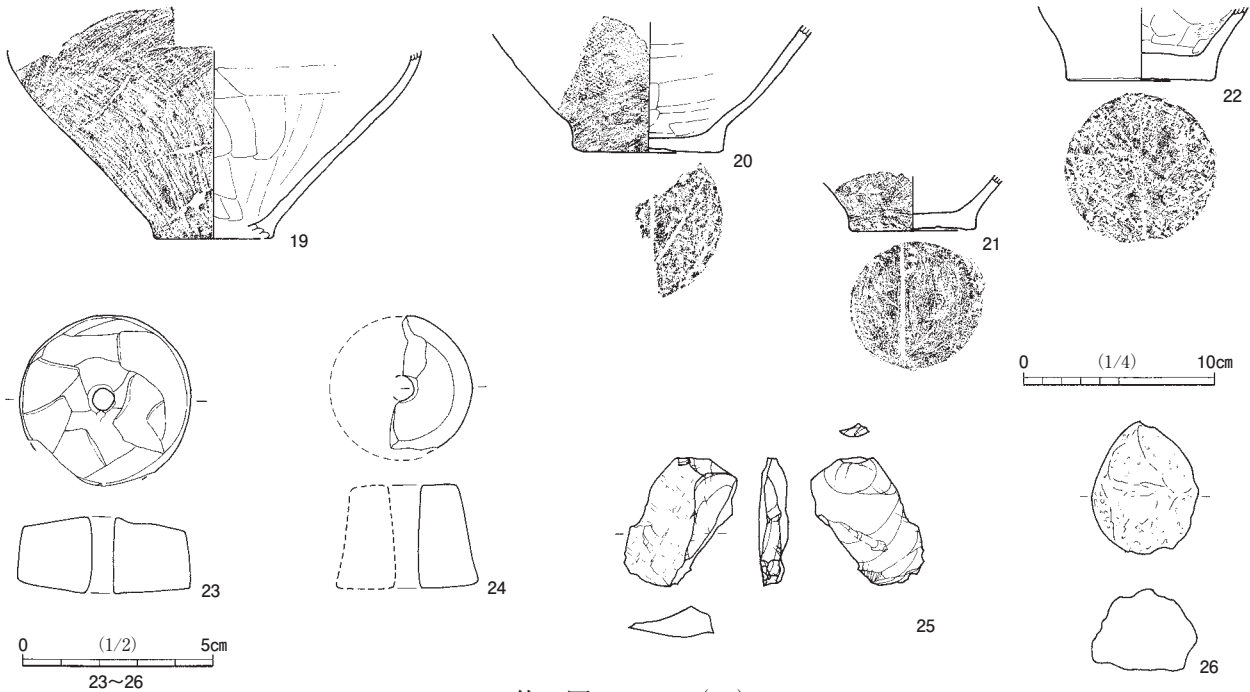
SI163 (第14図、図版4・11)

位置 南東調査区南側にあり、27W-28グリッド付近に位置する。

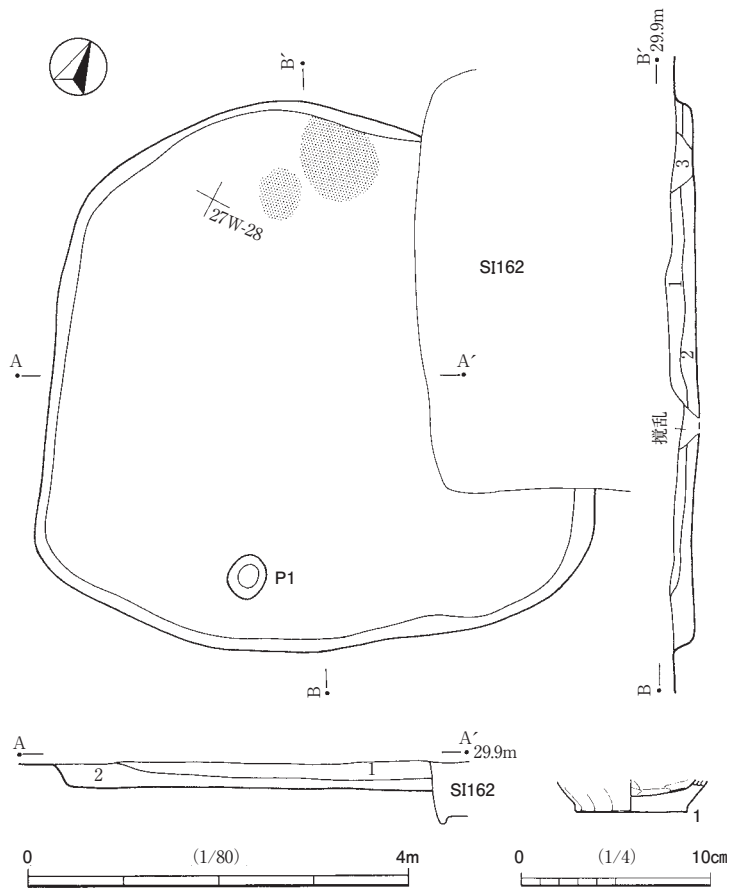
形状・規模 北壁・南壁は弧を描き、四隅の丸味が強い隅丸方形である。南北方向は5.8m、東西方向は5.9m、深さ0.3mを測る。主軸はN-25°-Wである。

床面 平坦で、硬化面等はみられない。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。出入口ピットP1は南壁下に検出された。長径50cm、短径40cm、深さ約18cmを測る。



第13図 SI161 (2)



SI163土層

- 1. 黒褐色土 ローム粒多含
- 2. 暗黄褐色土 ローム粒・ローム小ブロック多含
- 3. 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・炭化粒多、焼土粒少含

第14図 SI163

炉 検出されなかった。

堆積土 多量のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・暗黄褐色土が主体である。北側の床面上に焼土・炭化粒の分布がみられた。

重複関係 SII62・SII83に切られる。

遺物 覆土中から土器細片が少量出土した。重複する住居跡の土器が混入する。1は土師器甕の底部周辺で、胴部外面下端はヘラケズリ、底部外面は無調整で、木葉痕がみられる。

SI165 (第15図、図版5・11)

位置 南東調査区中央付近にあり、27W-07付近に位置する。東側は斜面である。

形状・規模 主軸方向が長い隅丸不整形である。北壁は丸みが強く、東・西・南壁は直線的である。南北方向は5.1m、東西方向は4.1m、深さ0.3mを測る。主軸方位はN-25°-Wである。

床面 硬化面は認められなかった。

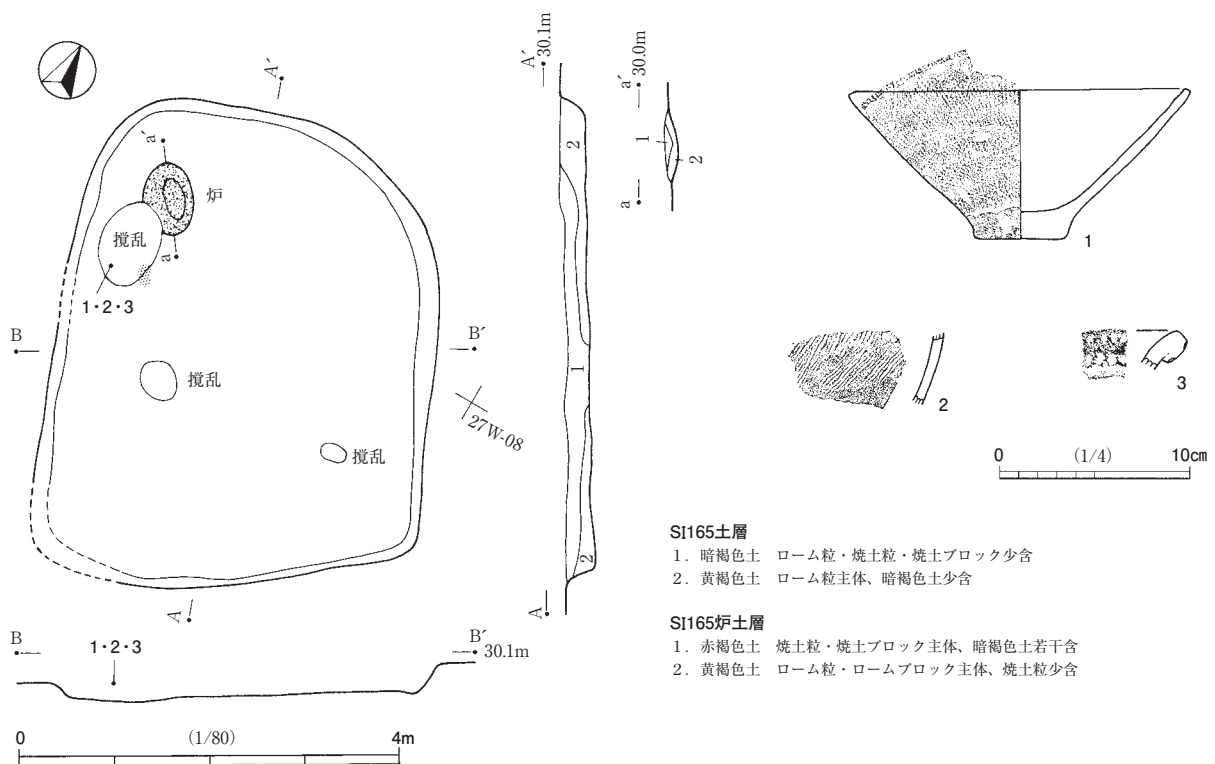
柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

炉 北西隅下に位置する。長径78cm、短径54cm、深さ10cmである。

堆積土 ローム粒・焼土を含む暗褐色土が主体である。

重複関係 なし。

遺物 覆土中から少量出土した。1は体部から口縁部が直線的に開く鉢または蓋である。外面は附加条のRL単節縄文が施される。口唇部は単節縄文が押捺される。2は甕の胴部片である。附加条のLR縄文が



第15図 SI165

施される。3は壺の口縁帯付近で、上・下端に刺突が連続して施される。1・2は在地系、3は南関東系の土器である。

SI168 (第16図、図版5・6・11・20)

位置 南東調査区南側にあり、28W-50付近に位置する。東側は斜面である。

形状・規模 四辺が弧状を呈し、四隅が強く丸味を帯びた隅丸長方形である。主軸方向が長く、南北方向8.5m、東西方向6.8m、深さ0.6mを測る。主軸方位はN-35°-Wである。

床面 硬化範囲は不明である。周溝は検出されなかった。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴は4か所検出された(P 1～P 4)。開口部径0.4m～1.1m、深さ46cm～66cmを測る。P 5は出入口ピットで、開口部径40cm、深さ25cmを測る。P 3・P 4の南側に位置する小ピット(P 6・P 7)は補助的な柱穴であろうか。開口部径25cm、深さ21cm～22cmを測る。貯蔵穴は検出されなかった。

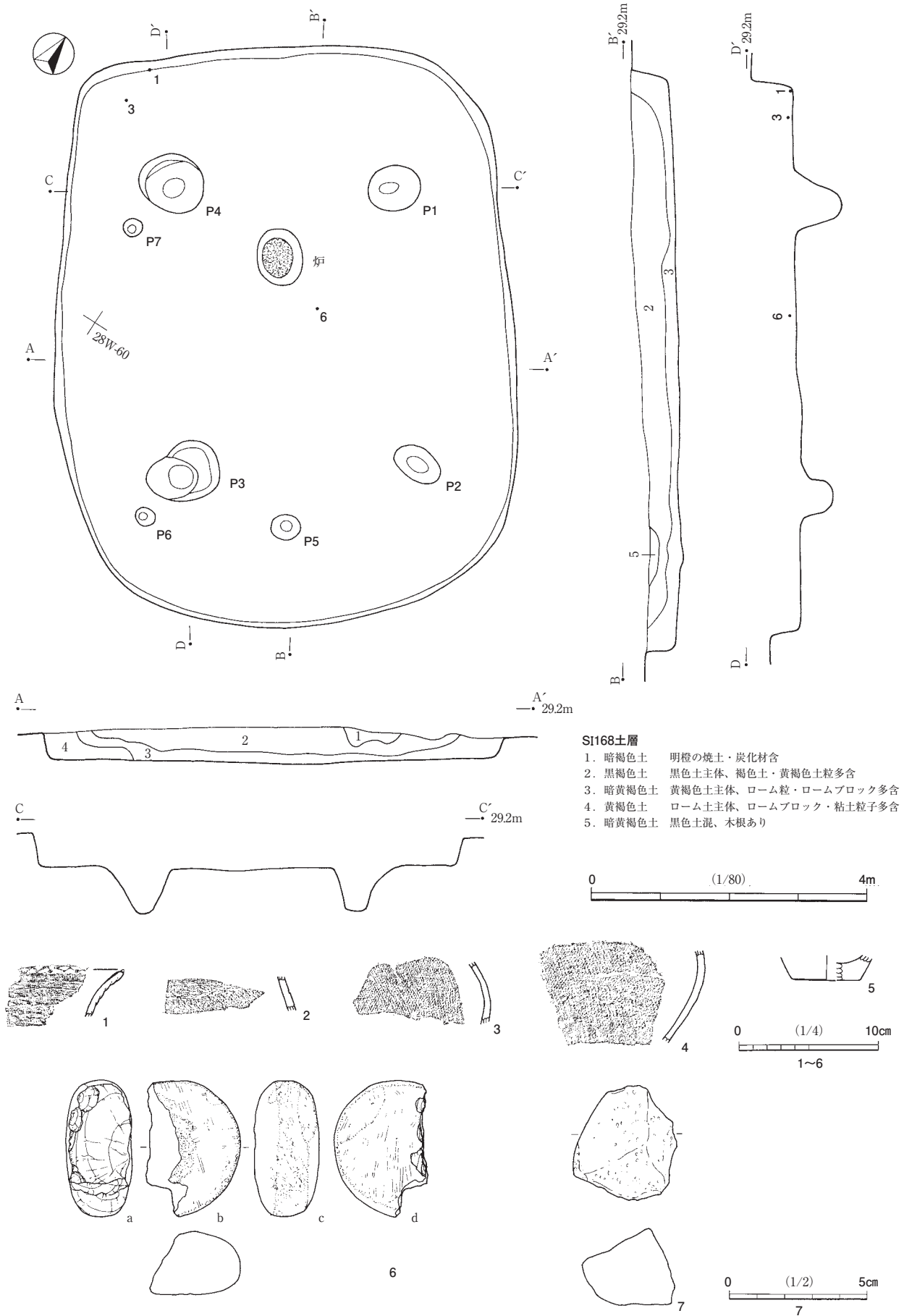
炉 中央北寄りに位置する。平面形は主軸方向に長い楕円形を呈する。長径84cm、短径64cm、深さ14.5cmを測る。

堆積土 上層は黒色土主体、下層はローム粒・ロームブロック主体である。

重複関係 なし。

遺物 覆土中、床面等から少量出土したが、ほとんどが細片である。1～5は甕である。1は口縁部から頸部で、外面に輪積痕を有する。口唇部は工具の押捺により小波状を呈する。2～4は胴部片である。2は2条のS字状結節文、附加条のRL縄文が施される。3は附加条のRL縄文が施される。4は単節RL縄文が施される。5は底部である。1・5は南関東系、2～4は在地系である。

6は角閃石安山岩製の円礫製加工具である。もともとは円形の石器であったと見られるが、半割している。破損面(a面)には周辺からの補修剥離痕が多く観察され、半割後に再生されている。全体に諸種の使用痕が認められるが、これには、①磨痕、②軽度の敲打痕、③強い敲打痕、④強い線条痕という四者がある。b面は①+③で、③は中央部に集中的に認められる。半割面との切り合い関係から、これらは半割前の使用痕である。c面は帯状に②が見られるが、これも半割前の使用痕である。d面には部分的に①が残存するが、幅広く④によって覆われている。①は半割前の使用痕であるが、④は半割後の使用痕である。以上の観察結果から、①+②+③から構成された縄文時代の加工具が拾得され、最終的に④が形成されたものと判断される。本資料が弥生時代後期の竪穴住居跡から出土していることから、④の形成時期がこの時期であった可能性もある。最大長99.5mm、最大幅69.0mm、最大厚48.0mm、重量は430.0gである。7は灰黄色の軽石である。図示した面は割れた面で、背面に軽石原礫面が残されている。複数の切り離し痕が認められる。最大長42.0mm、最大幅38.0mm、最大厚28.0mm、重量は5.4gである。



第16図 SI168

第5章 古墳時代以降

古墳時代以降の遺構は竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑である。今回の調査区では古墳時代前期が竪穴住居跡1軒（SI177）、後期が竪穴住居跡14軒（SI162・164・166・167・169～173・176・178・180・183・184）、土坑1基（SK419）、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒（SI174・175・179・181）、竪穴状遺構1基（SI182）である。中世の遺構、遺物は検出されなかった。

SI162（第17図、図版4・12）

位置 南東調査区南側にあり、27W-18グリッド付近に位置する。遺構の東側は斜面である。

形状・規模 ほぼ正方形である。南北方向は4.5m、東西方向は4.6m、深さ0.6mを測る。主軸はN-33°-Wである。

床面 比較的平坦で、硬化範囲は不明瞭である。周溝はカマド部分を除いて全周する。

柱穴・貯蔵穴 支柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。出入口ピットP1は南壁中央下に検出された。径約45cm、深さ60cmである。

カマド 北壁中央にあり、遺存状態は良好である。全長1.15m、幅1.1m、袖部の高さ0.4mを測る。底面は、焚口から火床面にかけて若干凹む。煙道は、壁より細長く47cm突出する。火床面両脇上方の袖部内側はオーバーハングしていた。袖部は山砂主体の灰褐色土である。

堆積土 やや多量のローム粒・小ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土を主体とする。南壁付近の床面上を主体に若干の焼土・炭化材の堆積がみられた。

重複関係 SI163を切る。

遺物 カマド周辺を中心に土器が出土した。1・2は土師器杯で、いずれも体部と口縁部の境に稜を有する。1は須恵器杯蓋模倣で、半球形の器形である。2は稜に明瞭な段が作出され、口縁部は直線的に開く。高杯の可能性もある。3は土師器の鉢で、カマド手前から出土した。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直立する。4は広口の小型甕で、カマド手前から出土した。5は甌の口縁部から胴部片である。

6～8は須恵器の杯身で、カマド右側の壁下から出土した。静岡県西部の湖西産である。いずれも扁平な杯部に短い蓋受けが付く。6・7は底部回転ヘラ切り後、体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される。

SI164（第18図、図版4・12・13・19）

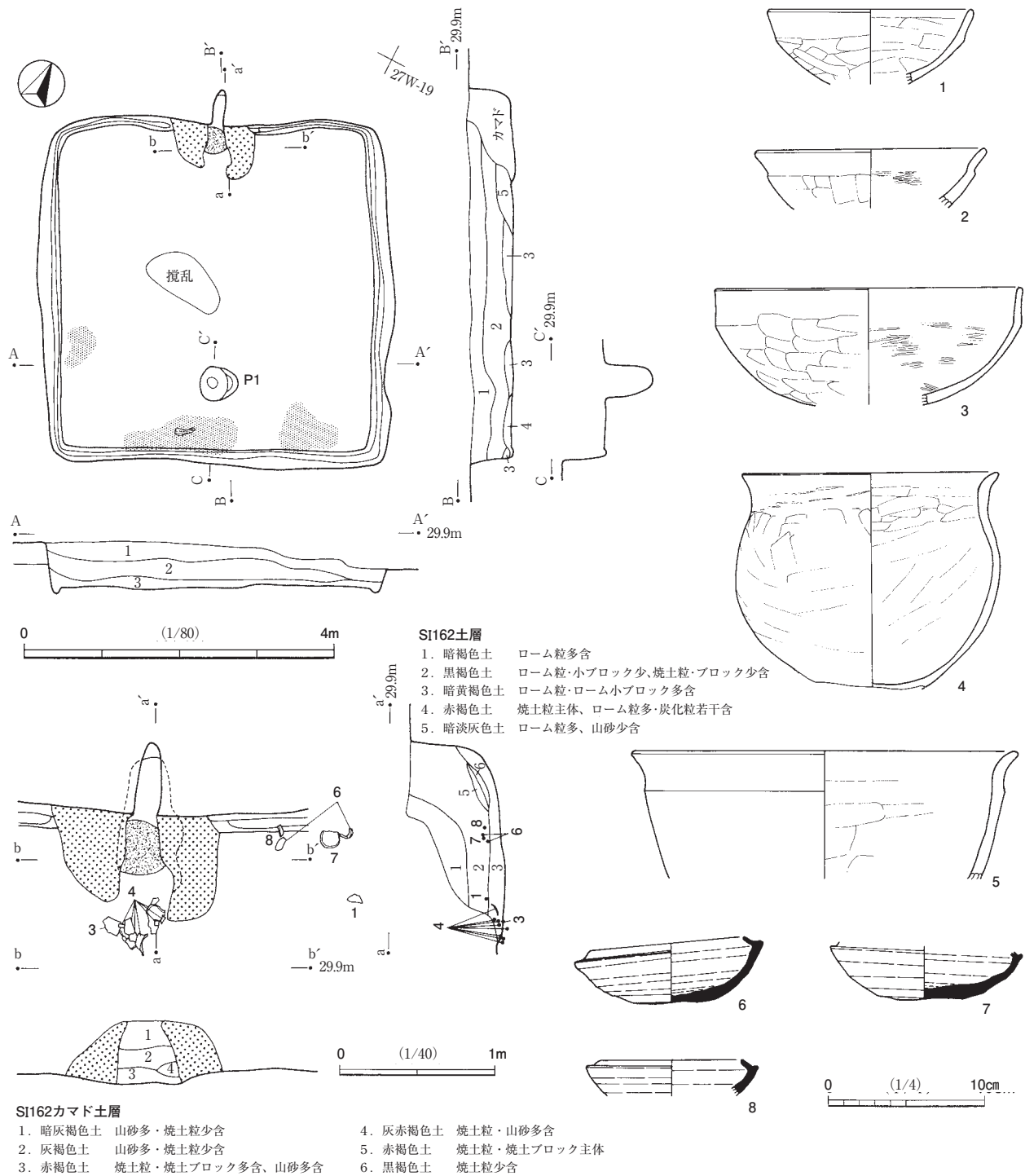
位置 南東調査区南側にあり、27W-58グリッド付近に位置する。西側は斜面である。

形状・規模 主軸方向がやや短い方形である。南北方向は5.8m、東西方向6.1m、深さ0.4mを測る。主軸はN-25°-Wである。

床面 カマド付近、出入口ピットP5付近に硬化面が認められた。ほかは軟質であった。周溝はカマド部分を除いて全周する。幅26cm～43cm、深さ6cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 支柱穴は4か所あり（P1～P4）、開口部径28cm～42cm、深さは34cm～36cm、柱間寸法は2.4m～2.6mを測る。出入口ピットP5は南壁中央下に位置する。開口部径30cm、深さ42cmを測る。

貯蔵穴は検出されなかった。



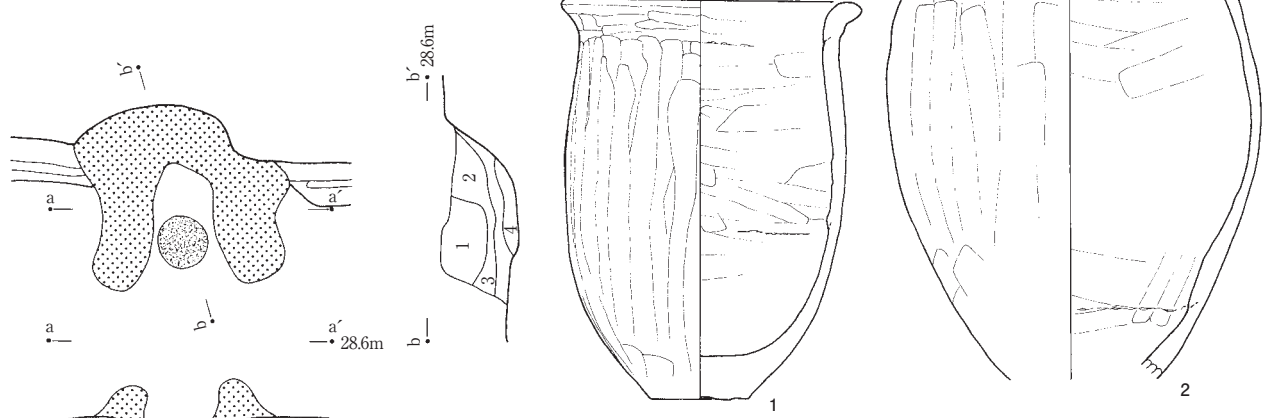
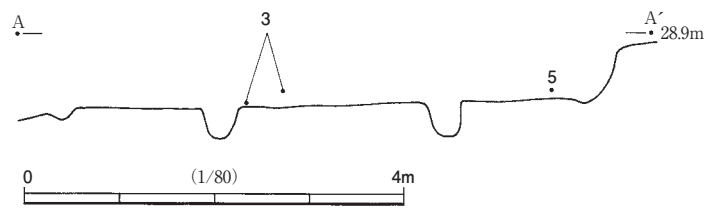
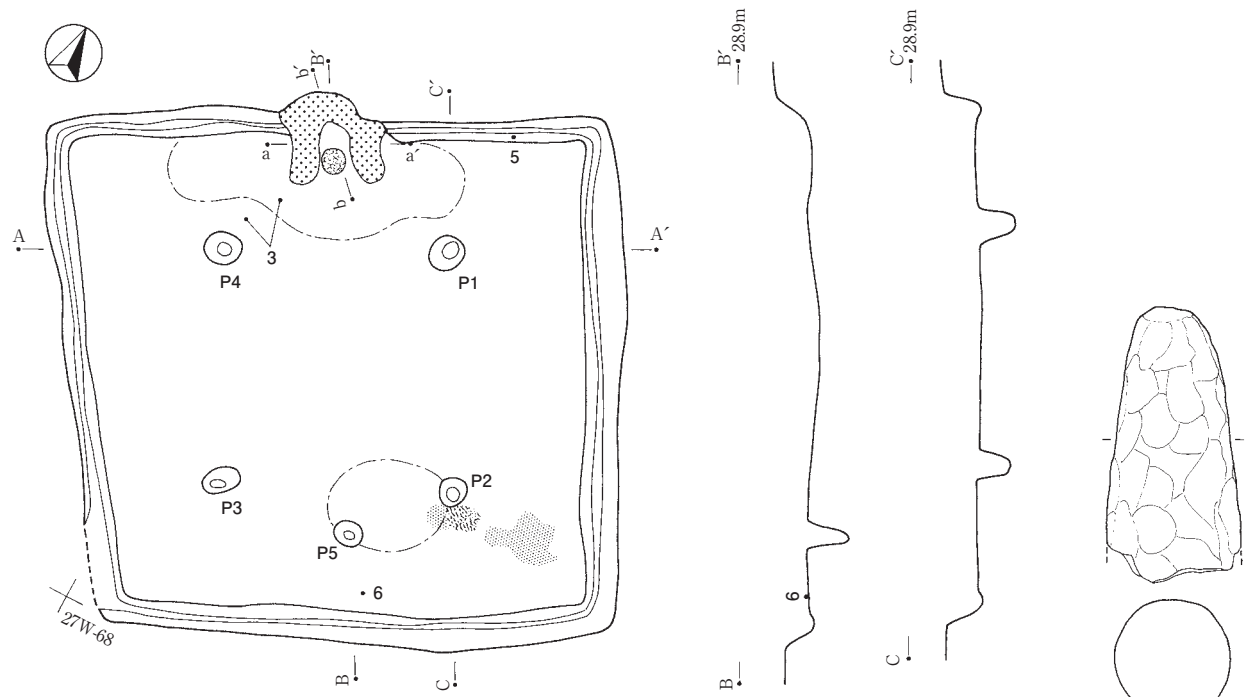
第17図 SI162

カマド 北壁中央に位置する。全長1.0m、幅1.1m、袖部の高さは0.4mを測る。壁外に25cm張り出す。火床面から奥壁にかけて約10cm凹む。袖部は山砂を主体とし、内部は火熱により焼土化していた。

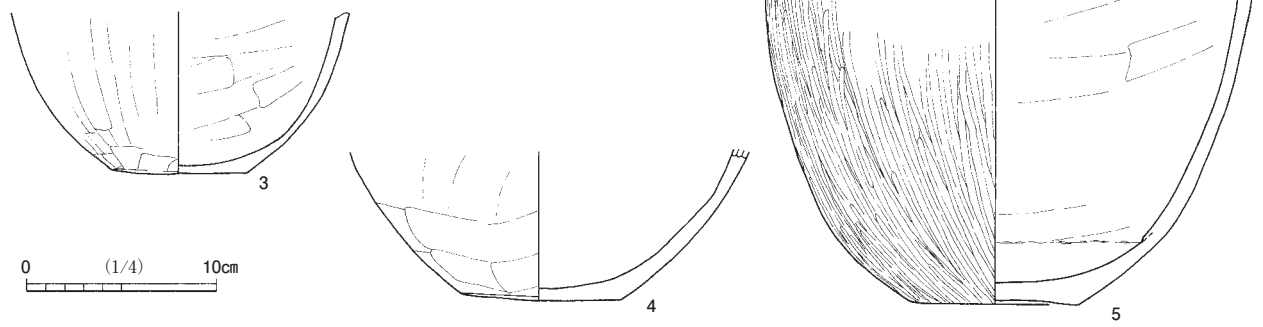
堆積土 ローム粒を主体として少量の暗褐色土を含む。

重複関係 なし。

遺物 覆土中、床面から少量出土した。1～5は土師器甕である。1は小型の甕で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部が外反する。厚手の作りである。2は長胴の甕である。3～5は胴部から底部で、4は



- SI164カマド土層
1. 黄褐色土 暗褐色土少、焼土粒・炭化粒・山砂含
 2. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック主体、ローム粒少含
 3. 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック多含
 4. 暗黄褐色土 暗褐色土多、焼土粒・焼土ブロック少含



第18図 SI164

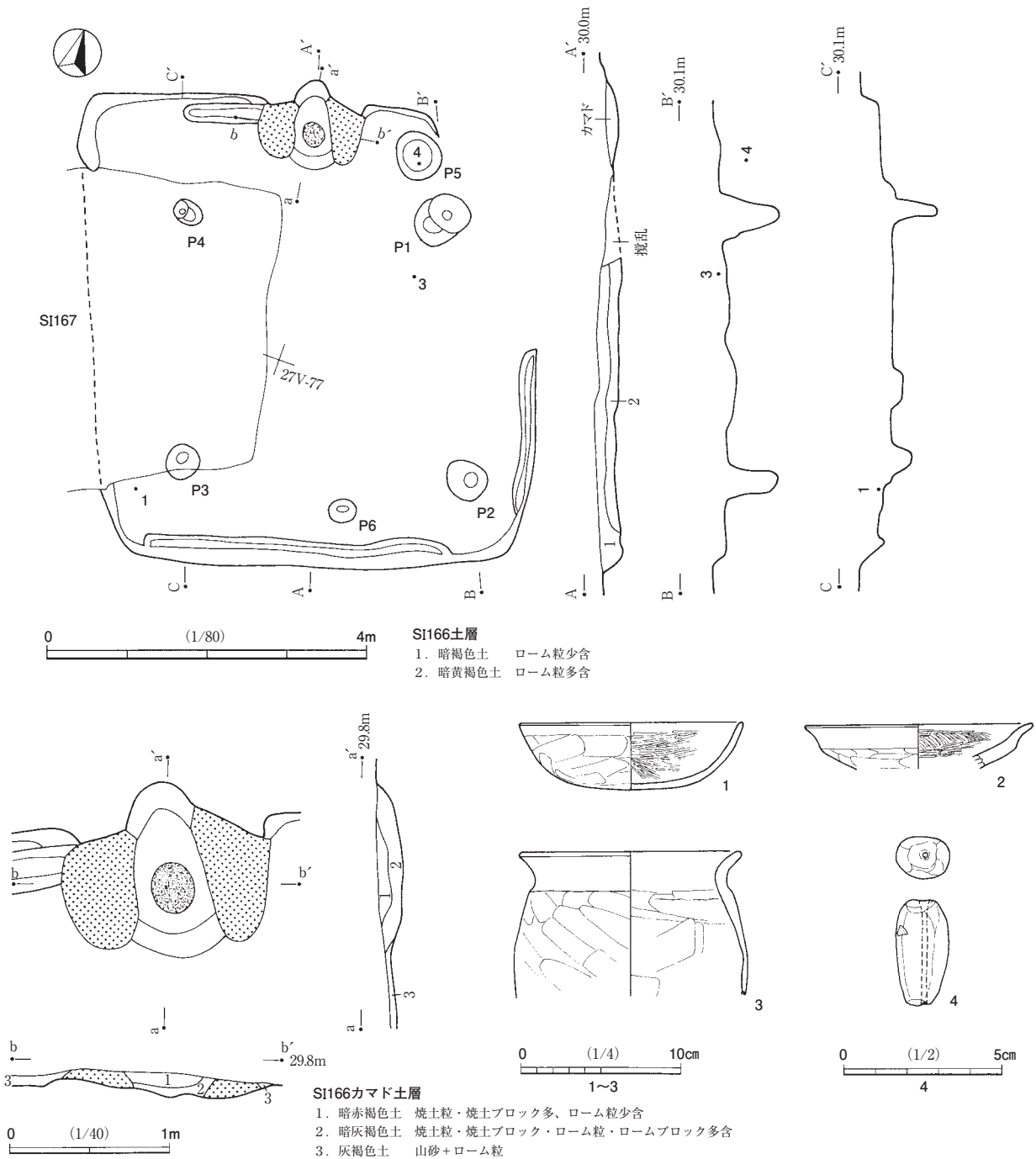
球胴になると思われる。5は、胴部外面に縦方向のヘラミガキが施される常総型甕である。
6は土製の支脚である。

SI166 (第19図、図版5・13・19)

位置 南東調査区中央付近にあり、27V-67付近に位置する。東側は斜面である。

形状・規模 やや隅丸の方形で、北東隅付近は欠失する。南北方向は6.1m、東西方向は5.6m、深さ0.3mを測る。主軸方位はN-14°-Wである。

床面 凹凸が激しく、硬化範囲は不明である。周溝は北・東・南の一部にみられる。幅25cm、深さ10cm



第19図 SI166

を測る。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴は4か所（P1～P4）あり、開口部径30cm～50cm、深さ24cm～74cm、柱間寸法は3.0m～3.2mを測る。貯蔵穴（P5）はカマド東側にあり、径56cm、深さ55cmを測る。出入口ピット（P6）は南壁下に位置する。開口部径30cm、深さ15cmを測る。

カマド 北壁中央に位置する。全長1.1m、幅1.3m、袖部の高さ0.24mを測る。煙道部は壁外に約50cm張り出す。底面は焚口から奥壁にかけて約20cm凹む。袖部は山砂主体で、少量のローム粒・暗褐色土を含む。

堆積土 ローム粒を含む暗褐色土・暗黄褐色土が主体である。

重複関係 SII67に切られる。

遺物 覆土中、貯蔵穴内から少量出土した。1は土師器杯で、体部中位から口縁部が直線的に開くものである。比較的薄手の作りで、内面にヘラミガキが施される。2は土師器高杯の口縁部から体部片である。体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は外反する。3は土師器小型甕の口縁部から胴部である。胴部と口縁部の境に稜を有する。

4は土錘で、上下端に平坦面を有する。高さ3.3cm、最大幅1.7cm、孔径1.5mmを測る。重量7.6gである。

SI167（第20・21図、図版5・13・20）

位置 南東調査区中央付近にあり、27V-76付近に位置する。東側は斜面である。

形状・規模 主軸方向が短く、東西方向に長い不整形である。南北方向は4.2m、東西方向は5.0m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-25°-Wである。

床面 やや凹凸がある。硬化範囲は不明瞭である。周溝は検出されなかった。

柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

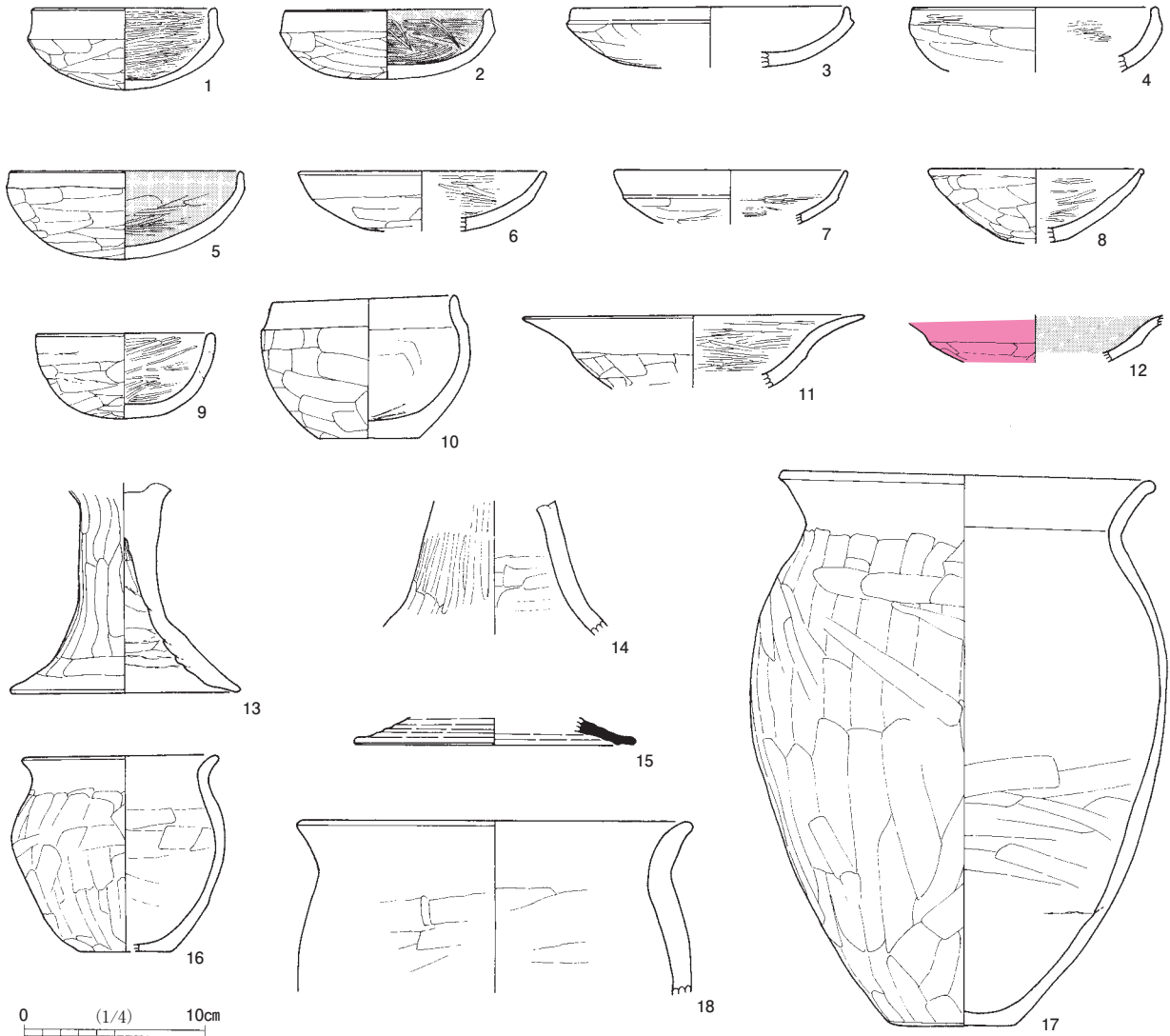
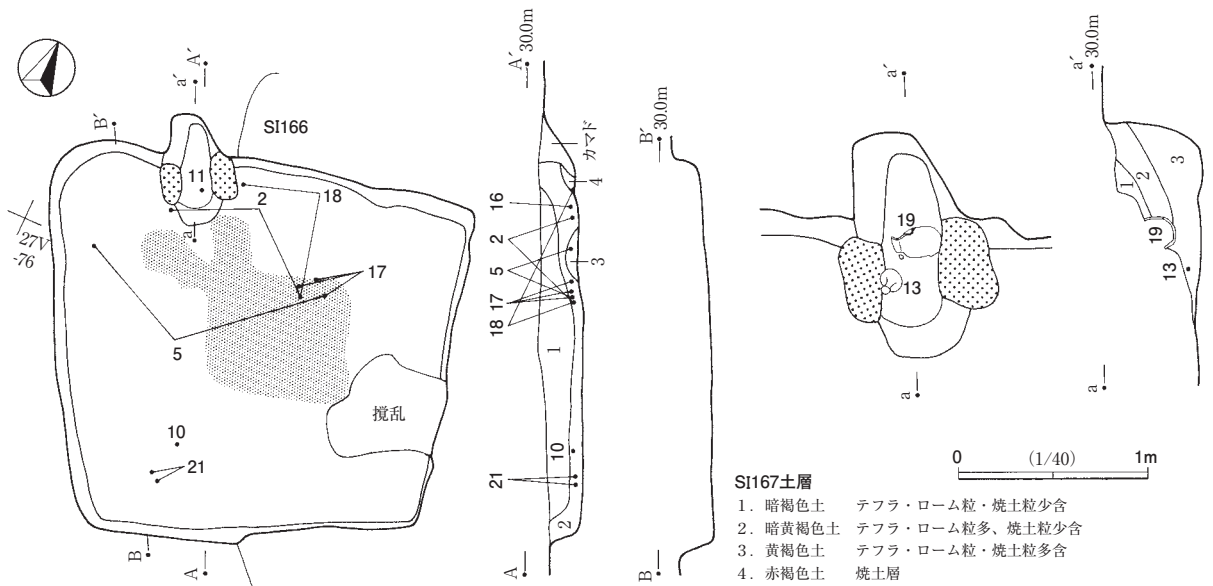
カマド 北壁西側に偏って位置する。全長1.2m、幅0.8m、袖部の高さ0.26mを測る。煙道部は壁外に45cm張り出す。袖部は山砂主体である。

堆積土 ローム粒・焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。カマド前から中央付近には焼土の堆積がみられた。

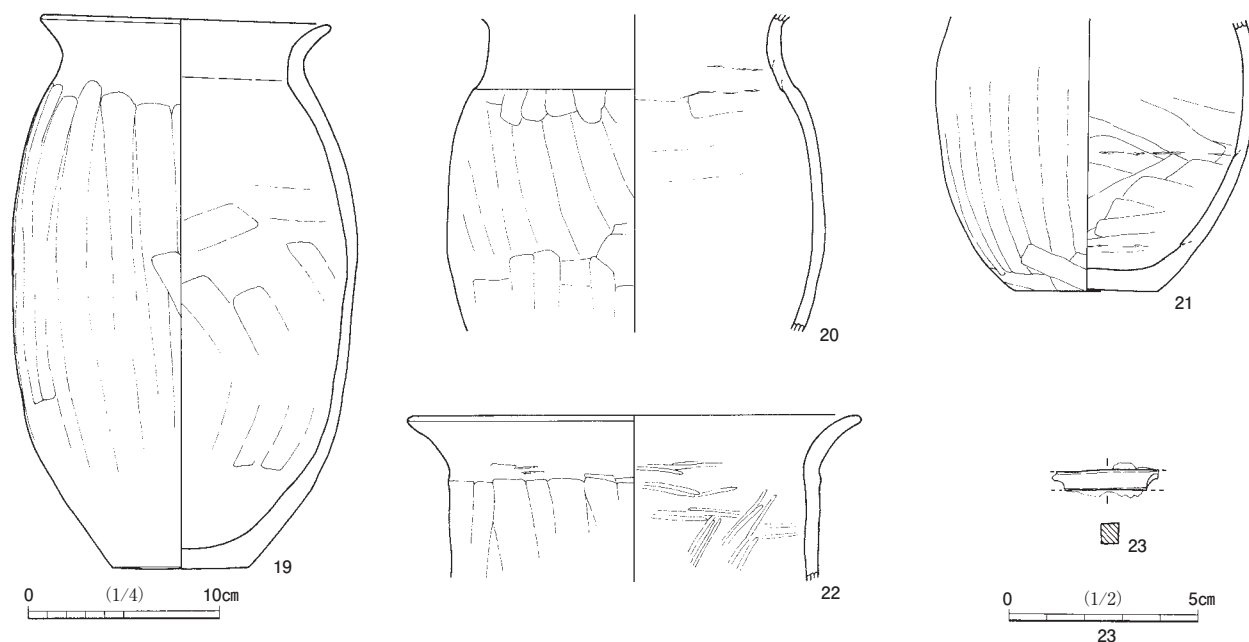
重複関係 SII66を切る。

遺物 カマド内及びその周辺を中心に土器・鉄製品が出土した。1～9は土師器杯である。内面にヘラミガキが施されるものが多い。1～5は口縁部が直立または内傾するもので、3は口縁部と体部の境に段を有し、須恵器の杯身を模倣したもの、それ以外は蓋模倣であろう。2・5は内面に黒色処理が施される。6～8は口縁部が開くもので、6・7は口縁部と体部の境に稜を有する。9は半球形で、口径が小さいものである。10は土師器鉢である。口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。11～14は土師器高杯である。11・12は杯部が遺存し、口縁部はやや外反しながら大きく開く。12は外面に赤彩、内面に黒色処理が施される。13・14は脚部が遺存し、13は中位より上が柱状で、上端が中実である。カマド内から出土した。15は須恵器蓋で、口縁部の内面に身受けの退化したかえりを有する。茨城県南部の新治窯産である。16～21は土師器甕である。口縁部は外反ないし外傾する。19は長胴で、カマド内から出土した。16は小型、21は中型である。22は土師器甕の口縁部から胴部で、内面にヘラミガキが施される。

23は刀子の茎部分の破片と思われる。現存長2.3cm、幅5.5mm、厚さ4.5mmを測る。



第20図 SI167 (1)



第21図 SI167 (2)

SI169 (第22・23図、図版6・14・19)

位置 南東調査区北側にあり、27V-07付近に位置する。東側は緩斜面にかかり、北西壁側は確認トレンチにより欠失した。

形状・規模 主軸の南北方向に長い方形で、長軸3.5m、東西方向3.0m、深さ0.4mを測る。主軸方はN-47°-Wである。

床面 平坦で、カマド前から床面中央にかけて硬化面が広がっている。周溝は、カマド部分を除いて全周すると思われる。

柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

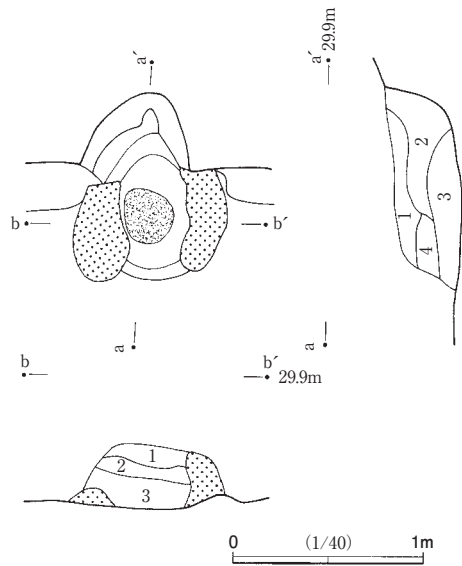
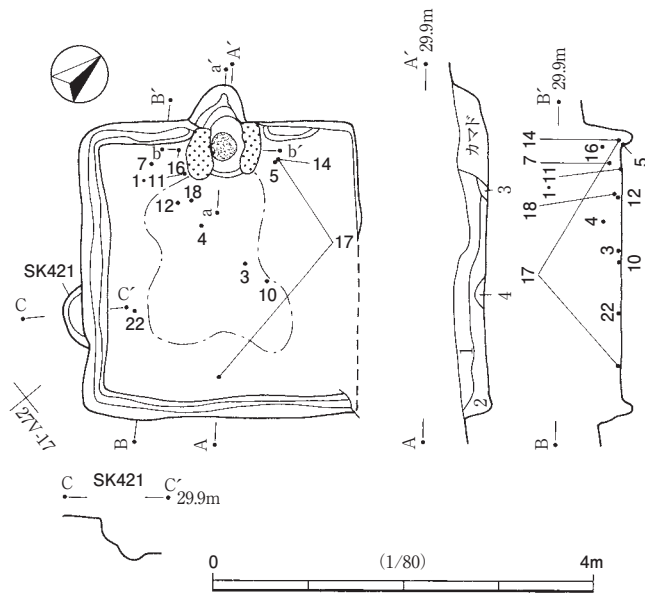
カマド 北東壁中央に位置する。全長2.0m、幅0.8m、袖部の高さ0.25mを測る。煙道部は壁外へ0.4m張り出す。袖部は山砂・ローム粒・ロームブロックを主体とする。南西壁の壁外への張り出しは、旧カマドの煙道部の可能性がある。

堆積土 上層はローム粒を含む暗黄褐色土、下層は暗褐色土を主体とする。

重複関係 なし。

遺物 カマド前から中央付近を中心に土器が出土した。1～8は土師器杯である。1～7は体部内面にヘラミガキが施される。1～6は須恵器蓋を模倣したものであろう。1・2は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。3～5は口縁部が外傾する。5は内面に黒色処理が施される。6・7は半球形のものである。6は内面に黒色処理が施される。7はやや平底気味で、体部が厚手となる。8は偏平な皿状で、口唇部が短く外反する。体部内面に放射状の暗文が施される。薄手の作りで、宮都における杯Cに類似する。9は土師器鉢、10～15・17～20は土師器甕である。9は平底で、胴部は半球形である。口縁部が稜を持って内傾して立ち上がり、口唇部は外反して丸い。内面に黒色処理が施される。甕は、球胴形状の10と長胴・中胴形状の11～14が認められる。17～20は胴部下方から底部である。16・21は土師器甑である。内面に横方向のヘラナデが施される。

22・23は土製支脚の破片である。22は現存長10.4cm、最大幅5.4cm、23は現存長5.75cm、最大幅5.45cmを測る。

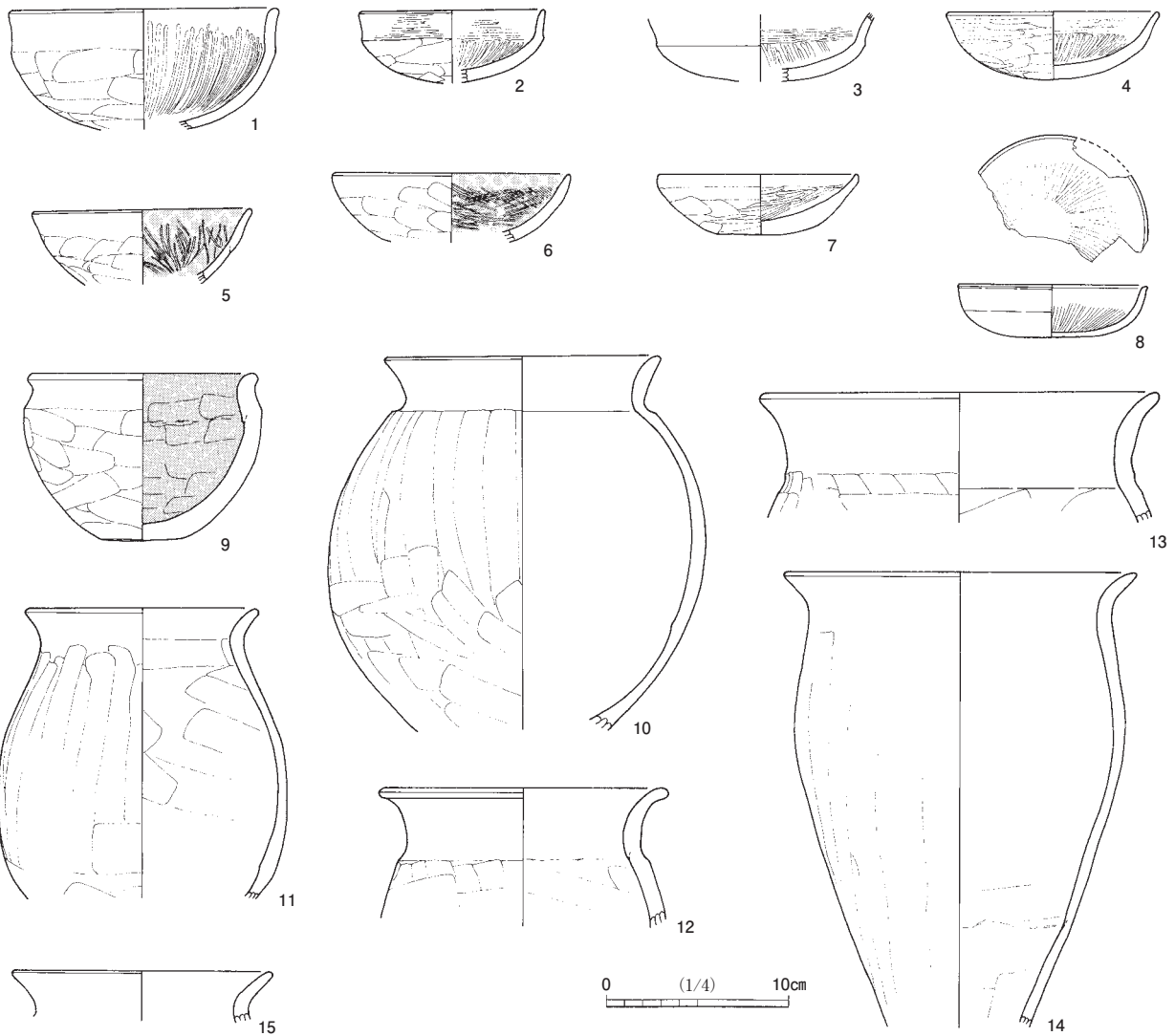


SI169土層

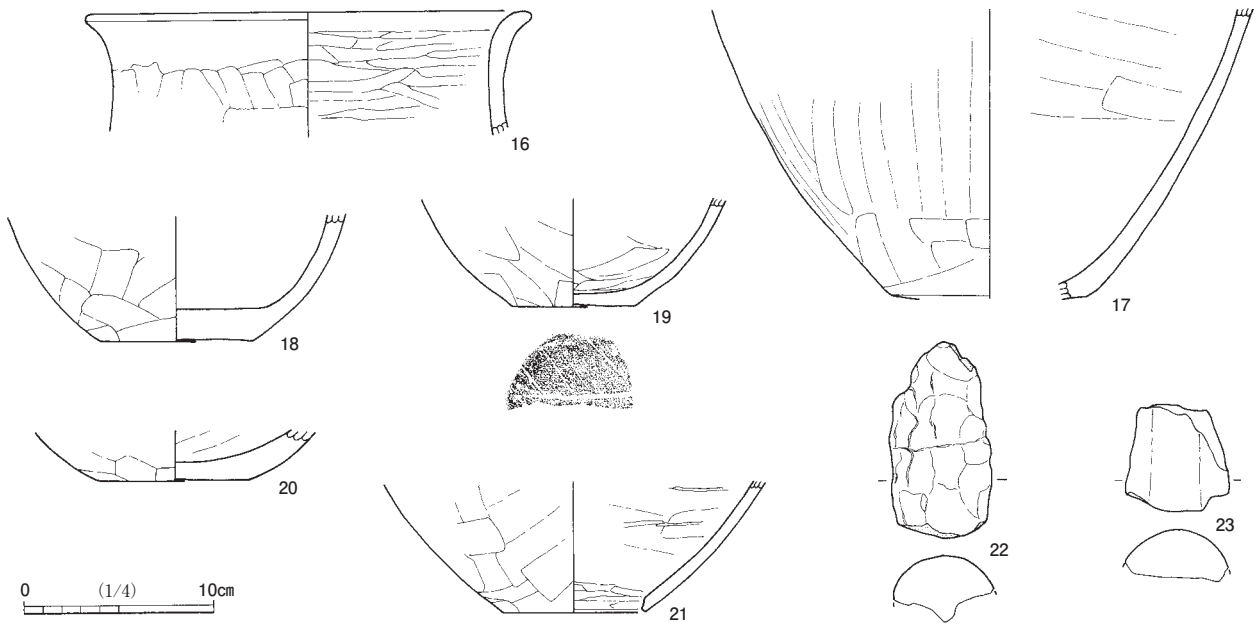
1. 暗黄褐色土 テフラ・ローム粒多、焼土粒少含
2. 暗褐色土 テフラ・ローム粒・焼土粒少含、1層よりやや黒い
3. 黒褐色土 焼土粒・焼土ブロック多含
4. 暗黄灰色土 山砂多含

SI169カマド土層

1. 暗灰黄色土 山砂多、焼土粒少含
2. 赤灰褐色土 山砂・焼土粒・焼土ブロック多含
3. 暗灰褐色土 山砂・焼土粒・焼土ブロック多含
4. 暗赤灰褐色土 山砂・焼土粒・焼土ブロック多含



第22図 SI169 (1)



第23図 SI169 (2)

SI170 (第24・25図、図版6・14・19・20)

位置 南東調査区北側にあり、27U-85付近に位置する。

形状・規模 方形を呈する。主軸はN-70°-Wである。東西方向は6.1m、南北方向は5.7m、深さ0.5mを測る。

床面 やや凹凸があるが、傾斜は少なく比較的平坦である。硬化範囲は不明瞭である。周溝は西壁のカマド付近以外にみられる。幅8.0cm~16cm、深さ8cm~10cmを測る。北側周溝内にピットが1か所検出された。径30.0cm、深さ19.5cmを測る。

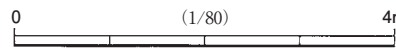
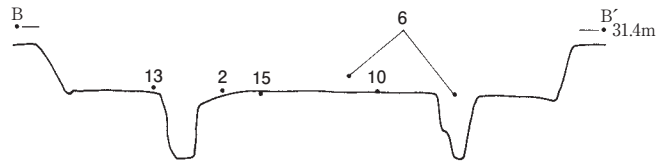
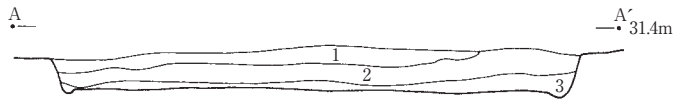
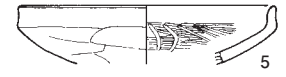
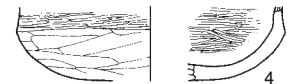
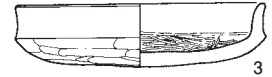
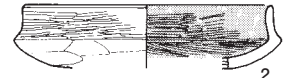
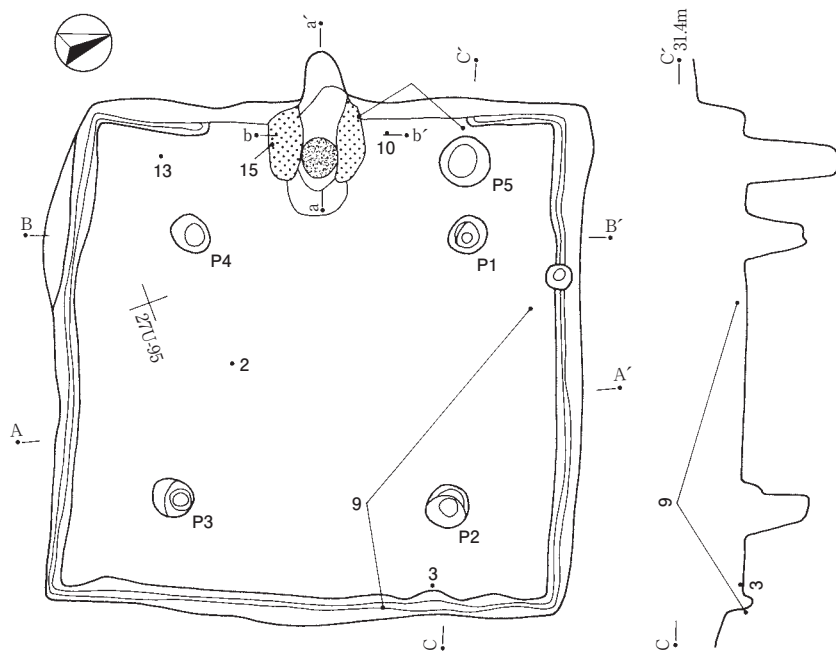
柱穴・貯蔵穴 主柱穴は4か所(P1~P4)検出された。開口口径34cm~41cm、深さ64cm~70cmを測る。貯蔵穴(P5)は西壁カマド北側に1か所検出された。平面形は円形で、径0.5m、深さ1.0mを測る。

カマド 西壁ほぼ中央に位置する。上部の遺存状態はあまりよくなかった。全長1.75m、幅1.03m、袖部の高さ約0.25mを測る。煙道は壁外へ55cm張り出す。焚口の掘り込み及び火床部は比較的明瞭である。袖部の上部は山砂主体、下部はローム粒・ロームブロックを主とする。

堆積土 テフラ・ローム粒を主とする。

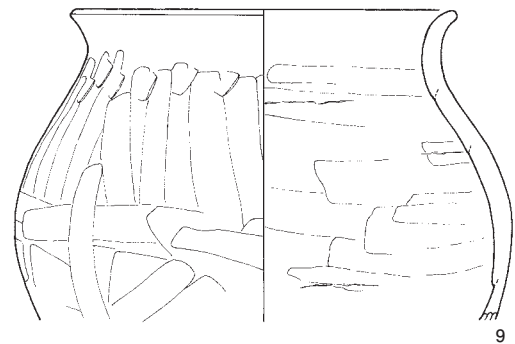
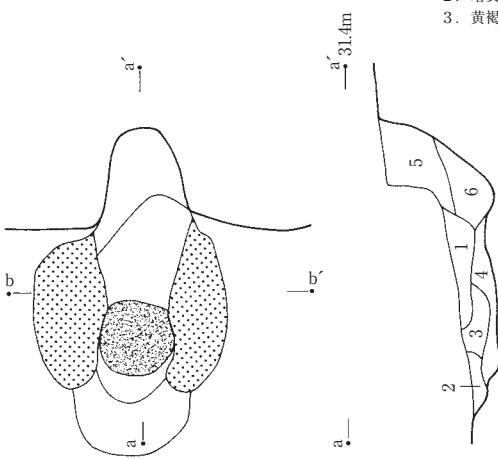
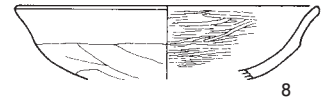
遺物 カマド付近を中心に全体から出土した。1~8は土師器杯である。ヘラミガキが施されるものが多い。1・2は口縁部と体部の境が突出し、口縁部が直立する。須恵器杯身を模倣したものである。1は外面、2は内面に黒色処理が施される。3~5は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部はわずかに外反しながら立ち上がる。6~8は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部は外傾ないし外反する。6は内外面に赤彩が施される。8は高杯の可能性ある。9~13は土師器甕である。9~11は頸部がくびれる形状である。

14は土製勾玉である。長さ2.65cm、幅0.9cm、孔径1.8mm~2.8mm、重量は3.65gである。15は土製支脚である。下方を欠損する。現存長23.5cm、最大幅10.1cmを測る。16は緻密な白色砂岩製の円礫製加工具である。平面、断面形ともに長円形の厚みのある形態で、表裏面に磨痕が、側縁部に帯状敲打痕が観察され



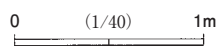
SI170土層

- 1. 黄褐色土 テフラ・ローム粒主体、暗褐色土少含
- 2. 暗黄褐色土 テフラ・ローム粒多含、1層より黒い
- 3. 黄褐色土 ローム粒主体、暗褐

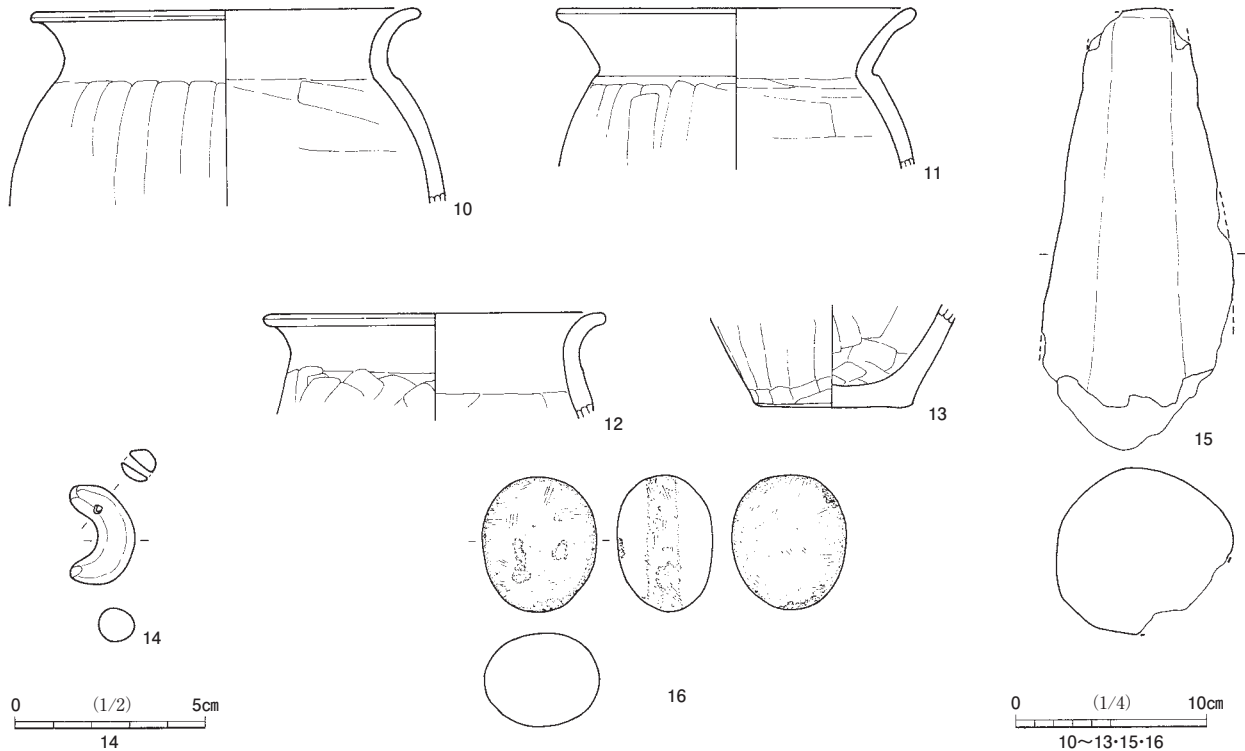


SI170カマド土層

- 1. 灰黄褐色土 ローム粒主体、山砂・焼土ブロック多含
- 2. 暗褐色土 ロームブロック多、焼土粒少含
- 3. 赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック主体、ローム粒・ロームブロック少含
- 4. 暗灰黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体、山砂・焼土粒少含
- 5. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
- 6. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック多、焼土粒少含



第24図 SI170 (1)



第25図 SI170 (2)

る。研磨は入念で、砂岩本来の質感は失われ、きわめて滑らかである。側縁部の敲打痕は細かな点状敲打痕の集合したもので、長期にわたる使用が想定される。近傍で採集された縄文時代の石器の再利用品であろうか。最大長71.5mm、最大幅60.5mm、最大厚50.5mm、重量は300.0gである。

SI171 (第26図、図版6・15・19)

位置 南東調査区南側にあり、27V-35付近に位置する。

形状・規模 四隅が丸味を帯びた不整な方形である。主軸はN-25°-Wである。南北方向5.2m、東西方向5.5m、深さ0.3mを測る。

床面 軟質である。

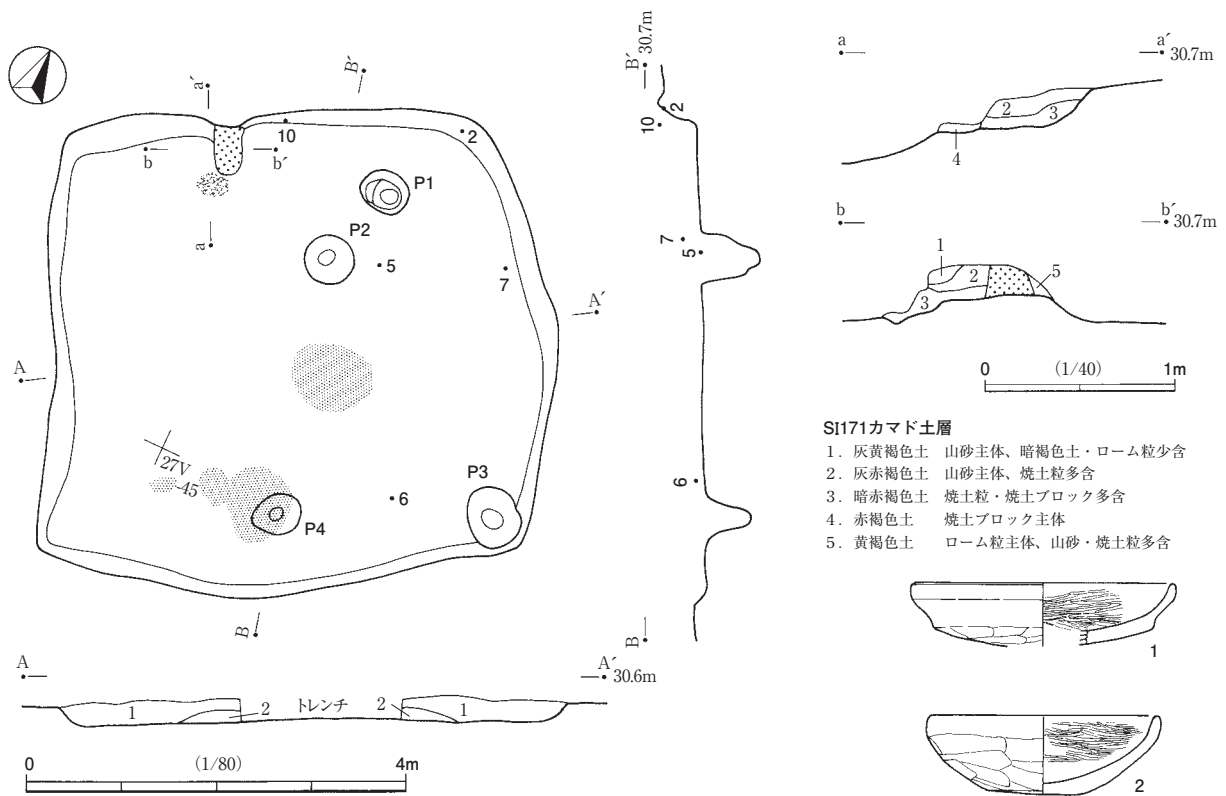
柱穴・貯蔵穴 ピットは4か所検出された(P1～P4)。主柱穴は検出されていない。北側のP1は貯蔵穴の可能性がある。開口部径52cm、深さ49cmを測る。P4は南壁中央下に位置し、出入口ピットの可能性がある。開口部径43cm 深さ50cmを測る。

カマド 北壁の西側に偏って位置する。袖部の左側は欠失していた。全長88cm、袖部の高さ17cmを測る。火床面は明瞭である。

堆積土 ローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土を主体とする。

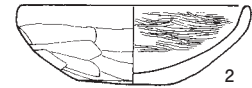
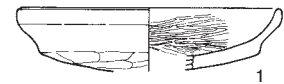
重複関係 SI181に切られる。

遺物 東側を中心に土器等が出土した。1～4は土師器杯である。1は体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は中位から直立する。2は半球形であるが、底部は平底気味で、口縁部は直立する。須恵器杯蓋を模倣したものである。3・4は偏平な器形で、体部と口縁部の境に稜を有し口縁部は直線的に開く。5～9は土師器甕である。いずれも球形胴で、6の口縁部は「コ」字形を呈する。



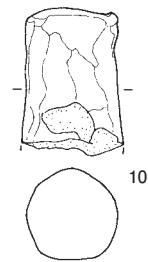
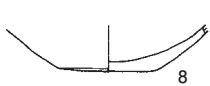
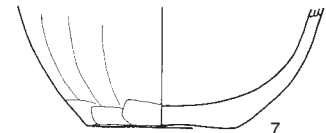
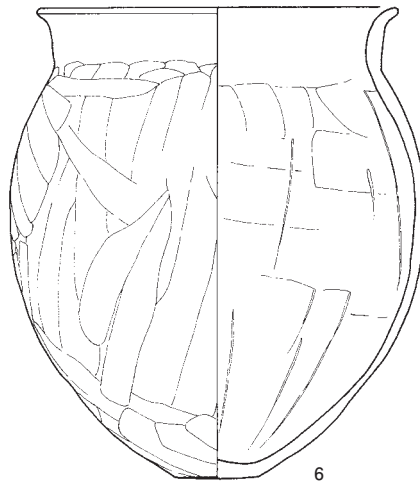
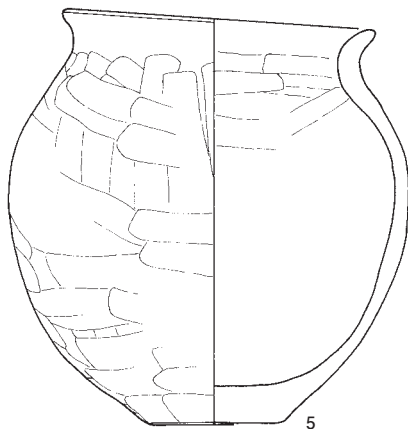
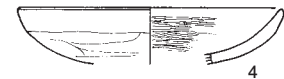
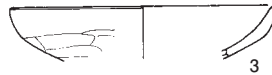
SI171カマド土層

1. 灰黄褐色土 山砂主体、暗褐色土・ローム粒少含
2. 灰赤褐色土 山砂主体、焼土粒多含
3. 暗赤褐色土 焼土粒・焼土ブロック多含
4. 赤褐色土 焼土ブロック主体
5. 黄褐色土 ローム粒主体、山砂・焼土粒多含



SI171土層

1. 暗黄褐色土 ローム粒多含、ロームブロック若干含
2. 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多、焼土粒少含、1層よりやや黒い



0 (1/4) 10cm

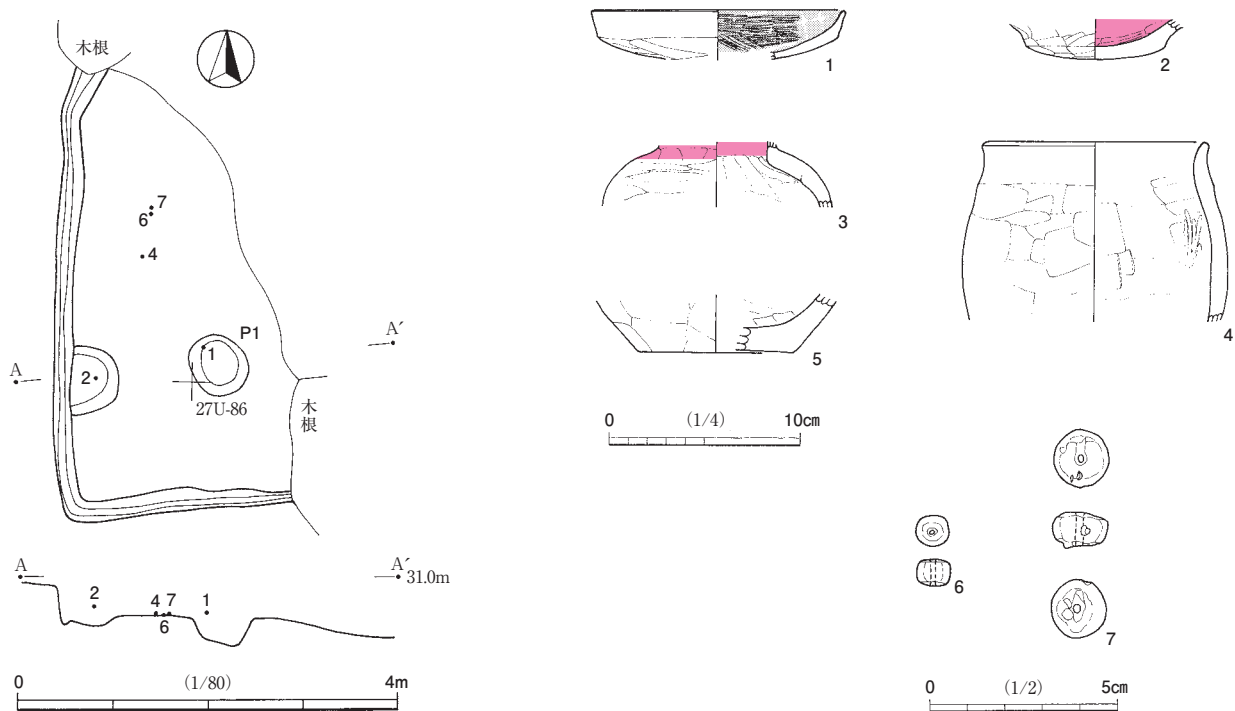
第26図 SI171

10は土製支脚で、下方を欠損する。現存長7.8cm、最大幅5.4cmを測る。

SI172 (第27図、図版7・15・19)

位置 南東調査区南側にあり、27U-75付近に位置する。斜面下方の東側は削平されていた。

形状・規模 方形と推測される。主軸方位はN-0°(座標上真北)である。南北方向は4.9m遺存する。



第27図 SI172

深さは30cmを測る。

床面 比較的平坦である。硬化範囲は不明瞭である。周溝は全周し、幅12cm～30cm、深さ2cm～13cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 支柱穴は1か所（P1）検出された。開口部径63cm、深さ30cmを測る。西壁に取りついた浅い落ち込みは用途不明である。径70cm、深さ10cmを測る。

カマド 検出されなかった。

堆積土 不明。

重複関係 なし。

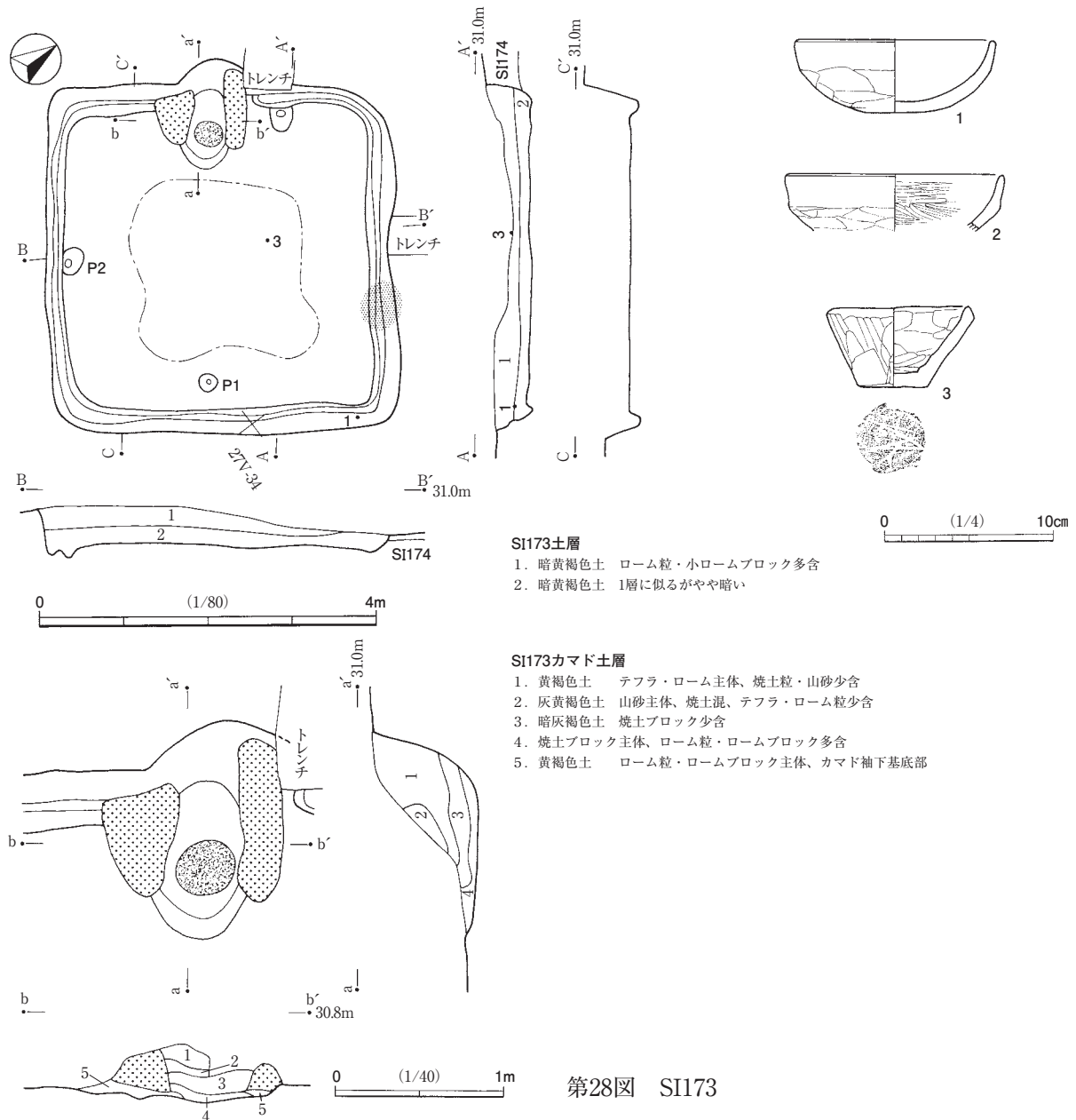
遺物 覆土中、床面から土器・土製品が出土した。1・2は土師器杯である。1は扁平な器形で、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直線的に開く。内面はヘラミガキ後、黒色処理が施される。2は小さく浅い体部から底部付近で、体部と底部の境は稜を有する。体部内面は赤彩が施される。3は土師器壺の胴部片である。頸部付近は内外面とも赤彩が施される。4・5は土師器甕である。4は口縁部が短い小型甕である。5は底部付近の破片である。

6は土製の丸玉である。直径9.0mm、高さ8.5mm、孔径1.2mm、重量は0.68gである。7は土製の扁平な玉である。直径16.0mm、高さ9.5mm、孔径2.0mm、重量は2.14gである。

SI173（第28図、図版7・15）

位置 南東調査区北側にあり、27V-23付近に位置する。

形状・規模 やや四隅が丸味を帯びた方形を呈する。主軸はN-55°-Wである。東西方向4.5m、南北方向4.2m、深さ52cmを測る。



第28図 SI173

床面 比較的平坦で、硬化面は顕著ではないが中央にみられる。周溝はカマド部分を除いて全周する。幅40cm~70cm、深さ8.0cm~16cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴は検出されなかった。南壁下のP1はカマドと正対する位置にあり、出入口ピットと考えられる。開口部径42cm、深さ10cmを測る。南壁中央下にもピット(P2)がある。開口部径26cm、深さ15cmを測る。

カマド 西壁中央に位置する。全長1.3m、幅1.1m、袖部の高さ0.24mを測る。袖部は山砂主体である。

堆積土 多量のローム粒・ロームブロックを含む暗黄褐色土が主体である。

重複関係 SI174に切られる。

遺物 覆土上層を中心に土器が出土した。1・2は土師器杯である。1は半球形で、口縁部は直立する。須恵器の杯蓋を模倣したものである。2はSI174出土として取り上げられたものであるが、その様相から

SI173に属するものと判断した。口縁部と体部の境は稜を有し、口縁部はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。内面はヘラミガキが施される。須恵器の杯蓋を模倣したものである。3は手捏ねに近い粗雑な作りの土器である。体部は直線的に開き、口縁部は短く直立する。

SI174 (第29図、図版7・15)

位置 南東調査区北側にあり、27V-35付近に位置する。

形状・規模 方形を呈する。主軸方位はN-33°-Wである。主軸の南北方向は約4.4m、東西方向は4.1m、深さ0.4mを測る。

床面 凹凸があるが、おおむね平坦である。硬化面は認められなかった。SI173との重複部分においては明瞭な床面は検出されなかった。周溝は北西壁のカマド西側を除いて全周する。幅15cm～31cm、深さ5cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴は4か所検出された(P1～P4)。開口部径34cm～78cm、深さ38cm～47cmを測る。P1の北西側に接するP5は貯蔵穴である。開口部は楕円形で、径46cm、深さ46cmを測る。

カマド 北西壁中央に位置する。全長1.6m、幅1.1m、袖部の高さ0.4mを測る。壁外の煙道部の掘り込みは長さ約0.6mを測る。袖部は山砂を主体とする。

堆積土 多量のローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土である。

重複関係 SI173を切る。

遺物 覆土中、カマド及び柱穴内から少量出土した。1の須恵器蓋は、重複するSI173からの出土として取り上げられたものであるが、その様相からSI174に属するものと判断した。身受けのかえりは断面三角形である。2～4は須恵器杯である。底部は、2・3は手持ちヘラケズリ、4は回転ヘラケズリが施される。これらはいずれも新治窯産である。

SI175 (第30図、図版7・15)

位置 南東調査区北端にあり、27U-73付近に位置する。

形状・規模 非常に残りが悪く、東側は木根により攪乱され、南側壁付近は欠失していた。形状は不整な方形である。主軸方位はN-20°-Wである。東西方向は4.2m、深さ3cm～5cmを測る。

床面 攪乱が著しく硬化面は不明である。周溝は検出されなかった。

柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

カマド 北壁中央に位置する。全長1.0m、幅0.94cm、袖部の高さ11cmを測る。壁外への掘り込みは45cmを測る。

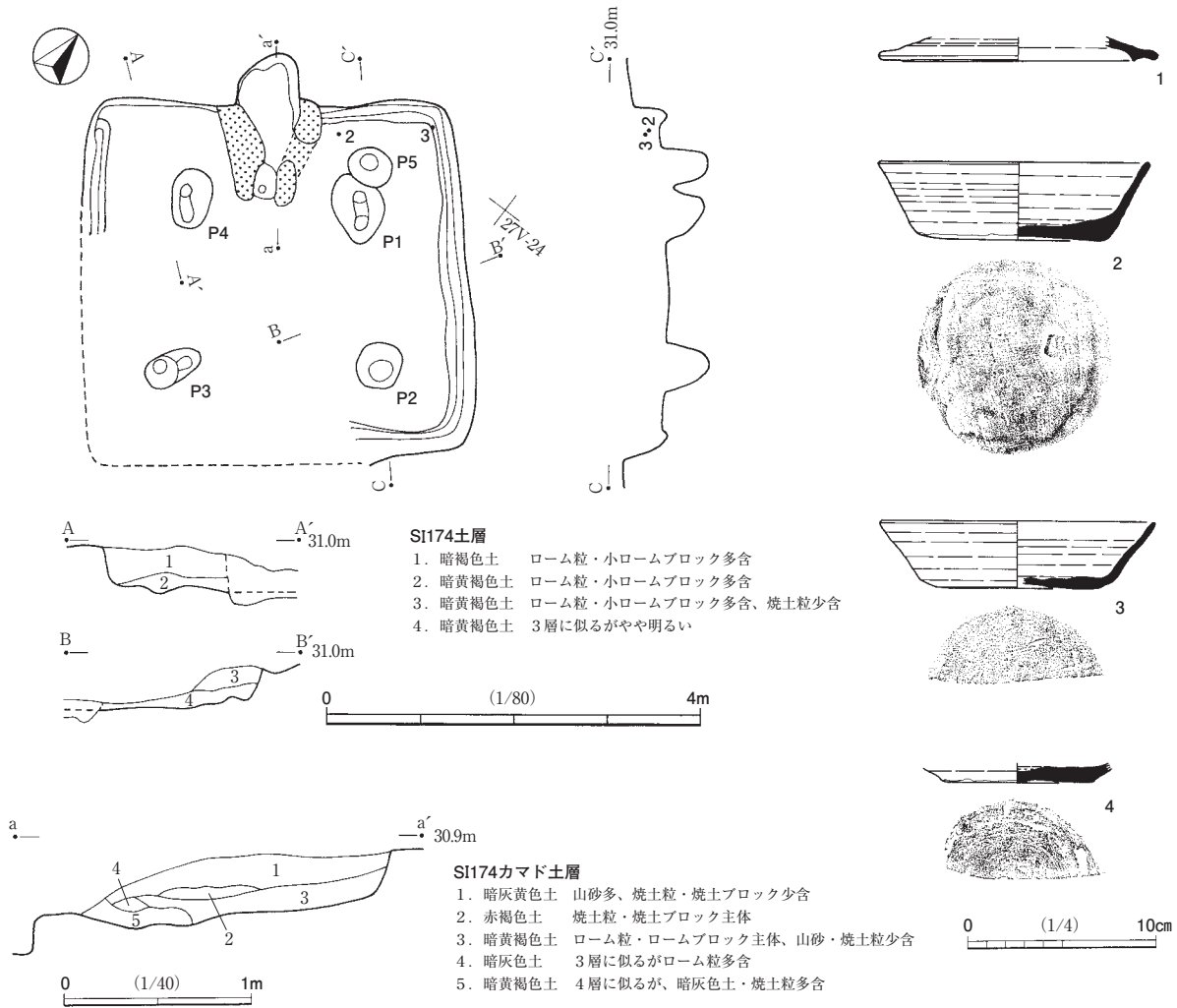
堆積土 ほとんど遺存なく不明。

重複関係 SI182に切られる。

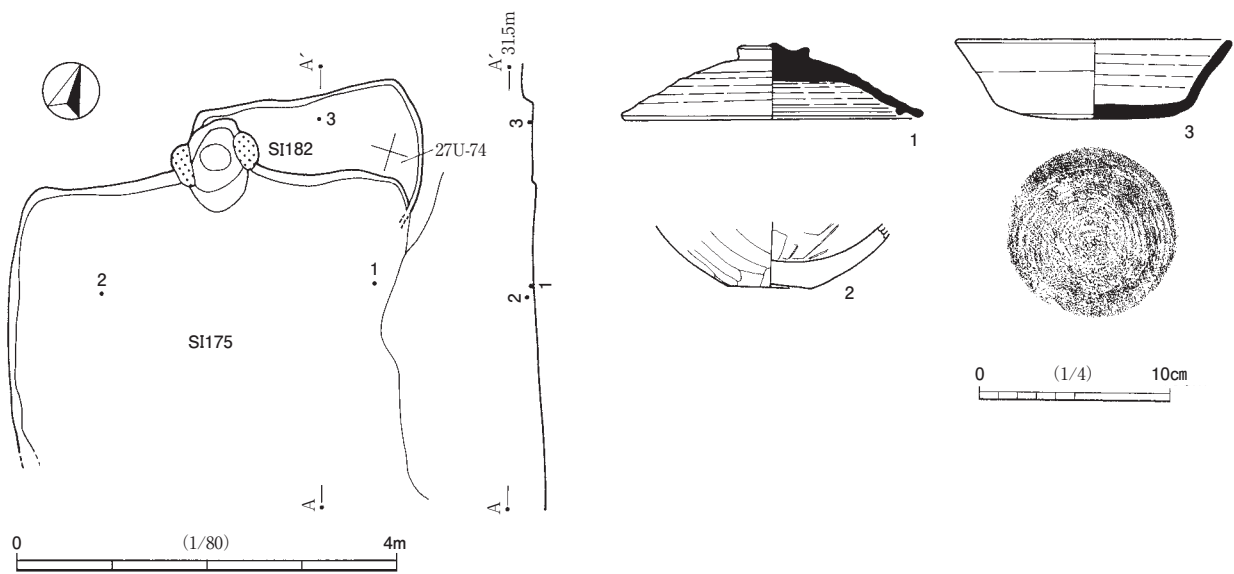
遺物出土状況 覆土中、床面およびカマドから少量出土した。1は須恵器蓋である。頂部には扁平な宝珠状のつまみが付く。内面には身受けのかえりが付される。2は土師器甕の胴部下方から底部である。

SI182 (第30図、図版9・15)

位置 南東調査区北端にあり、27U-73付近に位置する。



第29図 SI174



第30図 SI175・SI182

形状・規模 不整な方形を呈する竪穴状遺構である。主軸方位はN-28°-Wである。北壁は2.1m、深さ10cmを測る。

床面 全体に平坦で、凹凸はない。

柱穴・貯蔵穴 遺存部分には検出されず、重複部分にも検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

堆積土 ほとんど遺存なく不明。

重複関係 SI175を切るが、床面はSI175の床面よりも上に作られた。

遺物 土器が少量出土した。3は須恵器杯である。底部はやや丸味をもった平底で、回転ヘラケズリが施される。体部はやや外反しながら開く。

備考 遺構の性格はやや不明瞭である。SI175の上に構築されたと思われる。古墳時代後期の所産で、SI175と同時期である。

SI176 (第31～33図、図版7・8・15～17・19・20)

位置 南東調査区北端にあり、27V-12付近に位置する。

形状・規模 方形を呈する。主軸方位はN-20°-Eである。南北方向は5.9m、東西方向は5.8m、深さ0.7mを測る。

床面 凹凸は少ないが、北西側は下がっている。顕著でないが、中央に硬化面がみられる。周溝は東壁南側と北西隅付近を除いて施される。幅26cm～48cm、深さ2cm～6cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 主柱穴は4か所(P1～P4)あり、開口部径42cm～58cm、深さ38cm～56cmを測る。貯蔵穴(P5)は北壁東側下に位置する。卵円形を呈し、開口部径66cm、深さ82cmを測る。

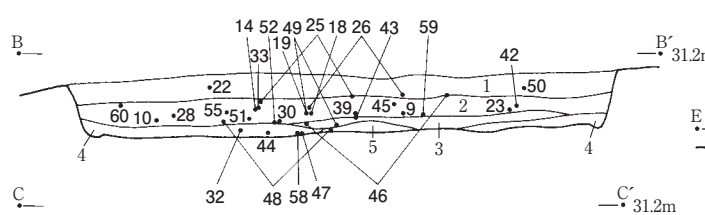
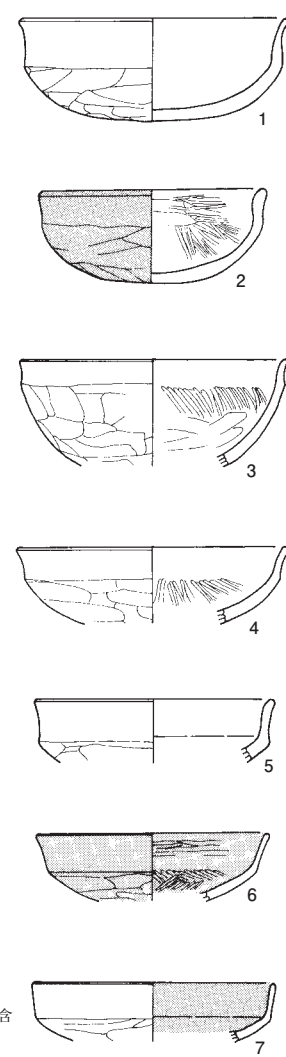
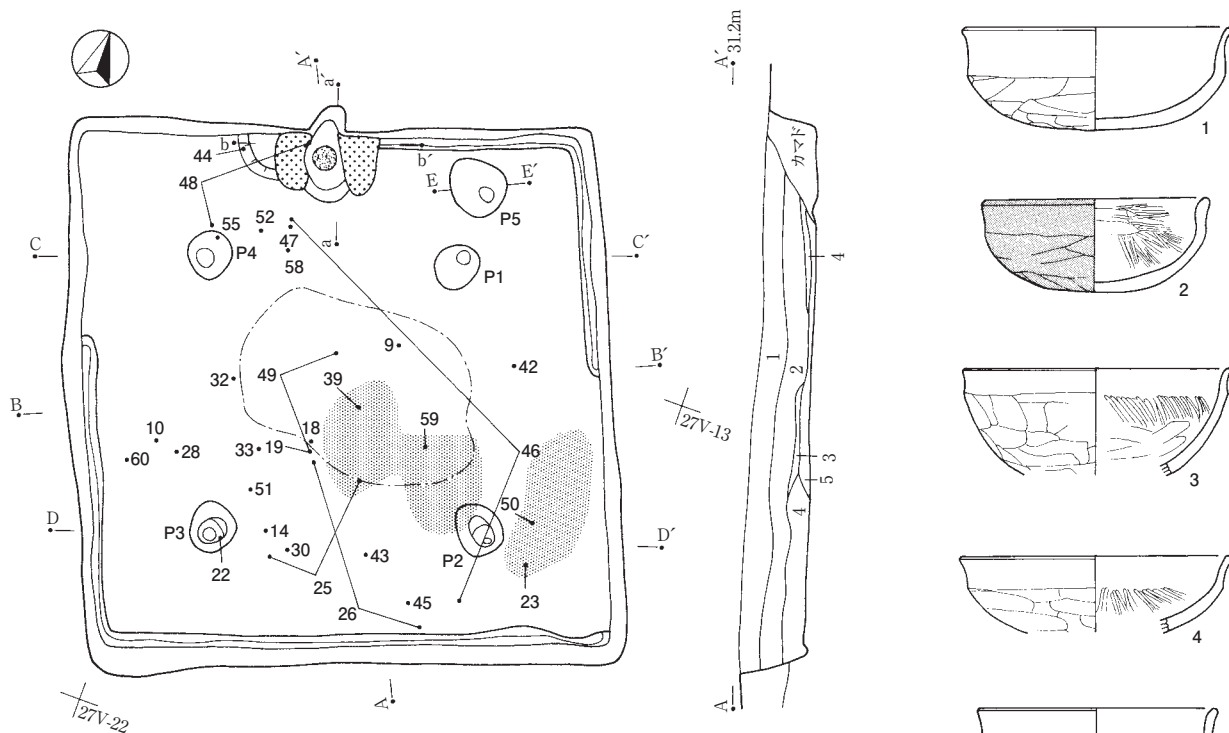
カマド 北壁中央に位置する。左袖脇がやや高まっている。全長1.1m、幅1.1m、袖部の高さ0.2mを測る。底面には火床面がみられた。煙道部は壁外に27cm張り出す。

堆積土 褐色土を主体とし、上層は多量のローム粒・ロームブロック、中・下層はローム粒を含む。南東側の床面上を中心に焼土の堆積がみられた。

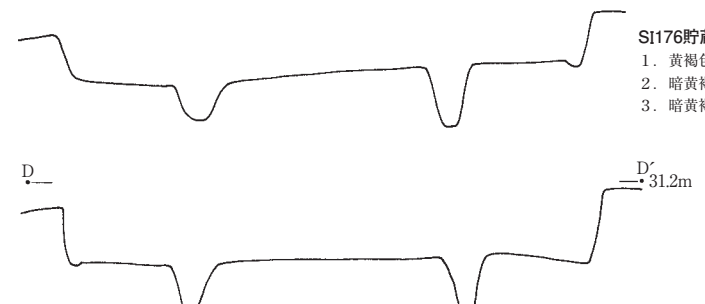
重複関係 SI177を切る。

遺物 全体から中層を中心に多量に出土した。土師器甕・杯など遺存状態のよいものがみられた。埋没途中で廃棄されたものと思われる。

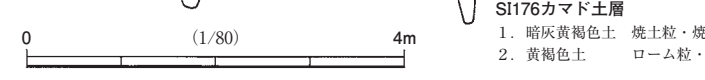
1～28は土師器杯である。1～4・8は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部がやや外反するものである。2～4は内面にヘラミガキが加えられる。2は外面に黒色処理が施される。8は平底気味で、底部に木葉痕が残されている。6・7は口縁部が直線的に外傾するものである。6は内外面、7は内面に黒色処理が施される。9～14は口縁部が直立するものである。9は外面に赤彩が施される。10・11は口縁部と体部との境に段を有し、内面にヘラミガキが施される。15～17は、口縁部がやや内傾ないし内湾する半球形に近いものである。15・17の内面はヘラミガキが施される。18～22は、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が内傾するものである。21は椀状の大型品で、内外面に赤彩が施される。23～24は半球形で、口縁部と体部の境に稜を有する。23は内面にヘラミガキが加えられ、黒色処理が施される。底部外面に「×」の線刻がみられる。24は内外面にヘラミガキが施される。25～27は厚手のやや粗雑な作りのもので、25は体部が内湾しながら開く。内面にヘラミガキが施される。26～28は平底で、体部から口縁部が直線的に開き、



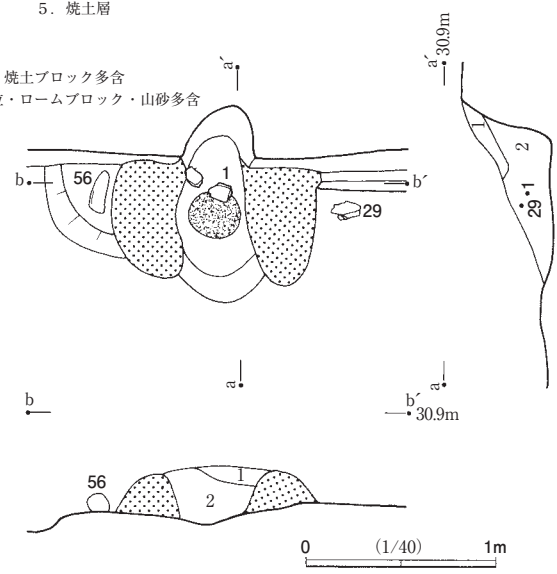
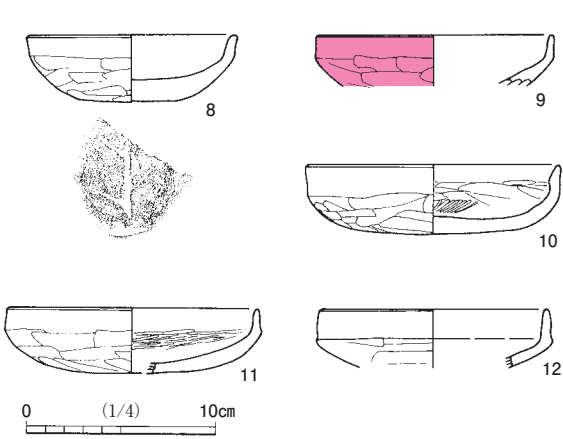
SI176貯蔵穴土層
 1. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多含
 2. 暗黄褐色土 ローム粒多含
 3. 暗黄褐色土 ローム粒少含



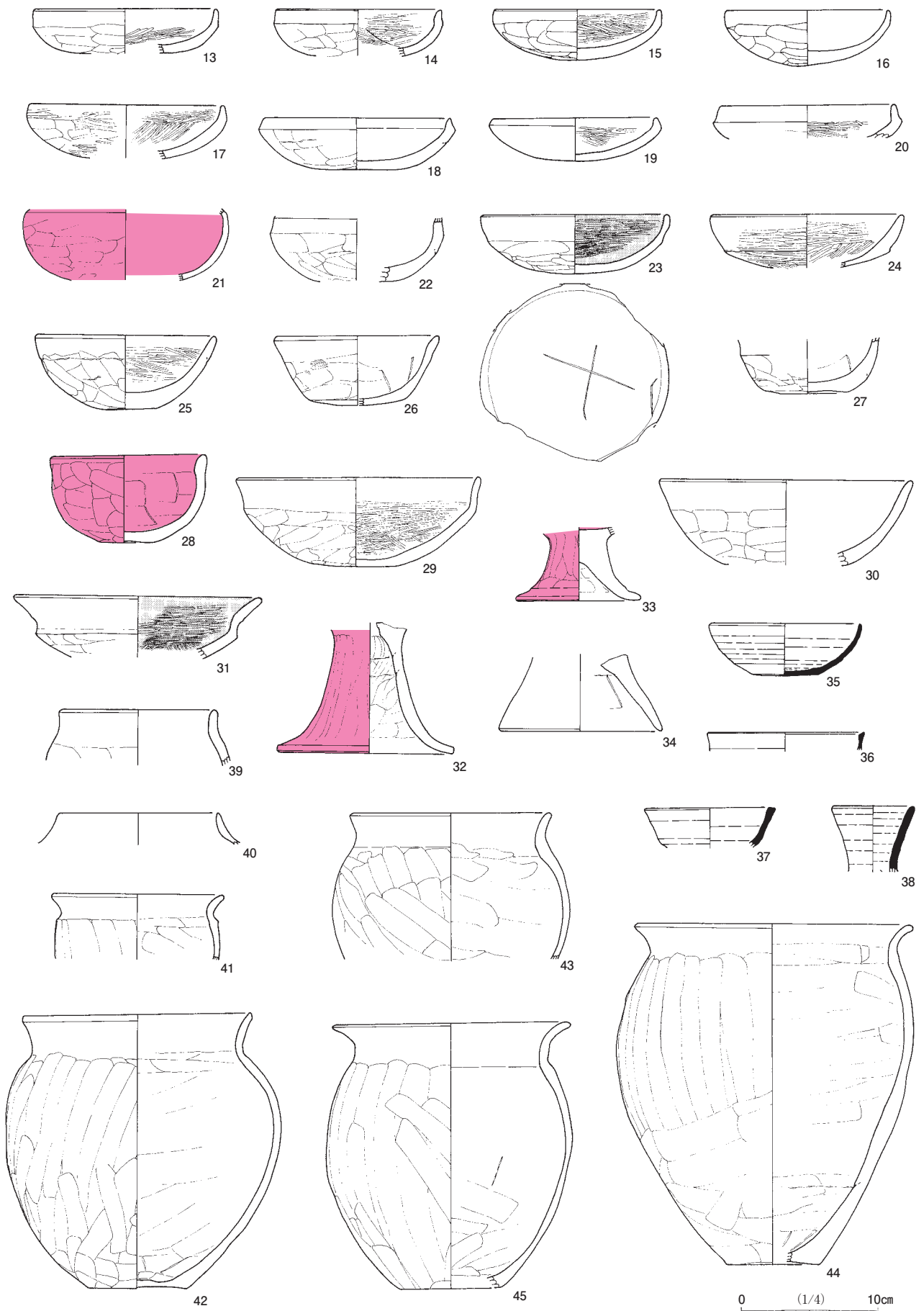
SI176土層
 1. 暗黄褐色土 テフラ・ローム粒少含
 2. 暗褐色土 テフラ・ローム粒少、1層に似るが黒味強
 3. 暗赤褐色土 テフラ・ローム粒多、焼土粒・ブロック少含
 4. 黄褐色土 ローム粒多、炭化粒少含
 5. 焼土層



SI176カマド土層
 1. 暗灰黄褐色土 焼土粒・焼土ブロック多含
 2. 黄褐色土 ローム粒・ロームブロック・山砂多含

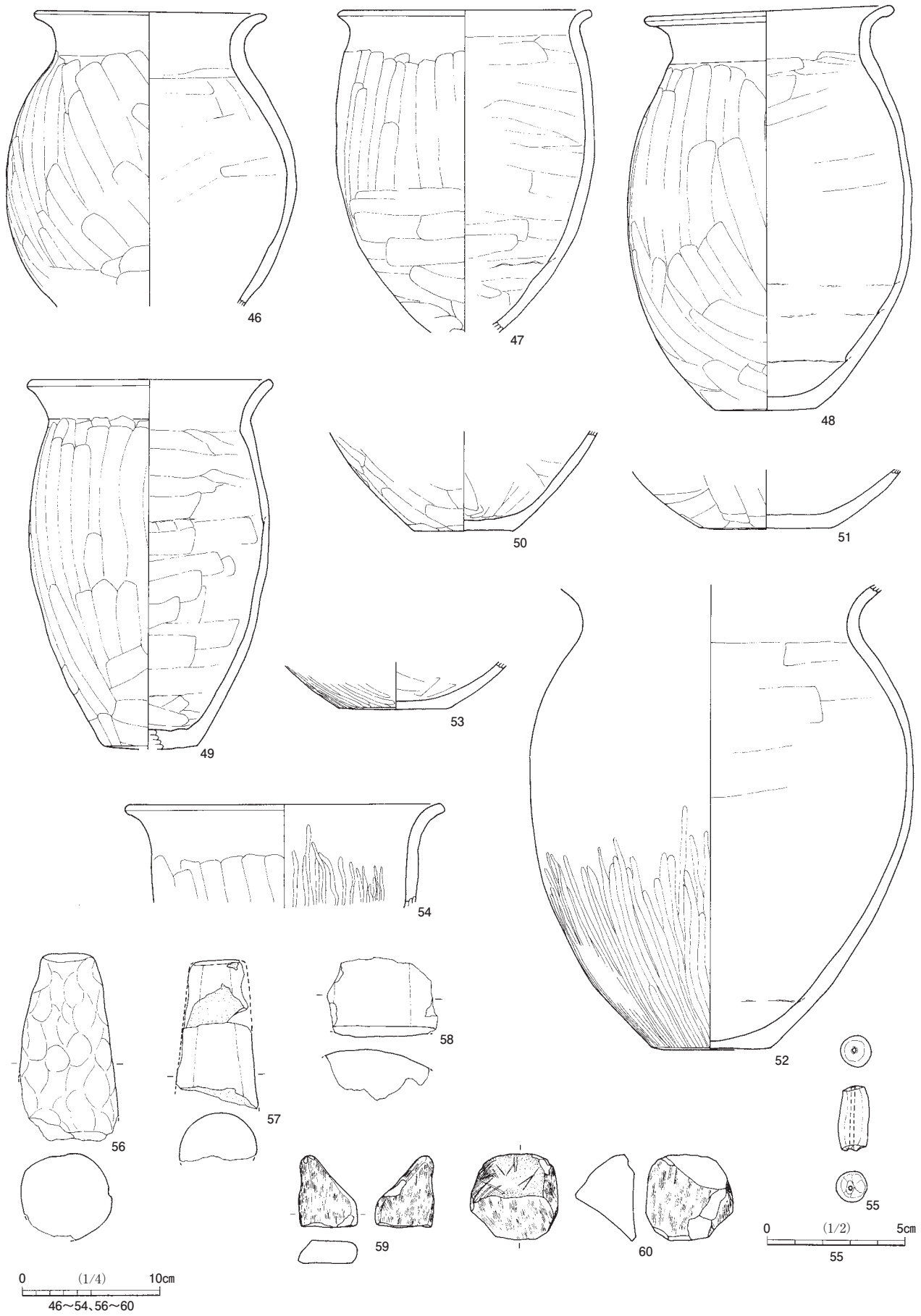


第31図 SI176 (1)



第32図 SI176 (2)

0 (1/4) 10cm



第33图 SI176 (3)

内面にヘラミガキが残される。27・28はほぼ同形と考えられる。27は口縁部を欠損する。半球形の体部から口縁部が直立する。口唇部はわずかに外反し、丸い。外面ヘラケズリ、内面ヘラナデが施される。28は内外面に赤彩が施される。

29・30は土師器鉢である。29は口縁部と体部の境に稜をもち、口縁部はやや外反する。31～34は土師器高杯である。31は口縁部から体部の破片で、口縁部と体部の境に鋭い段を有する。内面に黒色処理が施される。33～34は脚部である。33は上半が中実である。32・33は外面に赤彩が施される。35は須恵器杯身である。体部下端から底部は回転ヘラケズリが施され、平底に作り出され、体部は内湾し、口縁部は直立する。36は須恵器高杯の口縁部付近である。口唇部は外側につまみ出される。37は須恵器壺の口縁部である。38は須恵器提瓶の口縁部である。36～38は湖西窯産である。

39・40は土師器鉢である。29・30とは異なり、体部はほぼ球形と思われる。口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。口唇部は、39が直立して丸く、40は内傾して、やや尖り気味である。

41～53は土師器甕である。41～51は在地系の甕で、大まかに分類すると、41は小型、42～44は球形胴の中型のものである。45～47は中胴、48・49はやや長胴である。52・53は胴部下半に縦方向のヘラミガキが施される常総型甕である。54は土師器甕の口縁部付近の破片である。内面にヘラミガキが施される。

55は土製の管玉である。長さ2.40cm、幅1.15cm、孔径1.40mmを測る。56～58は土製支脚である。58はカマド外の左側から出土した。56は現存長13.70cm、最大幅7.15cm、57は現存長11.1cm、最大幅6.0cm、58は現存長5.9cmである。59・60は砥石である。59は砂岩製である。図の下方の折断面以外は使用されている。長さ5.3cm、幅4.3cm、厚さ1.7cmを測る。重量40.8gである。60は凝灰岩製で、研磨に使用されたのは3面で、1面には細かい線状削痕が多数みられる。長さ・幅とも6.3cm、厚さ4.5cmを測る。重量は144.2gである。61（図版のみ掲載）は鉄滓である。長さ5.5cm、幅3.0cm、厚さ2.2cmを測る。重量は31.0gである。

SI177（第34図、図版8・11）

位置 南東調査区北端にあり、27V-22付近に位置する。

形状・規模 西・東・南辺が緩い弧状を呈す隅丸長方形である。主軸方位はN-25°-Wである。南北方向8.7m以上、東西方向7.0m、深さ0.3m～0.5mを測る。

床面 凹凸がある。木の根による攪乱が著しいため硬化面は認められなかった。

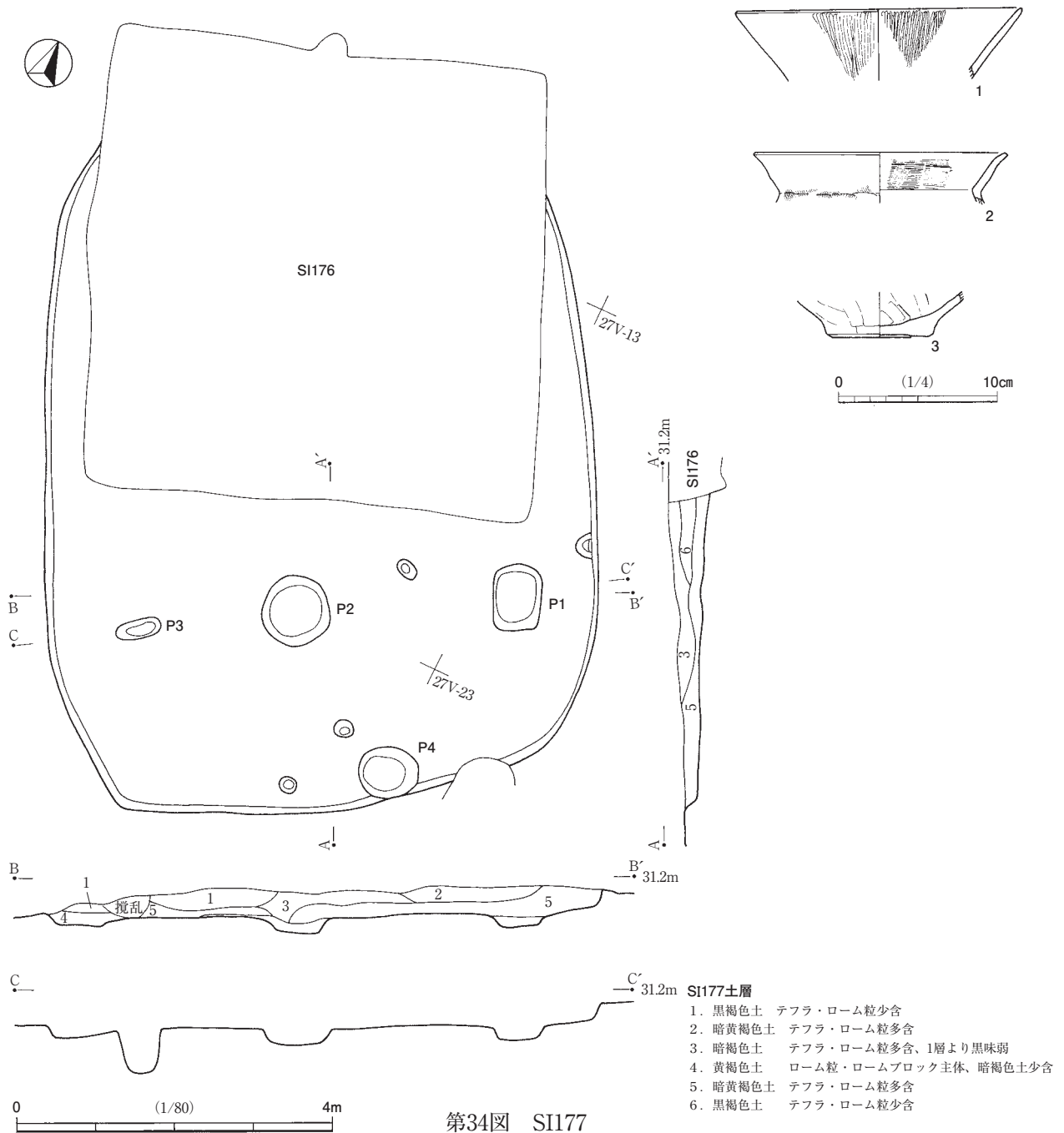
柱穴 ピットは南側から4か所検出されたが、P1～P3の3か所が主柱穴と思われる。開口部の平面形は方形、円形、長楕円形で、径24cm～90cm、深さ16cm～57cmと平面形、規模とも不統一である。南壁直下のP4は径0.7m、深さ1.2mを測る。他に小ピットが4か所ある。

炉 SI176に切られた北側にあったと思われる。

堆積土 テフラ・ローム粒を含む黒褐色土である。

重複関係 SI176に切られる。

遺物 覆土中から少量出土した。1は直線的に開く土師器高杯の口縁部片で、内外面に縦方向のヘラミガキが施される。2・3は土師器甕である。2は口縁部付近の破片で、外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整後にナデが加えられる。3は胴部下端から底部で、胴部外面及び内面はヘラナデ、底部外面は無調整である。



SI178 (第35・36図、図版8・17・19)

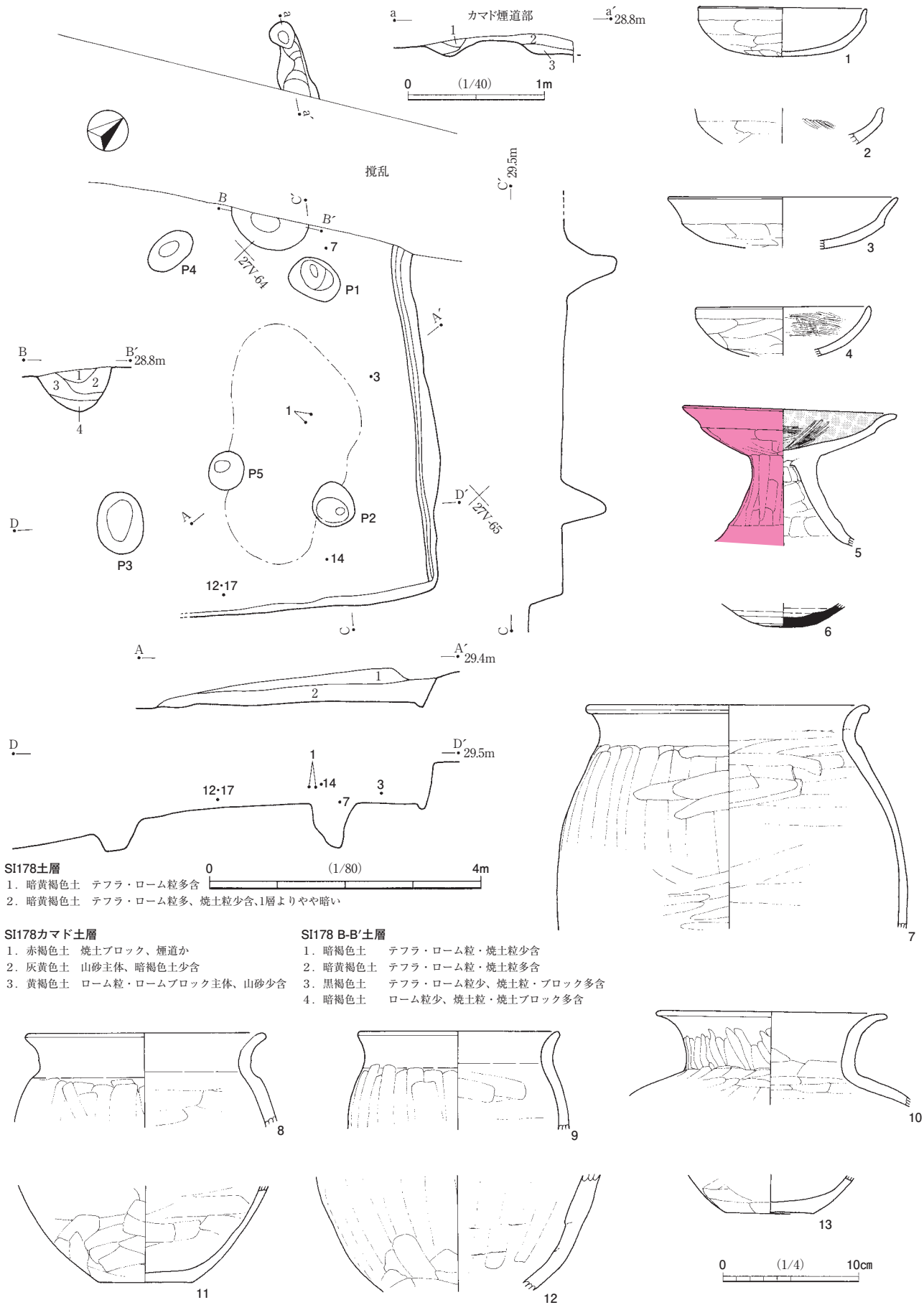
位置 南東調査区中央西側にあり、27V-64付近に位置する。西側斜面にかかっており南西側は遺存しない。北西壁・カマド付近は攪乱されていた。

形状・規模 方形を呈すると推測される。主軸方位はN-55°-Wである。南北方向は8.7mを測る。

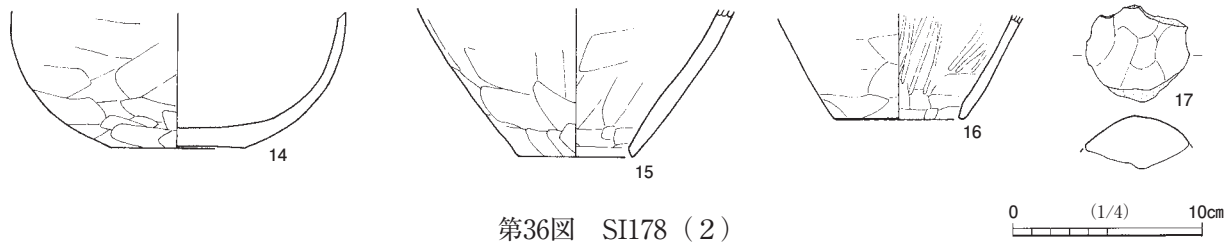
床面 東側に硬化面がみられた。

柱穴 主柱穴は4か所(P1～P4)みられた。開口部径は46cm～74cm、深さ64cm～79cmを測る。P5は出入口ピットで、径54cm、深さ58cmを測る。

カマド 攪乱により主要部分は検出されず、焚口と煙道部が検出された。全長3.4mを測る。焚口部の



第35図 SI178 (1)



第36図 SI178 (2)

掘り込みは深さ60cmで、焼土粒・ブロックが多量に含まれていた。煙道部は壁外に長く突出し、山砂・焼土ブロックを含む層が堆積していた。

堆積土 多量のテフラ・ローム粒を含む暗黄褐色土を主体とする。

重複関係 なし。

遺物 東側を中心に土器が出土した。1～4は土師器杯である。1～3は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部は、1はほぼ直立、2は口唇部を欠くがやや外傾する。大型の3は外反し、高杯の可能性はある。4は半球形である。5は脚端部を欠く高杯で、口縁部は外反する。体部内面は黒色処理、外面は赤彩が施される。6は須恵器杯身の体部から底部片で、回転ヘラケズリが施される。7～14は土師器甕である。頸部が太く広い7～9、頸部が細く口縁部が外反する10がある。15・16は甑の底部周辺である。

17は土製支脚の破片である。現存長5.2cmを測る。

SI179 (第37図、図版8・17・19・20)

位置 南東調査区北側にあり、27V-14付近に位置する。

形状・規模 方形を呈する。主軸方位はN-17°-Wである。南北方向、東西方向とも5.5m、深さ0.6mを測る。

床面 比較的平坦で、中央付近に硬化面が認められる。周溝はカマド部分を除いて全周する。幅23cm～50cm、深さ6cm～16cmを測る。

柱穴 主柱穴は4か所(P1～P4)あり、径60cm～106cm、深さ44cm～98cmを測る。南壁中央下のP5は出入口ピットで、径50cm、深さ46cmを測る。P4は、南側に細長く穴が広がり、中央に向けて斜めに深くなることから、柱の抜き取りが行われているとみられる。

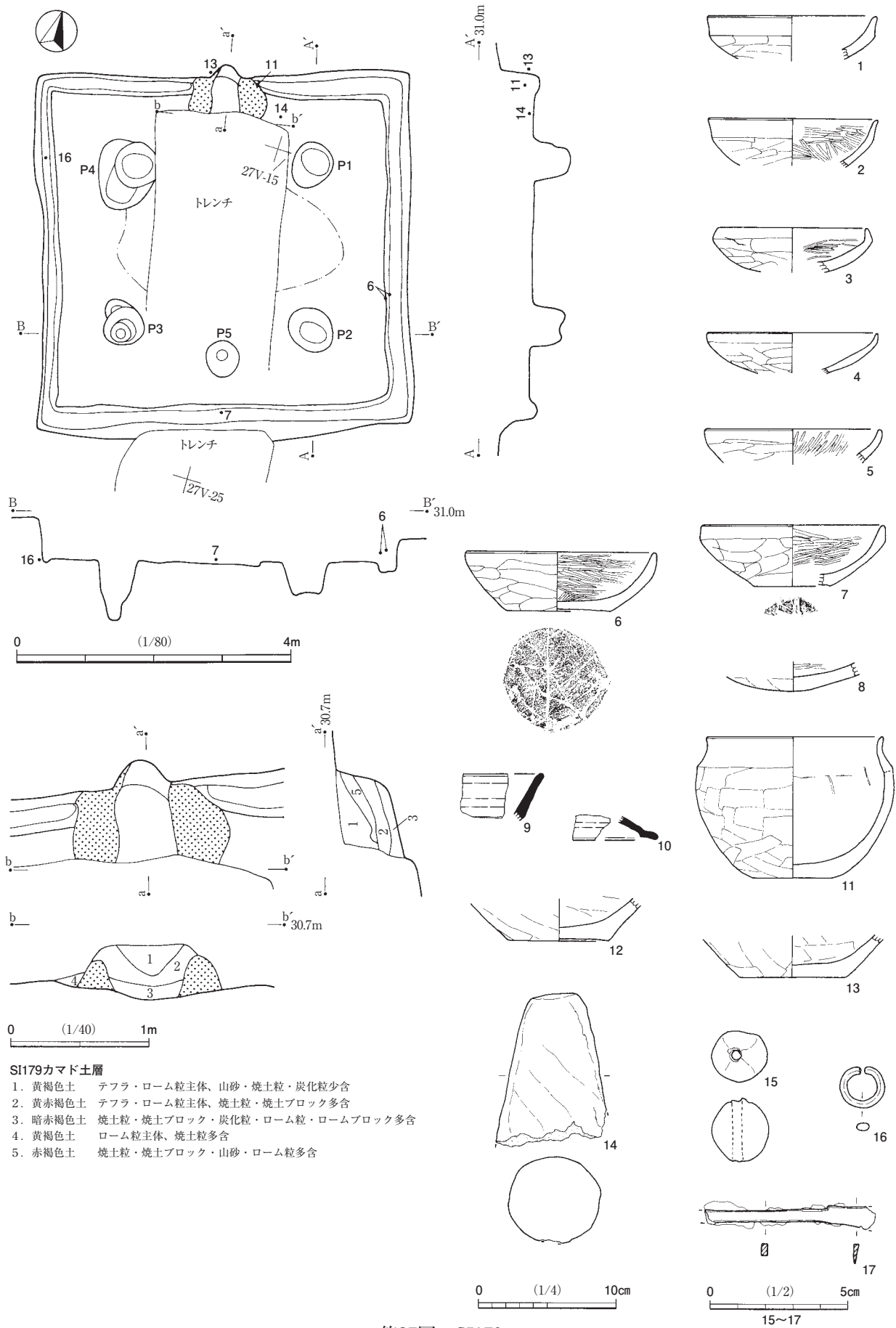
カマド 北壁中央に位置する。幅1.2m、袖部の高さ0.26mを測る。煙道部は壁外に20cmを測る。火床部はあまり明瞭ではない。山砂・焼土ブロックが散布していた。

堆積土 テフラ・ローム粒を含む暗黄褐色土を主体とする。

重複関係 SI180を切る。

遺物 覆土中を中心に出土し、カマドおよび柱穴・ピット内からも少量出土した。1～8は土師器杯である。内面にヘラミガキが施されるものが多い。1・2は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部は外傾して開く。3～7は口縁部が短く立ち上がるもので、3は内傾、4・5は直立する。6・7は底部が平底で、木葉痕が残されている。9は須恵器杯の体部片である。10は内面に身受けのかえりをもつ須恵器蓋である。9・10は新治窯産である。11は土師器鉢である。平底で、胴部は半球形である。胴部と口縁部との境に稜を持つ。口縁部は内傾して立ち上がり、外反して口唇部に至る。12・13は土師器甕の底部付近である。

14は土製支脚の破片で、現存長11cm、最大幅7.6cmを測る。15は土玉である。長さ2.3cm、幅2.1cm、孔



第37図 SI179

径4mmを測る。16は銅地金張の耳環である。断面形は楕円形である。長さ1.5cm、幅1.6cm、断面径3mm～5mm、開口部幅は1.2mm～1.8mmを測る。重量は8.79gである。17は刀子の刃身部から茎部の破片である。現存長6.2cmで、身部は最大幅9mm、背の厚さは2mmを測る。茎部は幅4mm、厚さ2.5mmを測る。

備考 古墳時代後期で、カマド前から南壁中央は確認トレンチで掘り過ぎたものである。

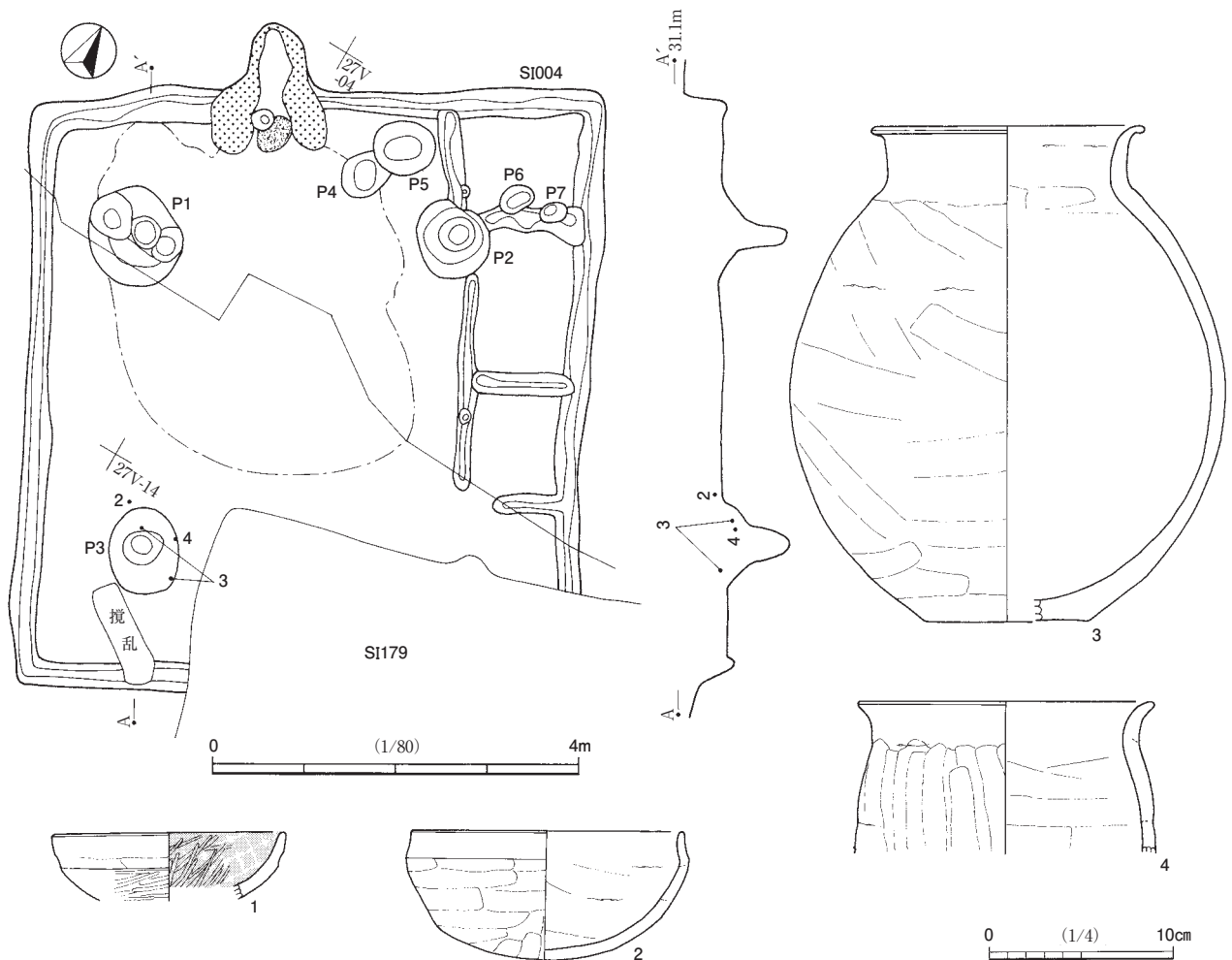
SI180 (SI004) (第38図、図版9・17・18)

位置 南東調査区の北端にあり、27V-04付近に位置する。北側の約1/2は東部調査区にかかり、SI004として報告されている。

形状・規模 方形を呈する。主軸方位はN-32°-Wである。南北方向7.3m、東西方向6.3m、深さ0.7mを測る。

床面 ほぼ平坦である。硬化面はカマドの前面から中央部にみられる。周溝はカマド部分を除いて全周すると思われる。幅24cm～40cm、深さ6cm～10cmを測る。既報告では、北東側の床面には間仕切りに推測される溝が検出され、P2から南北方向に通る1条、東西方向の3条が検出されているが、今回検出した南東側の床面の状況は、重複するSI179の攪乱で不明瞭であった。

柱穴 主柱穴は3か所(P1～P3)検出された。南東側の1か所は、SI179によって壊されていた。



第38図 SI180

既調査部分であるP1は3連状に掘られている。P2内の埋土上層から、土師器甕・鉢が出土した。径0.8m～1.1m、深さ0.6m～0.7mを測る。今回検出したP3は、柱穴内及び周辺に、P2と同様の土師器甕(3)・鉢(2)が出土している。P2の様に明瞭な状況ではないが、柱の抜き取り時に置かれた可能性がある。

P4(a)・P5(b)は貯蔵穴で、P5がP4を切っている。開口部の平面形はいずれも不整な円形である。P4は径40cm、深さ62cm、P5は径50cm、深さ92cmである。北東隅近くの2か所の小ピット(P6・P7)は出入口ピットの可能性が高い。

カマド 北壁のやや北寄りに位置する。奥行1.9m、幅1.2m、袖部の高さ0.3mを測る。煙道部は直線的に立ち上がる。袖部の構築材は山砂を主体とする。袖部内面には被熱痕がみられた。

堆積土 暗黄褐色土主体で、ローム粒・ロームブロックを多く含み、少量の焼土粒を含む。

重複関係 SI003を切る。

遺物 覆土中、柱穴内から少量出土した。1・2は土師器杯で、半球形の須恵器の蓋模倣と思われ、口縁部と体部の境に稜を有する。体部内外面はヘラミガキが加えられる。2は比較的大型の椀で、口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部は内傾する。3・4は土師器甕である。3は球形胴で頸部はすぼまり、口縁部が直立する。4は口縁部から胴上半部である。丸みのない長胴の胴部から口縁部が外反する。

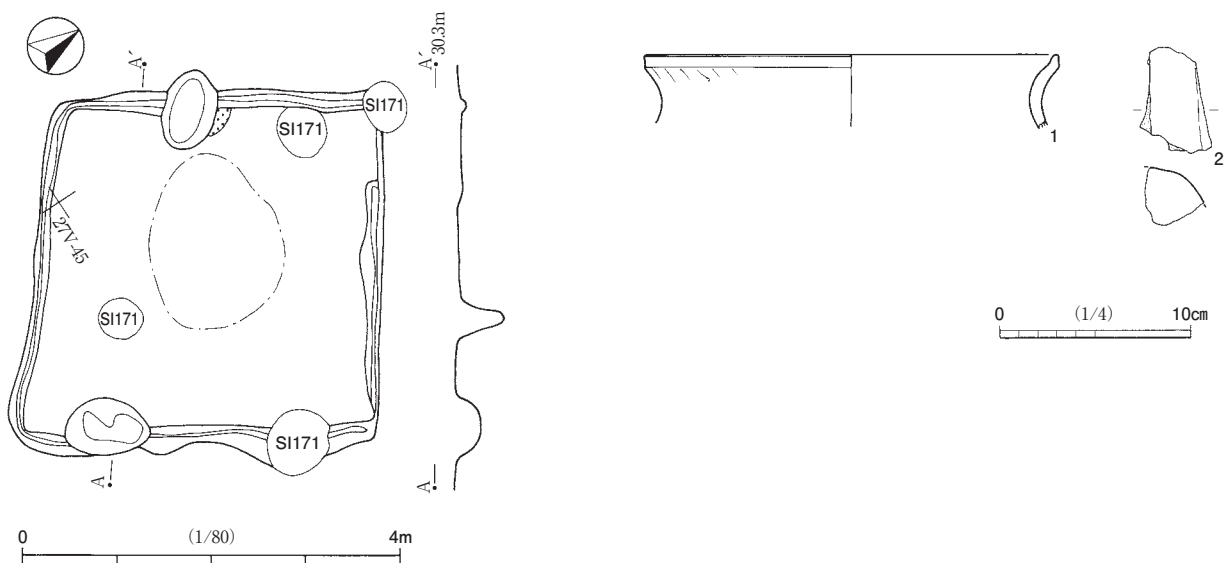
SI181 (第39図、図版9・19)

位置 南東調査区中央にあり、27V-35付近に位置する。

形状・規模 不整な方形を呈する。主軸方位はN-58°-Wである。北西から南東方向3.9m、南西から北東方向3.8m、深さ0.1mを測る。

床面 やや凹凸があり、カマド前から床面中央にかけて硬化面が認められた。周溝はカマド部分と北側隅付近を除いて掘り込まれていた。幅12cm～25cm、深さ5cmを測る。

柱穴・貯蔵穴 支柱穴は検出されなかった。南東壁南側の楕円形の掘り込みは性格不明である。長径90cm、短径60cm、深さ30cmを測る。



第39図 SI181

カマド 北西壁中央の南西寄りに位置する。掘り込みと右側の袖部の最下部が遺存していた。全長86cm、袖部の高さ5cmを測る。壁外へは28cm張り出す。

堆積土 ほとんど遺存なく、不明である。

重複関係 SII71を切る。

遺物 ピット内から少量出土した。1は土師器甕の口縁部で、口唇部は上方につまみ出される。2は土製支脚の破片で、現存長5.7cmである。

SI183 (第40図、図版9・18・20)

位置 南東調査区南側にあり、27W-27付近に位置する。南隅にSK419が重複する。

形状・規模 方形を呈する。主軸方位はN-23°-Wである。主軸の南北方向がやや短く3.5m、東西方向は3.7m、深さ0.3mを測る。

床面 カマド前から出入口ピットにかけて硬化面が広がっている。周溝はカマド部分を除いて全周する。幅14cm～34cm、深さ8cm～18cmを測る。

柱穴・貯蔵穴等 主柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。南壁中央下に出入口ピット(P1)が検出された。開口部径35cm、深さ34cmを測る。南西隅のSK419は、床面側が浅くテラス状に掘り込まれていることから、本住居跡に伴う可能性がある。覆土の状況は不明である。全長1.4m、最大幅1.3m、深さ0.4mを測る。

カマド 北壁中央からやや西側に偏って位置する。全長1.8m、幅2.1m、袖部の高さ0.4mを測る。壁外へは12cm張り出す。火床部の遺存状況は不良で、底面は赤色化していない。袖部は山砂を主体とする。

堆積土 多量のローム粒を含む暗黄褐色土が主体である。

重複関係 SII63、SK419を切る。

遺物 北側を中心に土器・石器が出土した。1は土師器杯の底部付近で、内外面ともヘラミガキが加えられる。内面は黒色処理が施される。2・3は口縁部が直立するコップ状の鉢である。粘土紐の巻き上げ痕が残されている。4～6は土師器甕である。4は口縁部で、口唇部は上方につまみ出される。5・6は底部周辺である。7は土師器甕で、胴部内面は縦方向のヘラミガキが加えられる。

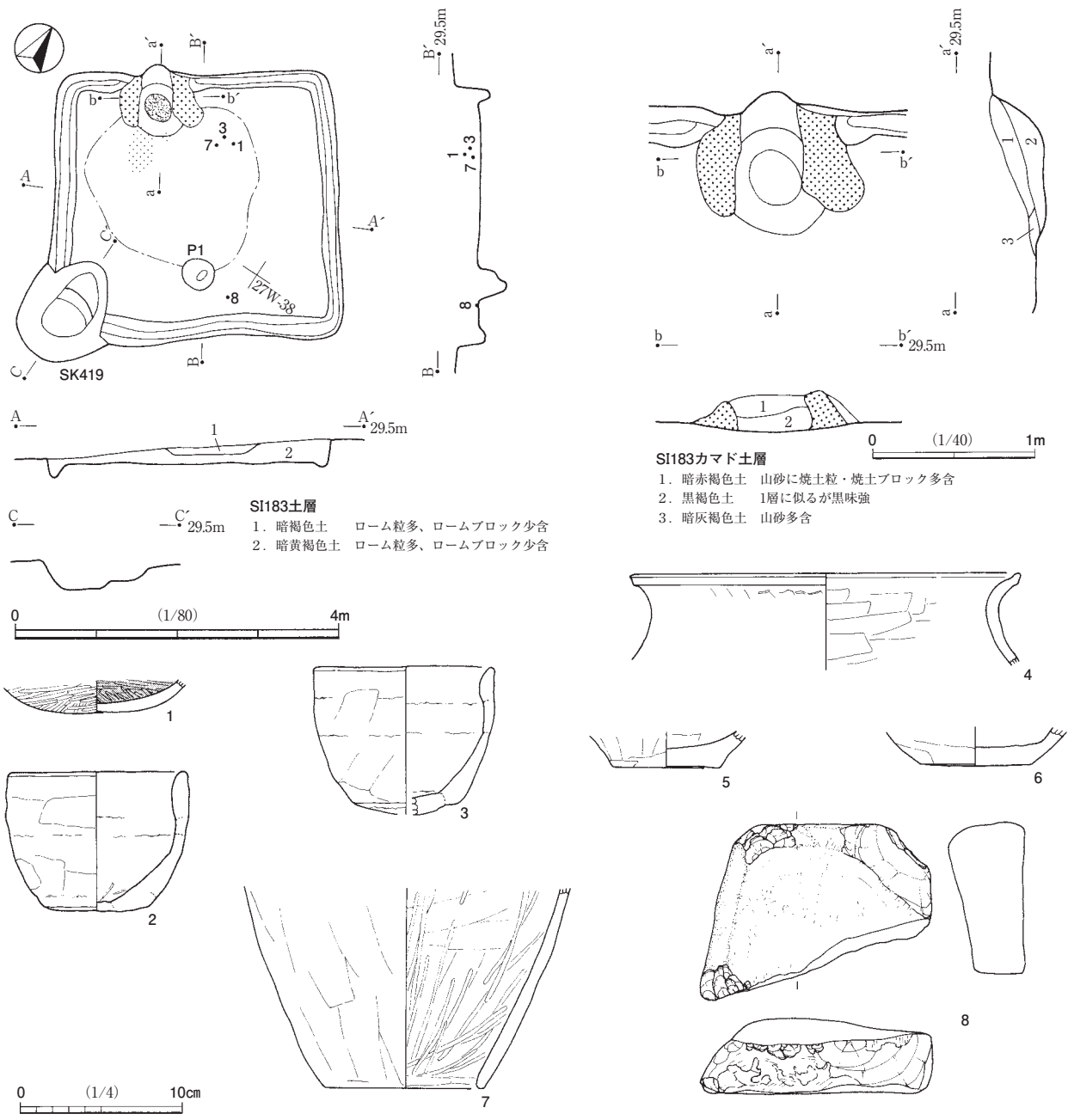
8は緻密な細粒砂岩製の石皿である。素材は隅丸方形の扁平な垂円礫であるが、一端を大きく欠損している。欠損面には、不整な凹凸を除去するための剥離や、研磨痕が認められ、破損面の入念な養生が窺われる。素材垂円礫の両面は平行でないため、いずれの面を下にしても他面には傾斜が生じるが、両面は広く研磨面に覆われている。側縁にも剥離痕や局所的な研磨痕がある。長い期間にわたり大切に扱われた石器と考えられるが、製粉作業に用いられるいわゆる下石である。最大長109mm、最大幅143mm、最大厚48mm、重量は900.0gである。

SK419 (第40図、図版9)

位置 南東調査区南側にあり、27W-27付近に位置する。SI183の南隅に重複する。

形状・規模 楕円形で、長軸方位はN-4.5°-Eである。長軸1.3m、短軸1.2mで、深さは、底面に段があり、段までが0.27m、底面までは0.35mを測る。

底面 段を持つが、凹凸はなく、ピット等は検出されなかった。

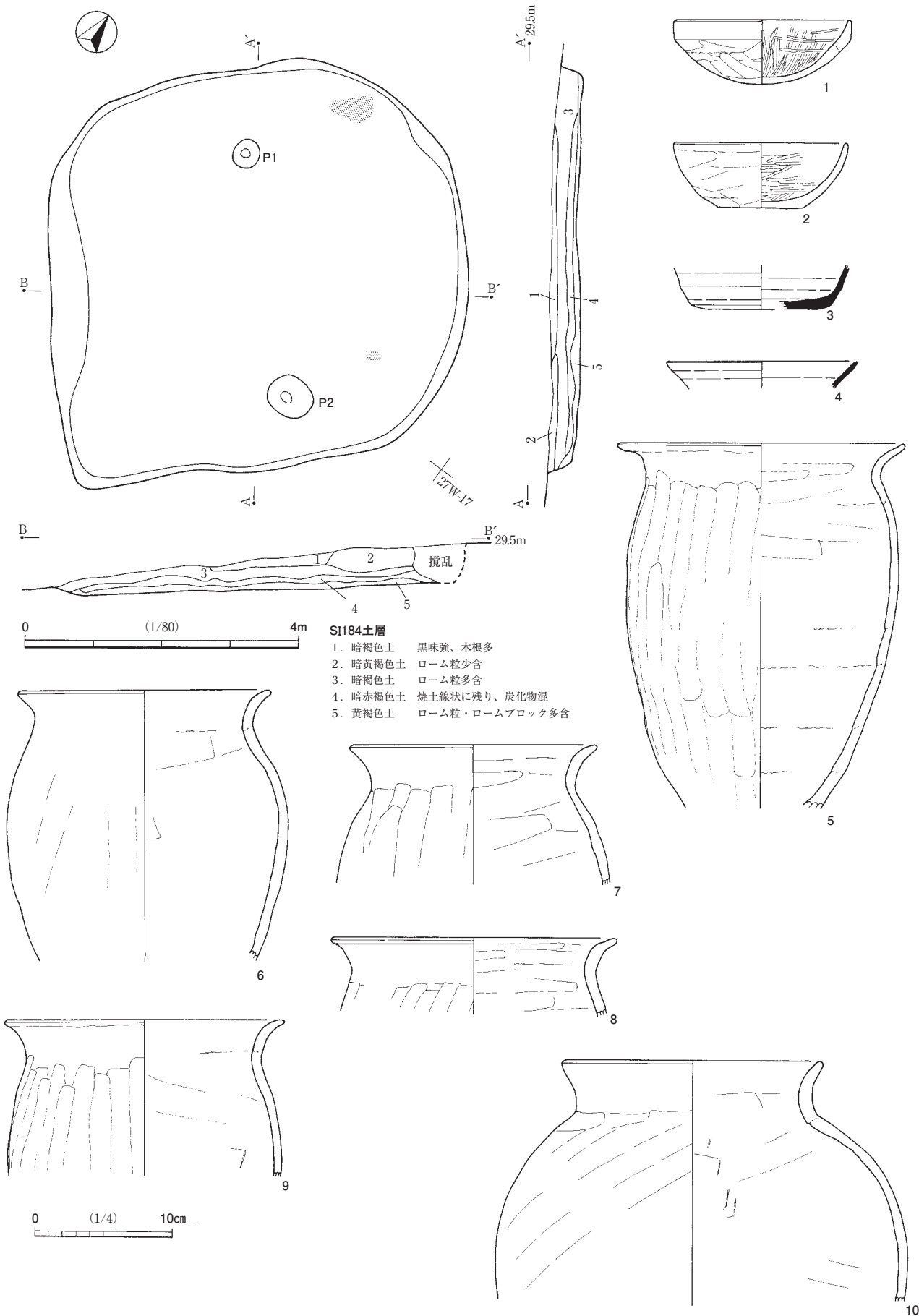


第40図 SI183・SK419

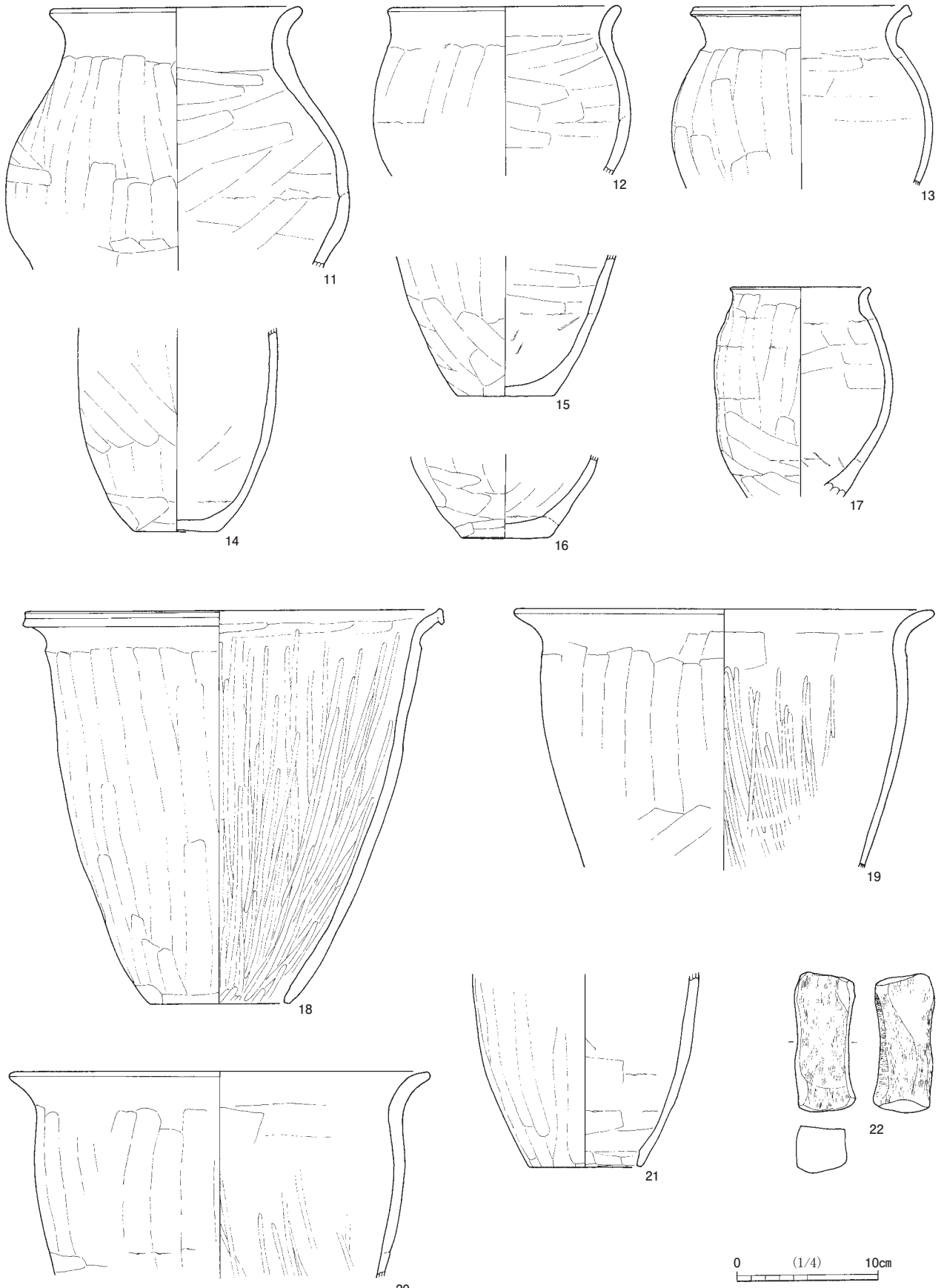
- 堆積土 SI183の周溝が掘り込まれる。
- 重複関係 SI183に切られる。
- 遺物 出土しなかった。
- 備考 時期はSI183よりも古く、古墳時代後期と考えられる。

SI184 (第41・42図、図版9・18~20)

- 位置 南東調査区中央にあり、27W-06に位置する。
- 形状・規模 不整な隅丸方形を呈する。主軸方位はN-45°-Wである。北西から南東方向は5.9m、北東から南西方向は6.1m、深さ0.54mを測る。
- 床面 ほぼ平坦であった。硬化面は認められなかった。



第41図 SI184 (1)



第42図 SI184 (2)

柱穴・貯蔵穴 ピットは2か所検出された。いずれも主軸線上に位置し、北西側のP 1は径40 cm、深さ65cm、P 2は径68cm、深さ15cmを測る。位置からみてP 1はカマドの掘り込み、P 2は出入口ピットの可能性が高い。

カマド 検出されなかった。P 1はカマドの掘り込みの可能性はある。

堆積土 上層は黒色土、中層はローム粒を含む暗褐色土及び焼土・炭化物主体の暗赤褐色土、下層はローム粒・ロームブロックを多く含む黄褐色土を主体とする。

重複関係 なし。

遺物 覆土中から多量に出土しており、遺存状態の良いものもみられる。1～2は土師器杯である。1は丸底で、口縁部は直立する。内面にヘラミガキが施される。2は平底で、体部から口縁部が内湾しながら立ち上がる杯である。内面はヘラミガキが施される。3・4は須恵器杯で、3は体部から底部で、箱型の器形を呈する。底部は回転ヘラケズリが施される。4は口縁部片で、斜めに大きく開く。5～17は土師器甕である。5～9・14～16はやや長胴、10～11は球胴である。12・13は小型の球胴甕で、13の口縁部は角張った矩形で、口縁が帯状に作出されている。17は長胴で、鉢状の小型甕である。内面に縦方向のヘラミガキが施される。18～21は土師器甕である。18は口唇部が上下に張り出す口縁帯が作出される。

22は安山岩製の砥石である。長さ10cm、最大幅4.4cmを測る。

第4表 弥生・古墳・奈良・平安時代土器一覧表

()は推定値 []は現存値 色調の二段書きは上段内面・下段外面

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考	
SI161	第12図	1	弥生	椀	(18.0)	-	[4.6]	15%	橙	密	少	良好	口唇部・単節縄文 口縁部・羽状縄文 下端・キザミ(オオバコによる押捺)	-			
		2	弥生	甕	21.8	6.6	24.9	85%	明黄褐 橙	密	少	良好	口縁部・胴部・単節RL縄文(輪積痕に刺突文)	ヨコナデ、ヘラナデ		木葉痕	複合口縁
		3	弥生	小型甕	-	5.7	[10.2]	60%	橙	密	少	良好	胴部・単節RL縄文	ヘラナデ		木葉痕	
		4	弥生	甕	(21.5)	-	[12.4]	-	-	密	少	良好	口唇部 キザミ(単節縄文押捺) 頸部上位・S字状結節文 胴部・附加条RL縄文	ヘラナデ、ハケ			
		5	弥生	小型甕	-	-	[15.0]	90%	橙	密	少	良好	胴部・附加条LR縄文	ヘラナデ			外面輪積み痕
		6	弥生	甕	-	-	[16.3]	40%	黒褐 黒	密	少	良好	無文・ヘラナデ	ヘラナデ			
		7	弥生	小型甕	-	-	[8.8]	20%	赤褐 にぶい赤褐	密	少	良好	無文・ヘラナデ	ヘラナデ			
		8	弥生	甕	-	-	-	-	暗灰黄	密	少	良好	口唇部・単節縄文	ナデ			外面輪積み痕
		9	弥生	甕	-	-	-	-	暗灰黄	密	少	良好	口唇部・工具による押捺痕	ナデ			
		10	弥生	壺	-	-	-	-	にぶい褐	密	少	良好	口唇部・単節縄文	-			11と同一個体
		11	弥生	壺	-	-	-	-	暗灰黄	密	少	良好	口唇部・単節縄文	-			口縁部に孔2ヶ
		12	弥生	壺	-	-	-	-	暗灰黄	密	少	良好	-	ヘラナデ			
		13	弥生	壺	(10.4)	-	[3.8]	25%	黒褐	密	少	良好	-	ヘラナデ			
		14	弥生	甕	-	-	-	-	にぶい赤褐 黒褐	密	少	良好	胴部・単節RL縄文	-			
		15	弥生	甕	-	-	-	-	にぶい褐 黒褐	密	少	良好	胴部・附加条LR縄文	-			
		16	弥生	壺	-	-	-	-	にぶい黄橙	密	少	良好	口縁部・棒状浮文(2本)	-			
		17	弥生	壺	-	-	-	-	橙	密	少	良好	-	-			
		18	弥生	小型壺	-	-	[4.0]	20%	にぶい黄褐	密	少	良好	頸部・刺突文	-			
	第13図	19	弥生	甕	-	(6.2)	[9.9]	25%	暗オリーブ にぶい赤褐	密	少	良好	胴部・附加条LR縄文	ヘラナデ			
		20	弥生	甕	-	(8.0)	[6.9]	20%	にぶい橙	密	多	良好	胴部・単節RL縄文	ヘラナデ		木葉痕	
		21	弥生	甕	-	6.6	[2.9]	10%	橙 にぶい赤褐	密	少	良好	胴部・附加条RL縄文	ヘラナデ		木葉痕	
		22	弥生	甕	-	7.7	[3.9]	10%	にぶい赤褐 にぶい赤褐	密	少	良好	-	ハケ、ヘラナデ		木葉痕	
SI162	第17図	1	土師器	杯	(13.1)	-	[4.9]	25%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			
		2	土師器	杯	(14.6)	-	[3.8]	20%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		3	土師器	鉢	(19.7)	-	[7.6]	25%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		4	土師器	小型甕	16.6	-	[13.4]	85%	橙 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ヘラナデ			
		5	土師器	甕	(25.0)	-	[8.3]		黒 にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			
		6	須恵器	杯	10.2	5.3	3.8	95%	灰	密	少	良好	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	回転ヘラ削り	
		7	須恵器	杯	-	6.6	[3.4]	90%	灰	密	少	良好	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	回転ヘラ削り	
		8	須恵器	杯	(9.1)	-	[2.3]	-	オリーブ灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			
SI163	第14図	1	土師器	甕	-	(5.8)	[1.7]	10%	にぶい褐 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ		木葉痕	重複住居跡からの混入
SI164	第18図	1	土師器	甕	(16.0)	(5.2)	21.1	40%	にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ヘラナデ、ナデ	ヘラナデ			
		2	土師器	甕	15.8	-	[27.0]	40%	明褐 赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			
		3	土師器	甕	-	7.2	[8.5]	20%	にぶい黄褐 にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
		4	土師器	甕	-	8.5	[7.8]	30%	にぶい橙 橙	密	少	良好	ヘラケズリ	-			
		5	土師器	甕	-	9.0	[20.8]	60%	橙 にぶい橙	密	少	良好	ヘラナデ、ミガキ	ヘラナデ			

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考
SI165	第15図	1	弥生 鉢(蓋)	(18.2)	5.0	7.8	25%	にぶい褐	密	少	良好	口唇部・単節縄文 体部・附加条RL縄文	-			
		2	弥生 甕	-	-	-	-	にぶい褐	密	少	良好	胴部・附加条LR縄文	-			
		3	弥生 壺	-	-	-	-	にぶい赤褐	密	少	良好	口縁部・刺突文	-			
SI166	第19図	1	土師器 杯	13.9	丸底	4.2	75%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		2	土師器 高坏	(14.2)	-	[2.8]	20%	灰褐 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		3	土師器 小型甕	(13.8)	-	[9.1]	20%	明赤褐 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			
SI167	第20図	1	土師器 杯	10.2	丸底	4.5	70%	明赤褐 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		2	土師器 杯	11.3	丸底	3.9	100%	黒 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			内面黒色処理
		3	土師器 杯	(15.2)	-	[3.4]	-	灰褐 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		4	土師器 杯	(13.6)	-	[3.6]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ			
		5	土師器 杯	12.8	丸底	4.9	80%	黒 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ、ミ ガキ			内面黒色処理
		6	土師器 杯	(13.8)	丸底	[3.3]	-	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		7	土師器 杯	(13.0)	丸底	[3.0]	-	黄灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		8	土師器 杯	(11.7)	-	[4.1]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		9	土師器 杯	(9.8)	丸底	4.7	30%	明赤褐	密	多	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		10	土師器 鉢	10.2	5.6	7.8	95%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			
		11	土師器 高坏	19.0	-	[4.0]	30%	黒 明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		12	土師器 高坏	-	-	[2.6]	-	黒 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			外面赤彩 内面黒色 処理
		13	土師器 高坏	-	12.8	[11.7]	50%	明赤褐色	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、 ナデ			
		14	土師器 高坏	-	-	[7.5]	-	にぶい橙	密	少	良好	ナデ、ミガキ	ヘラケズリ、 ナデ			
		15	須恵器 蓋	(15.6)	-	[1.5]	-	浅黄	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			
		16	土師器 小型甕	(10.8)	(5.1)	10.9	25%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		17	土師器 甕	20.4	7.2	30.7	80%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		18	土師器 甕	(21.5)	-	[9.6]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
	第21図	19	土師器 甕	15.2	7.2	29.1	80%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		20	土師器 甕	-	-	[16.9]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		21	土師器 甕	-	7.5	[14.4]	40%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
		22	土師器 甕	(23.6)	-	[8.8]	-	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラ ナデ			
SI168	第16図	1	弥生 甕	-	-	-	-	にぶい褐 黒	密	少	良好	口唇部・工具による押捺痕	-			
		2	弥生 甕	-	-	-	-	橙	密	少	良好	胴部上位・S字状結節文2条 胴部・附加条RL縄文	-			
		3	弥生 甕	-	-	-	-	明黄褐 黒	密	少	良好	胴部・附加条RL縄文	-			
		4	弥生 甕	-	-	-	-	橙	密	少	良好	胴部・単節RL縄文	-			
		5	弥生 甕	-	5.0	[1.9]	-	橙 にぶい橙	密	少	良好	-	-			
SI169	第22図	1	土師器 杯	(14.6)	丸底	[6.7]	35%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		2	土師器 杯	(10.2)	丸底	[4.0]	-	にぶい褐 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ、ナデ			
		3	土師器 杯	-	丸底	[3.7]	20%	明赤褐	密	少	良好	-	ミガキ			
		4	土師器 杯	(11.5)	丸底	3.8	70%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ			
		5	土師器 杯	(12.0)	-	[4.1]	15%	黒 にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			内面黒色 処理

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考		
SI169	第22図	6	土師器	杯	13.0	丸底	[3.8]	-	黒褐 にぶい黄橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ			内面黒色 処理	
		7	土師器	杯	10.9	丸底	3.4	90%	にぶい赤褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ				
		8	土師器	杯	10.4	丸底	2.9	40%	橙	密	少	良好	ナデ、ミガキ	ミガキ			内面暗文	
		9	土師器	鉢	12.2	(4.6)	[9.3]	40%	黒 橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ			内面黒色 処理	
		10	土師器	甕	15.1	-	[20.7]	80%	明赤褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ				
		11	土師器	甕	12.5	-	[16.1]	20%	黒褐 明赤褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		12	土師器	甕	15.5	-	[7.7]	15%	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		13	土師器	甕	21.6	-	[7.2]	15%	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		14	土師器	甕	19.2	-	[25.2]	20%	にぶい褐 灰褐	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ				
	15	土師器	甕	14.2	-	[2.8]	10%	橙 赤褐	密	少	良好	ナデ	ナデ					
	第23図	16	土師器	甕	23.5	-	[6.6]	10%	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		17	土師器	甕	-	(10.4)	[15.4]	40%	橙	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ				
		18	土師器	甕	-	8.0	[6.6]	30%	橙	密	少	良好	ハラケズリ	-			器面剥落	
		19	土師器	甕	-	(6.6)	[5.8]	30%	赤褐 暗灰褐	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ			木葉痕	
		20	土師器	甕	-	(8.0)	[2.7]	15%	橙	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ				
		21	土師器	甕	-	(7.6)	[7.0]	-	黒 にぶい黄橙	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ、ミ ガキ				
	SI170	第24図	1	土師器	杯	14.0	丸底	[3.6]	-	にぶい褐 黒	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			外面黒色 処理
			2	土師器	杯	13.1	丸底	[3.3]	-	黒 にぶい橙	密	少	良好	ハラケズリ、ミガキ	ミガキ			内面黒色 処理
			3	土師器	杯	13.0	丸底	3.4	50%	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
			4	土師器	杯	-	丸底	[3.7]	25%	にぶい橙	密	少	良好	ハラケズリ、ミガキ	ミガキ			
			5	土師器	杯	13.6	-	[3.1]	-	にぶい黄褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
6			土師器	杯	13.5	丸底	[3.5]	40%	にぶい橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ			内外面赤彩	
7			土師器	杯	14.0	丸底	[3.3]	-	にぶい黄橙 灰黄褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ				
8			土師器	杯	15.9	丸底	[3.9]	-	灰褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ				
9			土師器	甕	20.1	-	[16.5]	45%	にぶい橙 明赤褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
第25図		10	土師器	甕	20.0	-	[11.4]	30%	にぶい黄橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		11	土師器	甕	18.6	-	[8.5]	-	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		12	土師器	甕	18.2	-	[5.6]	-	灰褐 にぶい黄橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ				
		13	土師器	甕	-	8.4	[5.4]	20%	黒褐色 にぶい赤褐	密	少	良好	ハラケズリ	ハラナデ				
SI171	第26図	1	土師器	杯	13.6	丸底	[3.4]	-	にぶい橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ				
		2	土師器	杯	12.1	丸底	4.2	90%	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ				
		3	土師器	杯	14.0	丸底	[2.8]	-	橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ				
		4	土師器	杯	13.9	丸底	[2.9]	-	にぶい橙	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ミガキ				
		5	土師器	甕	16.4	7.4	21.5	60%	にぶい赤褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		6	土師器	甕	18.8	(4.4)	24.9	40%	にぶい褐	密	少	良好	ハラケズリ、ナデ	ナデ、ハラナ デ				
		7	土師器	甕	-	7.9	[6.4]	20%	橙	密	少	良好	ハラケズリ	-			器面剥落	
		8	土師器	甕	-	5.4	[2.5]	15%	にぶい橙	密	少	良好	-	-			器面剥落	
		9	土師器	甕	-	6.2	[3.9]	15%	にぶい赤褐 灰褐	密	少	良好	ハラケズリ	-			器面剥落	

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考	
SI172	第27図	1	土師器	杯	13.4	丸底	[2.6]	-	黒灰褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			内面黒色処理
		2	土師器	杯	-	丸底	[2.1]	20%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			内面赤彩
		3	土師器	壺	-	-	[3.5]	-	橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ナデ			内外面赤彩
		4	土師器	小型甕	11.5	-	[9.5]	-	明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ、ヘラナデ			
		5	土師器	甕	-	(8.1)	[3.0]	15%	黒赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
SI173	第28図	1	土師器	杯	11.7	丸底	4.3	90%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		2	土師器	杯	12.9	丸底	[3.4]	30%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		3	土師器	手握ね	8.2	4.0	4.8	85%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ナデ		木葉痕	
SI174	第29図	1	須恵器	蓋	15.1	-	[1.3]	-	灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			
		2	須恵器	杯	14.5	9.6	5.2	60%	灰オリーブ灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			手持ちヘラ削り
		3	須恵器	杯	14.8	(8.3)	3.6	30%	灰白	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り		外周手持ちヘラ削り
		4	須恵器	杯	-	(8.2)	[1.1]	25%	灰黄	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			全面回転ヘラ削り
SI175	第30図	1	須恵器	蓋	15.7	-	4.0	90%	灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			
		2	土師器	甕	-	(4.5)	[3.5]	15%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
SI176	第31図	1	土師器	杯	14.0	丸底	5.5	40%	褐灰灰褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		2	土師器	杯	11.7	丸底	5.0	50%	にぶい褐黒	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラナデ			外面黒色処理
		3	土師器	杯	14.0	-	[5.6]	20%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラナデ			
		4	土師器	杯	14.0	丸底	[4.1]	20%	灰黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		5	土師器	杯	12.6	丸底	[3.4]	20%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		6	土師器	杯	12.2	丸底	[3.6]	-	褐灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			内外面黒色処理
		7	土師器	杯	12.7	丸底	[3.1]	20%	黒にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			内面黒色処理
		8	土師器	杯	11.0	4.8	3.5	60%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			木葉痕
		9	土師器	杯	12.5	丸底	[2.8]	15%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			外面赤彩
		10	土師器	杯	13.3	丸底	3.7	40%	にぶい黄橙褐灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラナデ			
		11	土師器	杯	13.2	丸底	3.5	25%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		12	土師器	杯	12.0	丸底	[3.2]	-	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
	第32図	13	土師器	杯	13.4	丸底	[3.3]	-	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		14	土師器	杯	12.0	丸底	[3.5]	15%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラナデ			
		15	土師器	杯	12.0	丸底	3.8	60%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
		16	土師器	杯	15.9	丸底	4.1	65%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		17	土師器	杯	14.2	丸底	[4.0]	20%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		18	土師器	杯	13.6	丸底	3.8	-	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		19	土師器	杯	12.1	丸底	3.2	90%	橙	密	少	良好	-	ミガキ			器面剥落
		20	土師器	杯	12.7	-	[2.5]	-	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		21	土師器	杯	-	-	[5.2]	15%	明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			内外面赤彩
		22	土師器	杯	-	-	[4.7]	20%	灰褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
		23	土師器	杯	13.5	丸底	4.4	70%	黒にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			内面黒色処理 底部外面線刻「×」

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考		
SI176	第32図	24	土師器	杯	(13.9)	丸底	[3.9]	-	にぶい橙 にぶい褐	密	少	良好	ミガキ、ナデ	ミガキ、ヘラ ナデ				
		25	土師器	杯	13.1	4.1	5.5	75%	にぶい橙 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ				
		26	土師器	杯	(12.0)	(7.0)	5.1	30%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ				
		27	土師器	杯	-	6.1	[4.0]	40%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ				
		28	土師器	杯	11.3	3.9	6.4	95%	にぶい橙	密	少	良好	ナデ	ナデ			内外面赤彩	
		29	土師器	鉢	17.8	丸底	6.5	55%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ				
		30	土師器	鉢	(18.6)	-	[6.2]	20%	黒 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ				
		31	土師器	高坏	(18.0)	-	[4.5]	-	黒 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			内面黒色処理	
		32	土師器	高坏	-	13.1	[9.6]	35%	黒 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			外面赤彩	
		33	土師器	高坏	-	9.2	[5.4]	40%	にぶい橙 明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラナデ			外面赤彩	
		34	土師器	高坏	-	(12.0)	[5.6]	20%	にぶい橙 明赤褐	密	少	良好	ナデ	ヘラナデ				
		35	須恵器	杯	(11.0)	5.0	3.9	30%	灰	密	少	良好	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ			回転ヘラ 削り	
		36	須恵器	高坏	(11.5)	-	[1.4]	-	灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ				
		37	須恵器	ハンソウ	(9.6)	-	[2.9]	-	黄灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ				
		38	須恵器	埴瓶	(5.9)	-	[4.8]	20%	灰褐	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ				
		39	土師器	鉢	(11.2)	-	[3.8]	10%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ				
		40	土師器	鉢	(11.6)	-	[2.4]	15%	明赤褐	密	少	良好	ナデ	ナデ				
		41	土師器	小型甕	(12.4)	-	[4.8]	20%	黒 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		42	土師器	甕	16.6	7.2	20.2	90%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		43	土師器	甕	(14.4)	-	[10.8]	20%	明黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
	44	土師器	甕	20.2	6.8	24.1	95%	にぶい黄橙 黒褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ					
	45	土師器	甕	17.7	(7.5)	19.5	85%	灰褐 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ					
	第33図	46	土師器	甕	16.2	-	[21.5]	70%	橙 明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		47	土師器	甕	(18.0)	-	[23.5]	30%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		48	土師器	甕	17.7	7.4	29.3	85%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		49	土師器	甕	(17.4)	(6.9)	[27.0]	60%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		50	土師器	甕	-	(7.3)	[7.3]	20%	橙 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
		51	土師器	甕	-	(9.6)	[4.3]	20%	褐灰 橙	密	少	良好	ヘラケズリ	-			器面剥落	
		52	土師器	甕	-	8.6	[33.9]	80%	褐灰 にぶい黄橙	密	少	良好	ミガキ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ				
		53	土師器	甕	-	8.4	[3.4]	20%	にぶい橙 にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ				
		54	土師器	甕	(22.8)	-	[7.6]	-	にぶい橙 にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ				
	SI177	第34図	1	土師器	高坏	(18.0)	-	[4.5]	-	にぶい黄橙	密	少	良好	ミガキ	ミガキ			
			2	土師器	甕	(15.9)	-	[3.2]	10%	にぶい橙 オリーブ黒	密	少	良好	ハケ、ナデ	ハケ、ナデ			
			3	土師器	甕	-	(6.8)	[2.9]	-	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
	SI178	第35図	1	土師器	杯	(12.4)	丸底	3.6	45%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	-			器面剥落
			2	土師器	杯	-	-	[2.7]	30%	褐灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
			3	土師器	杯	(17.0)	-	[3.8]		橙 にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			高坏か
			4	土師器	杯	(12.8)	丸底	[3.7]	30%	褐灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			

遺構番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り離し	底外調整	備考		
SI178	第35図	5	土師器	高坏	15.6	-	[10.2]	60%	黒橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ヘラナデ			外面赤彩、内面黒色処理	
		6	須恵器	杯	-	-	[1.8]	20%	灰	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ				
		7	土師器	甕	20.4	-	[16.5]	40%	橙にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ				
		8	土師器	甕	(17.8)	-	[7.0]	-	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
		9	土師器	甕	(14.6)	-	[7.3]	20%	褐灰橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
		10	土師器	甕	(17.0)	-	[6.9]	25%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ、ミガキ	ナデ、ヘラナデ				
		11	土師器	甕	-	7.1	[7.2]	20%	黒にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
		12	土師器	甕	-	-	[8.5]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
	13	土師器	甕	-	6.4	[2.9]	20%	黒にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	-					
	第36図	14	土師器	甕	-	7.1	[7.2]	20%	褐灰黒褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ナデ				
		15	土師器	甕	-	(6.0)	[7.9]	15%	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
		16	土師器	甕	-	(6.8)	[5.5]	-	にぶい橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ミガキ、ヘラナデ				
	SI179	第37図	1	土師器	杯	(12.4)	-	[3.2]	10%	にぶい黄褐にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
			2	土師器	杯	(12.3)	丸底	[3.4]	-	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
			3	土師器	杯	(11.0)	丸底	[3.3]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ			
			4	土師器	杯	(12.4)	-	[3.0]	20%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ			
5			土師器	杯	(13.0)	-	[2.4]	10%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ				
6			土師器	杯	13.6	7.6	4.3	60%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			木葉痕	
7			土師器	杯	(13.2)	(5.6)	4.5	30%	灰黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			木葉痕	
8			土師器	杯	-	-	[2.0]	30%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ミガキ、ナデ				
9			須恵器	杯	-	-	-	10%	にぶい黄灰	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ				
10			須恵器	蓋	-	-	-	10%	黄灰	密	少	良好	ナデ	ナデ				
11			土師器	甕	(13.0)	5.8	10.3	75%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
12			土師器	甕	-	7.4	[3.1]	15%	黒褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
13			土師器	甕	-	(7.9)	3.1	10%	橙	密	多	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
SI180	第38図	1	土師器	杯	(12.8)	-	[3.6]	10%	黒褐黒	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ			内面黒色処理	
		2	土師器	杯	(15.0)	-	7.0	80%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
		3	土師器	甕	(14.9)	(9.0)	[28.0]	60%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
		4	土師器	甕	(18.2)	-	[8.2]	15%	褐黒褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
SI181	第39図	1	土師器	甕	(22.0)	-	[3.9]	5%	にぶい黄褐	密	多	良好	ナデ、ヘラナデ	ナデ				
SI182	第30図	3	須恵器	杯	14.6	8.4	4.3	80%	灰オリーブ	密	多	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			全面回転ヘラ削り	
SI183	第40図	1	土師器	杯	-	-	[2.0]	30%	黒	密	少	良好	ヘラケズリ、ミガキ	ミガキ、ナデ			内面黒色処理	
		2	土師器	鉢	(11.1)	6.6	8.5	25%	明赤褐橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナデ				
		3	土師器	鉢	(11.2)	6.8	9.2	70%	明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ				
		4	土師器	甕	(24.0)	-	[5.7]	10%	にぶい黄褐にぶい黄橙	密	多	良好	ナデ、ヘラナデ	ナデ、ヘラナデ				
		5	土師器	甕	-	6.6	[2.2]	10%	にぶい褐橙	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
		6	土師器	甕	-	(6.9)	[2.3]	15%	明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ				
		7	土師器	甕	-	9.8	[12.3]	20%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、ミガキ、ヘラナデ				

遺構 番号	挿図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整 外面	調整 内面	底部切り 離し	底外調整	備考	
SI184	第41図	1	土師器	杯	13.0	-	4.7	45%	赤黒 赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		2	土師器	杯	12.8	6.4	4.8		明赤褐 にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ			
		3	須恵器	杯	-	(8.0)	[3.2]	15%	灰黄 灰黄	密	多	良好	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ			回転ヘラ 削り
		4	須恵器	杯	14.0	-	[2.0]	10%	灰白	密	少	良好	ロクロナデ	ロクロナデ			
		5	土師器	甕	21.0	-	[26.6]	60%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		6	土師器	甕	18.6	-	[19.8]	60%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		7	土師器	甕	18.1	-	[10.2]	15%	にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		8	土師器	甕	10.4	-	[11.4]	30%	にぶい黄褐 橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		9	土師器	甕	21.0	-	[5.7]	10%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		10	土師器	甕	19.2	-	[17.5]	35%	明黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
	第42図	11	土師器	甕	18.1	-	[18.7]	30%	橙 にぶい橙	密	多	良好	ヘラケズリ、ナデ	ヘラケズリ、 ナデ、ヘラナ デ			
		12	土師器	小型甕	16.6	-	[12.0]	50%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		13	土師器	小型甕	15.8	-	[12.9]	60%	にぶい黄橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		14	土師器	甕	-	(6.0)	[14.5]	25%	赤褐 明赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
		15	土師器	甕	-	(7.0)	[10.2]	15%	にぶい黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
		16	土師器	甕	-	6.3	[6.0]	35%	にぶい褐 にぶい褐	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
		17	土師器	小型甕	10.0	-	[15.0]	70%	赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、ヘラナ デ			
		18	土師器	甕	30.0	10.0	28.1	85%	明黄褐	密	多	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ、 ヘラナデ			
		19	土師器	甕	(30.0)	-	[18.4]	10%	明黄褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ、 ヘラナデ			
		20	土師器	甕	(30.0)	-	[14.7]	15%	橙	密	少	良好	ヘラケズリ、ナデ	ミガキ、ナデ、 ヘラナデ			
		21	土師器	甕	-	(8.0)	[13.8]	15%	にぶい赤褐	密	少	良好	ヘラケズリ、ヘラナデ	ヘラケズリ、 ヘラナデ			

第6章 まとめ

第1節 旧石器時代

小規模な遺物集中地点が1か所出土した。集中地点の産出層準をⅥ層下部としたが、タフオノミーを考慮すれば、もう少し遡行する可能性もある。この層準のプライマリー・リダクションは、信州産黒曜石製の石刃生産と、在地石材を使う一般的剥片生産という二項的な構成であった。矢子層産珪質頁岩や、北関東産の石材も使われている。この特徴は地理的に一定の広がりを見せ、また、時間的にも限定されるところから、一つのテクノ・コンプレクス（仮称押沼テクノ・コンプレクス）を形成していたと考えられる¹⁾。この押沼テクノ・コンプレクスの出現した時期はⅨ層中部であり、消滅したのはⅥ層AT火山灰降灰期である。本集中は、消滅時期に近接している。消滅時期がH3イベント²⁾とほぼ完全に重複していることから、押沼テクノ・コンプレクスの荷担集団は次第に人口を減少させ、最終的には消滅した可能性が高い。以降、プライマリー・リダクションは一般的な剥離に特化し、在地石材の消費（移動領域の縮小と短期反復居住）に傾斜するテクノ・コンプレクスに転換する。その存続時期は、H3イベントとH2イベントに挟まれた数千年間であり、荷担集団はH2イベントとともにほぼ完全に消滅した。

第2節 弥生時代

弥生時代後期の遺構は、既報告の調査地点で土器片が出土していたが、今回の（6）地点で初めて竪穴住居跡が検出された。南側の台地先端付近に、2m～7m間隔で直線的に4軒分布する。規模と形状から2種類に区分できる。一方は大形の小判形に近い長方形で、明瞭な柱穴が検出されている。他方は比較的小型のやや不整形な長方形で、明瞭な柱穴が検出されていない。当該時期の竪穴住居跡は、物井地区の既調査区では検出されていない。また、出土土器の内容及び竪穴住居跡の重複がないこと、ある程度の間隔で分布していることから、これらの住居跡はほぼ同時期に存在した小規模集落の可能性が考えられる。出土土器は、附加条縄文が施される特徴をもつ在地系の「臼井南式」に南関東系が混在している。物井地区内で該期の遺跡をみると、小屋ノ内遺跡では同様な傾向を示し、新久遺跡では南関東系の土器で占められている。

在地系土器は、最も多くの資料が得られたSI161から、頸部に多段の輪積痕を有する甕（第12図5・8）、頸部上半に輪積痕が残される甕（同図4）、複合口縁をもつ甕（同図2）、複合口縁の鉢または蓋（同図10・11）がみられる。SI165からは附加条縄文が施される鉢または蓋（第15図1）、SI168からは2条のS字状結節文が施される甕（第16図2）などが出土している。高花宏行氏は、印旛沼周辺地域の弥生時代後期の土器群を4期に区分しており、頸部に多段の輪積痕をもつ段階を後期前葉のⅡ期、輪積痕が口縁部を中心とした上部に集約される段階を後期後葉のⅢ期とした³⁾。SI161出土の5はⅡ期、4はⅢ期の特徴をもつものといえる。4は、口縁部から頸部に輪積痕と、胴上部に段が残される南関東系にみられる2系統と、在地系のS字結節文・附加条縄文が融合したもので、佐倉市江原台遺跡123号住居址から類例が出土している。口縁部内面のハケ状工具によるナデ調整もⅢ期にみられる技法である。2の甕にも、南関東系の要素である胴上部に段及び連続刺突文が施されている。第12図7の外面無文の甕にも同様なハケ状工具によるナデ調整がみられる。10・11の鉢または蓋は、Ⅲ期に比定される江原台遺跡010号住居址から類例

が出土している。SI165の鉢または蓋は、体部に附加条縄文が類例を見出すことはできない。同様な形状の鉢はⅡ期またはⅢ期に限られる。他は破片資料が多く、いずれもⅡ期～Ⅲ期に比定されるものである。

南関東系の土器は、特徴的なものとして、SI161出土の複合口縁の椀または高杯（第12図1）、無文の甕（同図6）、口縁部複合口縁の甕（同図9）、壺または甕の口縁部（同図12～17）があげられる。SI165出土の壺の口縁部（第15図3）、SI161の頸部に輪積痕が残される甕は、大村直氏による山田橋2式⁴⁾に比定されるものであり、在地系土器との併行関係と矛盾しない。SI161以外は遺物が少なく明確さに欠けるが、4軒の竪穴住居跡は弥生時代後期中葉に形成されたものと捉えておきたい。

第3節 古墳時代以降

古墳時代前期1軒、後期14軒、奈良・平安時代4軒の竪穴住居跡が検出された。既報告の地点では、古墳時代前期3軒、古墳時代中期後半～後期72軒、奈良・平安時代11軒の竪穴住居跡が検出されている。北側ほど遺構密度が濃く、北東側に続く馬場No-2遺跡に集落は連続している。

古墳時代前期のSI177は、調査区北西端に位置する隅丸長方形の比較的大型の竪穴住居跡である。出土土器は断片的で時期判定が難しいが、1の高杯が直線的に開くことから、体部下端に稜をもつ形態であること。2の甕は口唇部にキザミが施されず、口縁部に輪積痕がなく直線的に開き、頸部が「く」字状に鋭く屈曲する特徴をもつことから、古墳時代前期でも中葉以降の所産と考えられる。加藤修司氏による編年の草刈Ⅲ期⁵⁾、高花宏行氏のⅢb期⁶⁾に比定されるものである。SI177の北東に隣接して位置する既報告のSI002からは、外面にヘラケズリが施される甕が2点、約50m北側に位置するSI021からは、ハケ調整が施される小型丸底土器・小型の鉢が出土し、同時期に位置づけられ、3軒でグループを形成していたと思われる。

続く古墳時代中期から後期は、既報告において出土土器の編年がなされている⁷⁾。詳しくは報告書を参照されたいが、各期の土器器杯・椀の特徴と暦年代は以下のとおりである。

- 1期 赤彩された椀形の杯及び中期的な様相を留める高杯の存在。（5世紀中葉）
- 2期 赤彩椀形杯、高杯は坏部が赤彩椀形、脚部は短脚。（5世紀後葉）
- 3期 赤彩椀形杯、須恵器模倣杯の出現。（5世紀末～6世紀前葉）
- 4期 赤彩・無赤彩・黒彩（黒色処理・漆仕上げ土器の双方または片方）の土器が混在。赤彩が目立つが、無彩・黒彩との量比が優勢でない場合もある。（6世紀中葉～後葉）
- 5期 赤彩・無彩・黒彩が混在。無彩・黒彩が優勢。（6世紀末～7世紀初頭）
- 6期 杯はほぼ無彩・黒彩で占められる。また、杯に小型品が現れる。（7世紀前葉）
- 7期 須恵器坏模倣杯は退化（少量化）。丸底または平底で、椀形または皿形の形態の新たなタイプの杯が出現する。小型のものが多いが、やや大型のものもみられる。（7世紀中葉～後葉）

（6）地点で検出された竪穴住居跡についても、同様の特徴を有しており、この編年に従い時期区分を行い、第43図に示した。（6）地点では古墳時代中期の1期～4期の竪穴住居跡はなく、古墳時代後期の5期～7期の竪穴住居跡が分布する。既報告の地点と併せた時期ごとの最終的な軒数は、1期：1軒、2期：1軒、3期：2軒、4期：21軒、5期：18軒、6期：16軒、7期：12軒であり、ほかに時期を特定しがたいもの及び不明は13軒ある。

1～4期については、既報告⁷⁾において分布の様相が考察されているので、追加となった5期以降に

ついて既報告の地点を含めた分布の傾向をみていきたい。

5期は、SI176、SI180（既報告のSI004の南側部分）が加わり、台地の北側に分布する傾向がみられる。SI176はSI004・SI180に隣接して並び、2軒で1グループを形成している可能性が高い。既報告の北側の竪穴住居跡群も2～3軒で1グループをなすとみられる。6期は、今回報告の（6）地点において最も多い9軒が検出された。東側の調査区を中心に遺跡全域にわたって分布する。7期は、（6）地点において4軒検出された。15m～30mの間隔をもって遺跡全域に分布する。6期の2～3軒からなるグループの近くに位置しており、各グループが1軒単独となったとみられる。

奈良・平安時代については、既報告では8世紀前葉から9世紀中葉～後葉の5期に区分されており、合計10軒の竪穴住居跡が検出されている。今回報告の（6）地点において検出された3軒は、古墳時代の7期に続く8世紀前葉に比定される奈良時代前半ともいえるものである。舌状台地の中央付近に位置しており、主軸方向でみると、SI173とSI181、SI174とSI179の2軒ずつで1グループが形成されると思われる。既報告の西側調査区においても2軒で1グループが形成されている。

館ノ山遺跡（6）地点における古墳時代以降の竪穴住居跡の動向は以上のとおりで、時期によって立地が変化し、集中・拡散が観察される。

中世の館跡については、遺構、遺物が検出されず、また、地形の改変も確認されなかった。よって、館跡の造成範囲が、本調査区が所在する舌上台地の基部までであることが確認された。

注

- 1 テクノ・コンプレクス クラークによって定義された考古学的な分析単位である。①ある生態系において、②特定のテクノロジーを運用しながら遂行される、③経済行動の全体を概括してテクノ・コンプレクスという。特定器種や、型式などを基準とするのではなく、旧石器時代に適用される場合、石材補給パターン、プライマリー・リダクション、セカンダリー・リダクションなどに基づいてざっくりと設定される。これには種々の地域的「文化」（ローカル・カルチャー）が包摂される場合が多い。しばしば大規模な気候変動とテクノ・コンプレクスの消長には密接な相関関係が指摘されており、歴史叙述のための大きな手がかりを与えてくれる。同時に、従来の段階的・継起的な「文化」理解の不毛性を指示している。
- 2 ハインリッヒイベント 大西洋の深海底コアの特定部分に砂礫の凝集層準がある。これはカナダ東部ローレントイド氷床から押し出された大量の氷山から供給されたものである。この時期に地球規模での急激かつ著しい寒冷化が予測され、ハインリッヒイベントと呼ばれている。H3イベントはおよそ29.0ka（較正年代、前後数百年の誤差範囲がある）、H2イベントは23.0ka（同）前後の年代と言われている。H3イベント以降、徐々に、かつ波状的に寒冷化が進展し、H2イベント直前期以降をLGMと定義する。H3イベントはAT降灰と絡み、H2イベントは杉久保-砂川ナイフの層準と絡む。参考までに、16.5kaのH1イベントは札滑型細石刃核を含む石器群の南下時期と重なる。
- 3 大村 直 2004「弥生時代後期の山田橋遺跡群」『市原市山田橋大山台遺跡』（財）市原市文化財センター
- 4 高花宏行 2007「『臼井南式』とその周辺土器様相の検討」『研究紀要』5（財）印旛郡市文化財センター
- 5 加藤修司 2000「土器編年案」『研究紀要』21（財）千葉県文化財センター
- 6 高花宏行 2001「印旛地域における古墳時代開始期の土器様相」『研究紀要』2（財）印旛郡市文化財センター
- 7（財）千葉県教育振興財団 2011『四街道市館ノ山遺跡-物井地区埋蔵文化財調査報告書Ⅸ-』

24

25

26

27

28

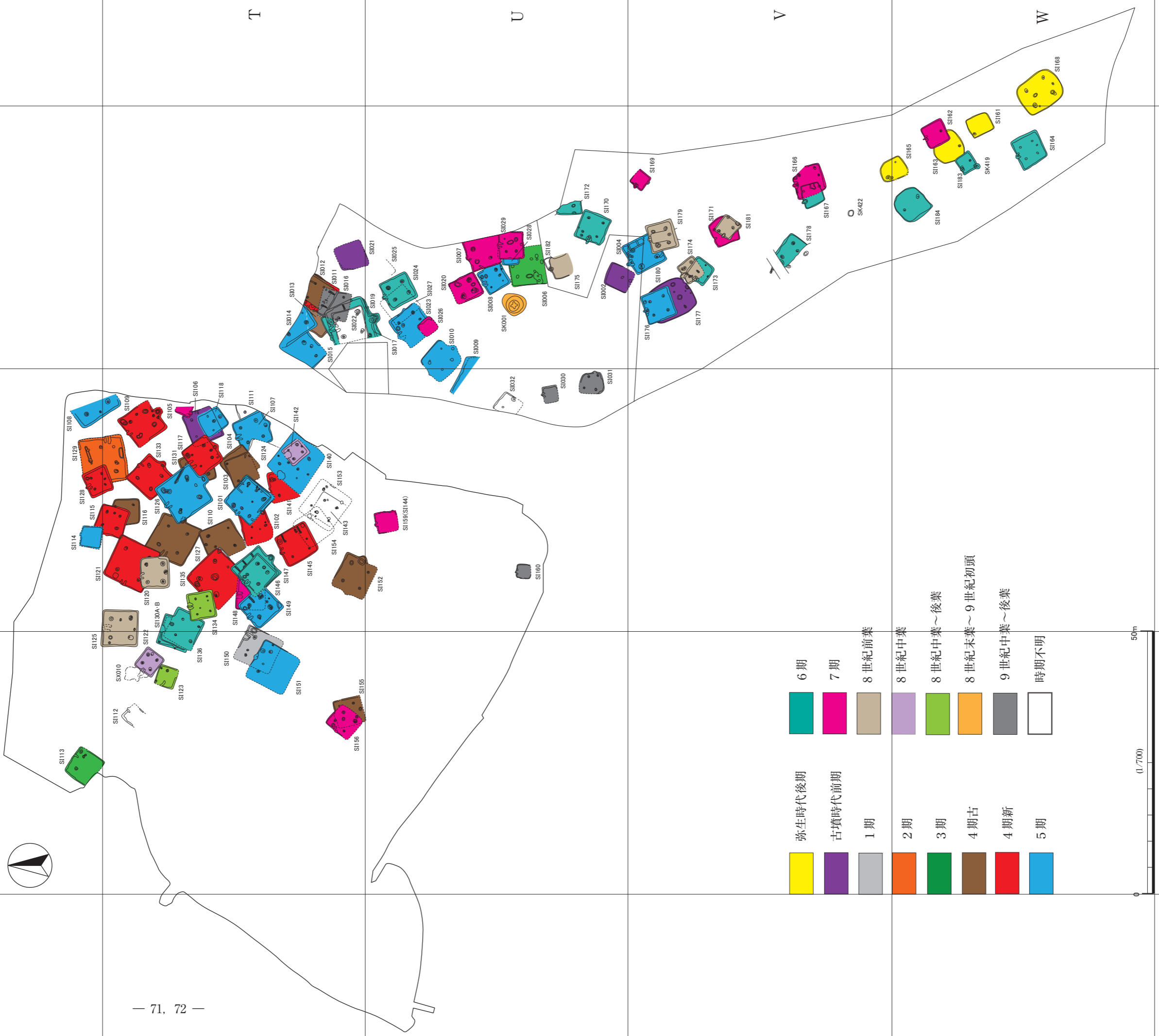
S

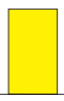













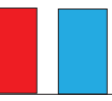

T

U

V

W



	弥生時代後期		6期
	古墳時代前期		7期
	1期		8世紀前葉
	2期		8世紀中葉
	3期		8世紀中葉～後葉
	4期古		8世紀末葉～9世紀初頭
	4期新		9世紀中葉～後葉
	5期		時期不明

0 50m
(1/700)

第43図 弥生時代～奈良・平安時代整穴住居跡の時期区分

写 真 图 版



館ノ山遺跡

遺跡周辺航空写真 (約1/10,000 昭和44年撮影)



館ノ山遺跡空撮（北から）



館ノ山遺跡空撮（上から）



調査前風景 (北から)



調査前風景 (南東から)



確認状況 (南から)



発掘風景 (1)



発掘風景 (2)



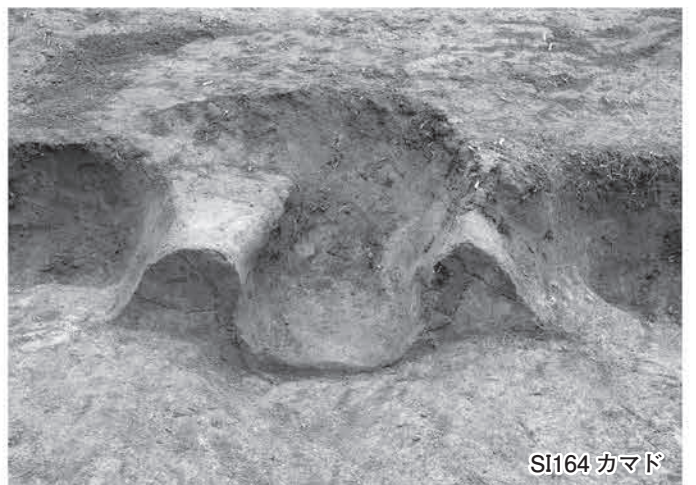
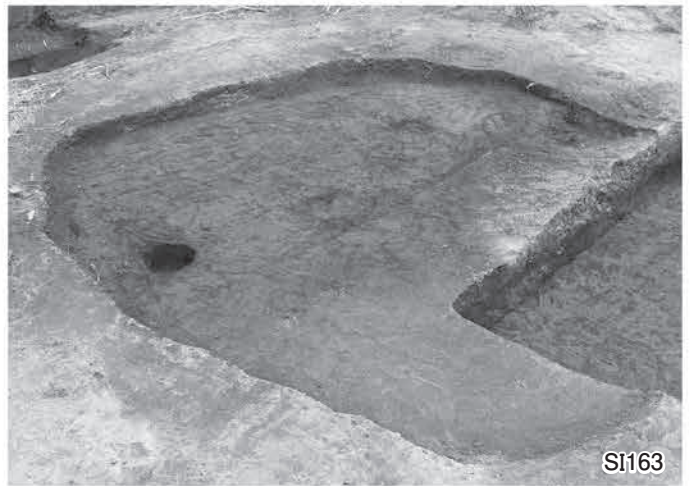
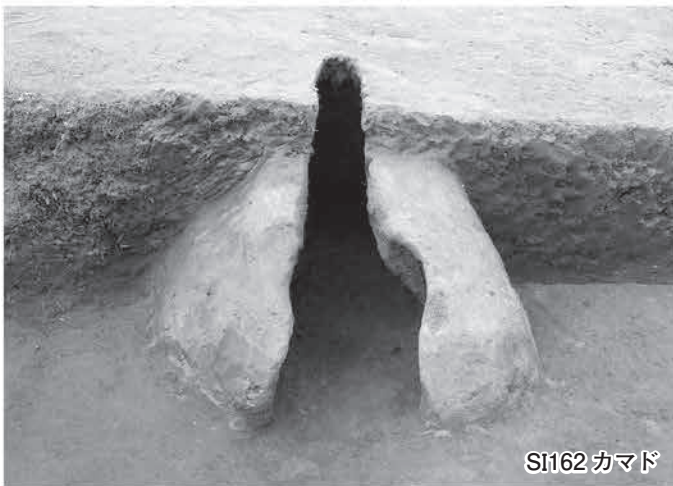
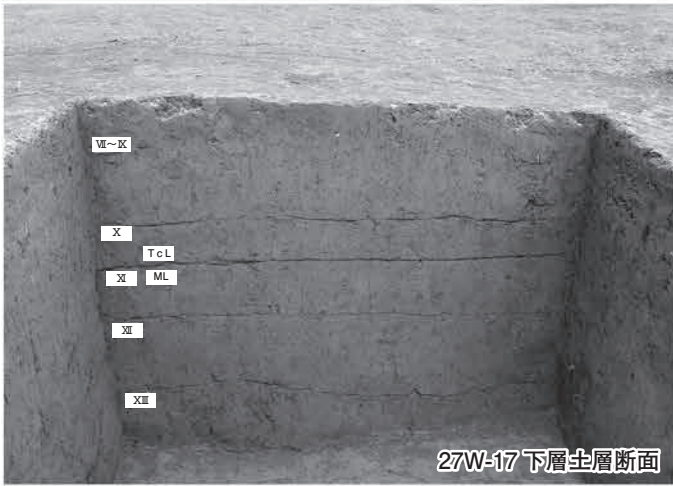
発掘風景 (3)



旧石器時代集中1遺物出土状況 (1)

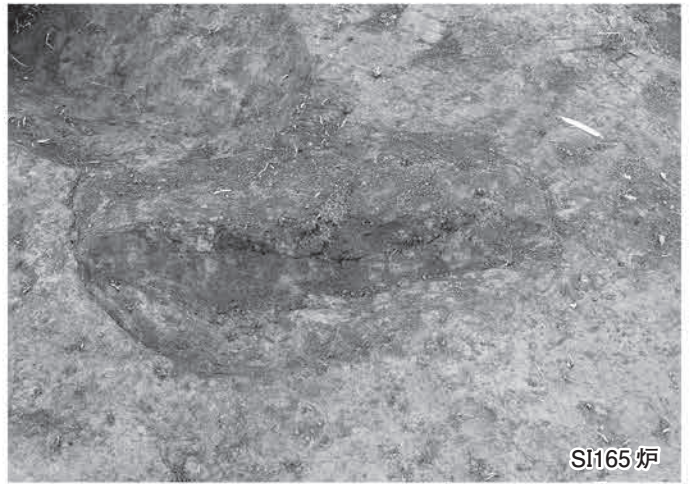


旧石器時代集中1遺物出土状況 (2)





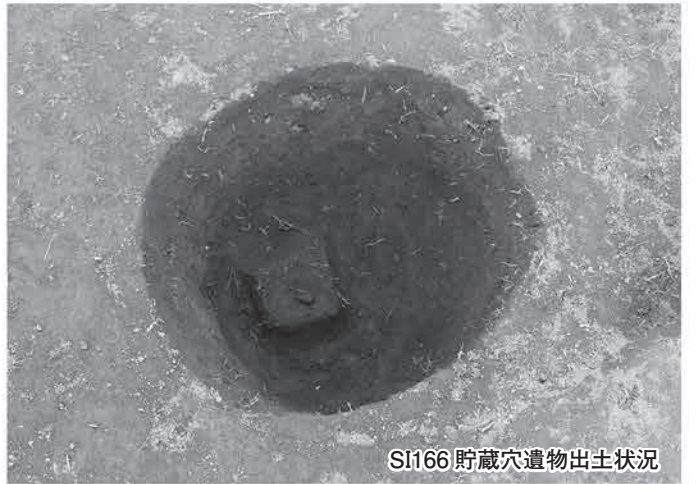
SI165



SI165 炉



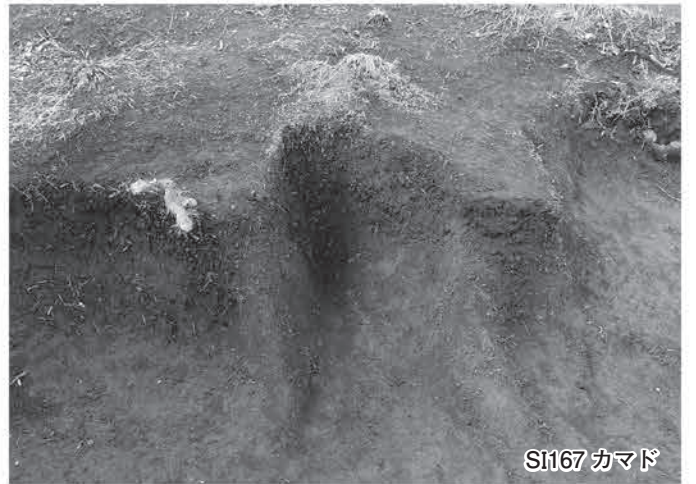
SI166



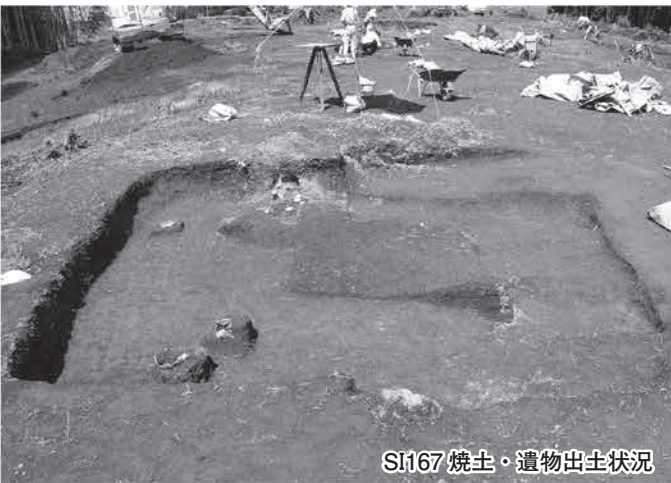
SI166 貯蔵穴遺物出土状況



SI167



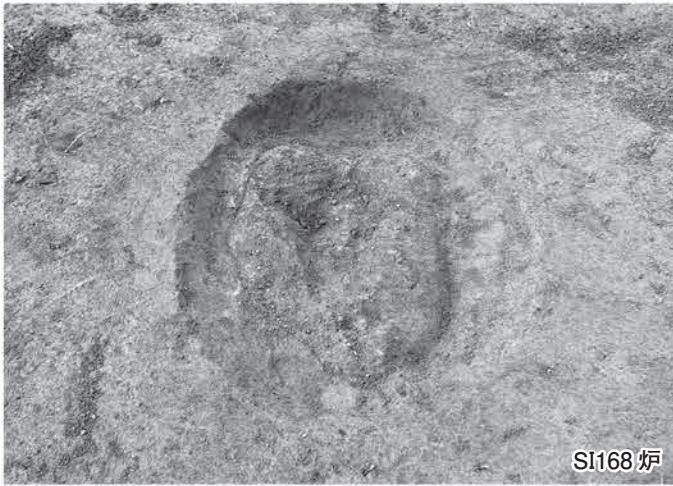
SI167 カマド



SI167 焼土・遺物出土状況



SI168



SI168 炉



SI169



SI169 旧カマド



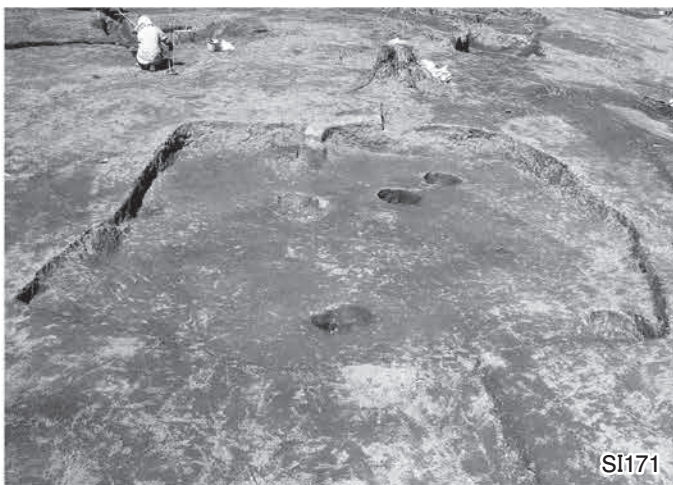
SI169 遺物出土状況



SI170



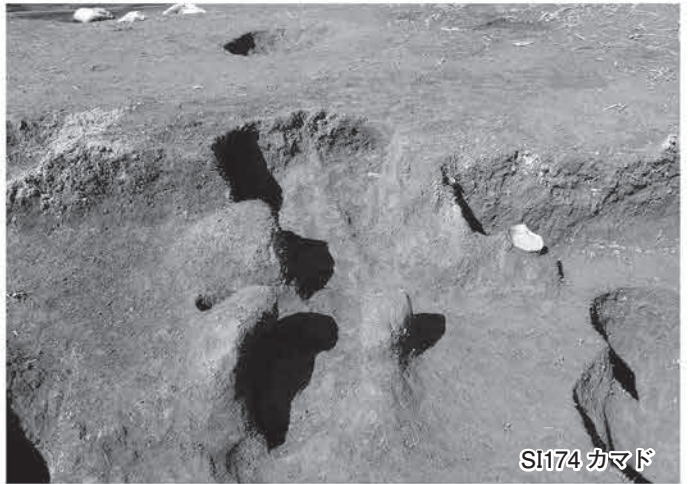
SI170 カマド

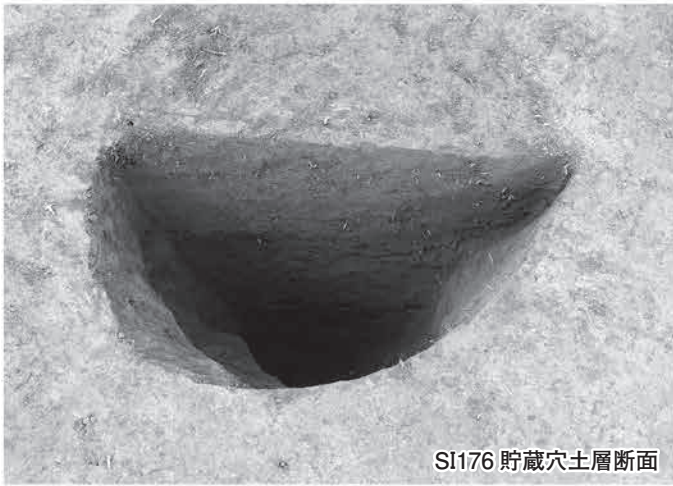


SI171



SI171 遺物出土状況





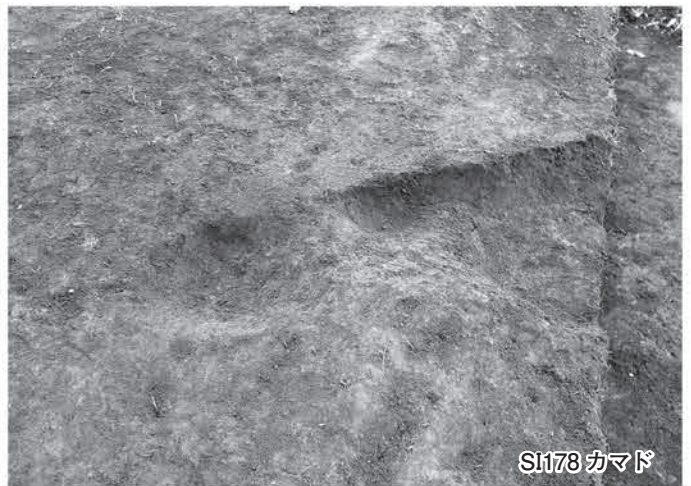
SI176 貯蔵穴土層断面



SI177



SI178



SI178 カマド



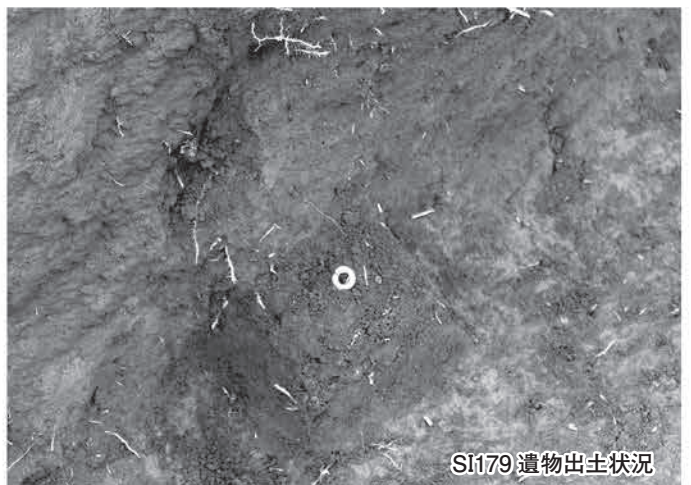
SI179



SI179 カマド



SI179 カマド遺物出土状況



SI179 遺物出土状況



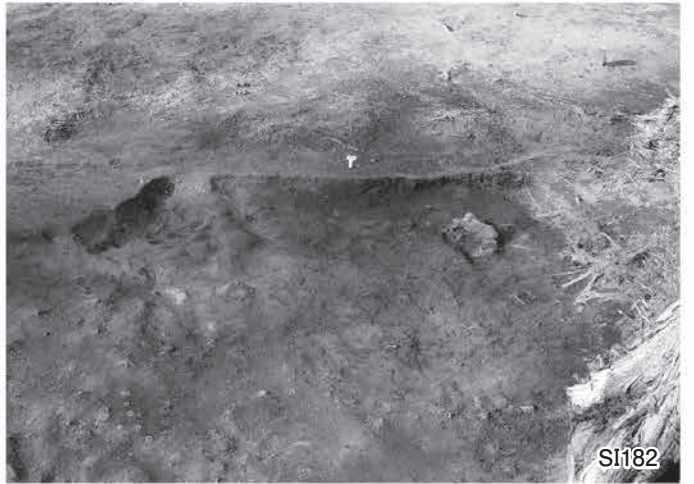
SI180



SI180 遺物出土状況



SI181



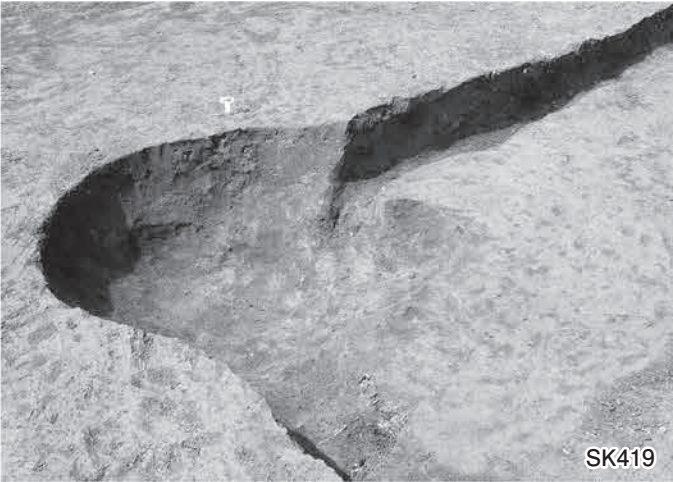
SI182



SI183



SI183 カマド



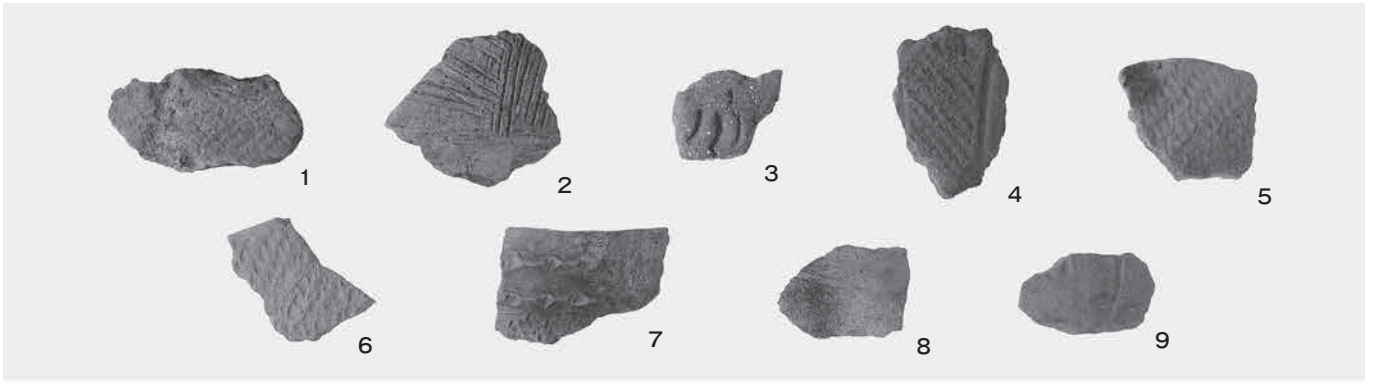
SK419



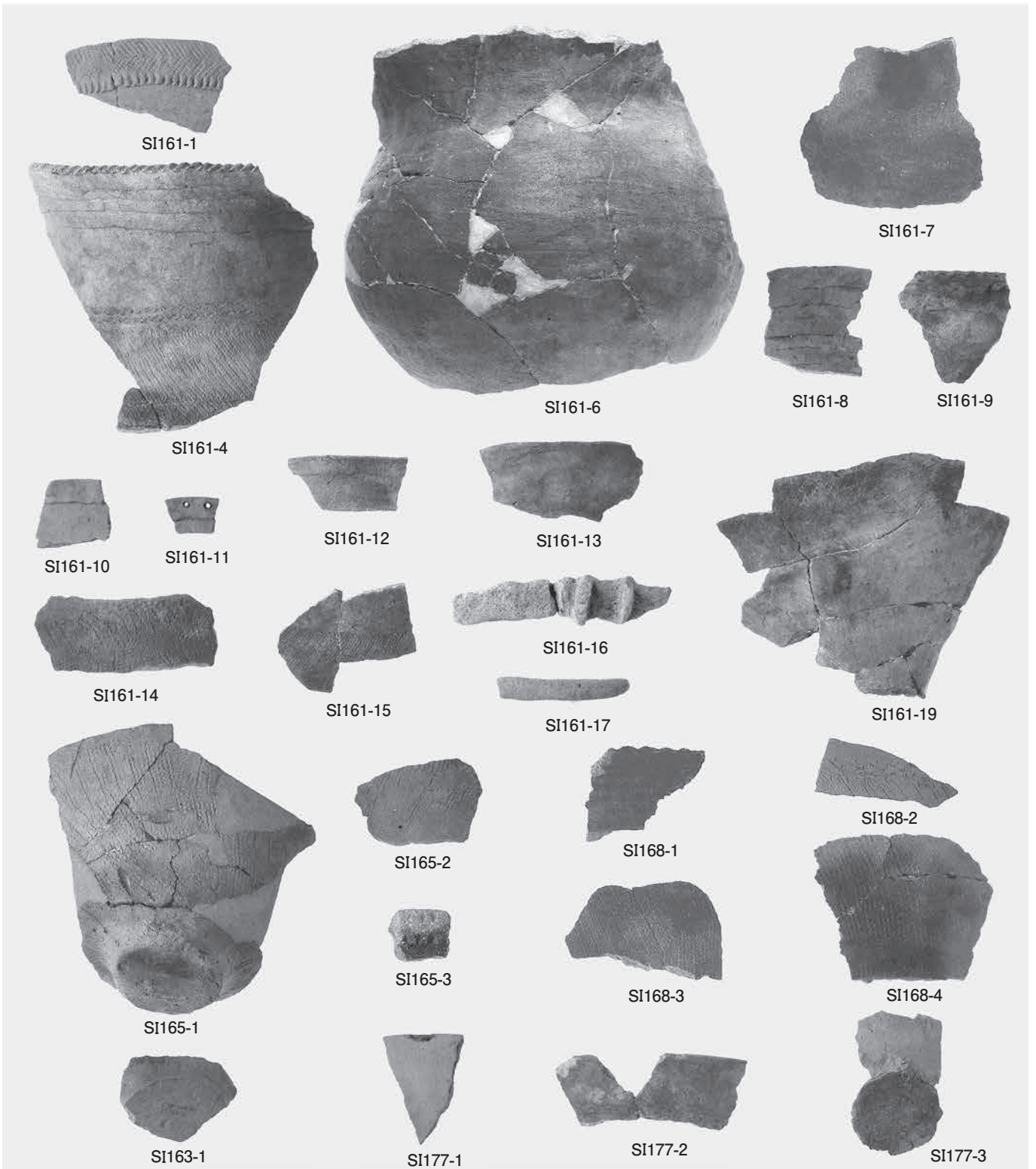
SI184



旧石器時代石器



縄文土器



弥生土器 (1)・古墳時代土器 (1)



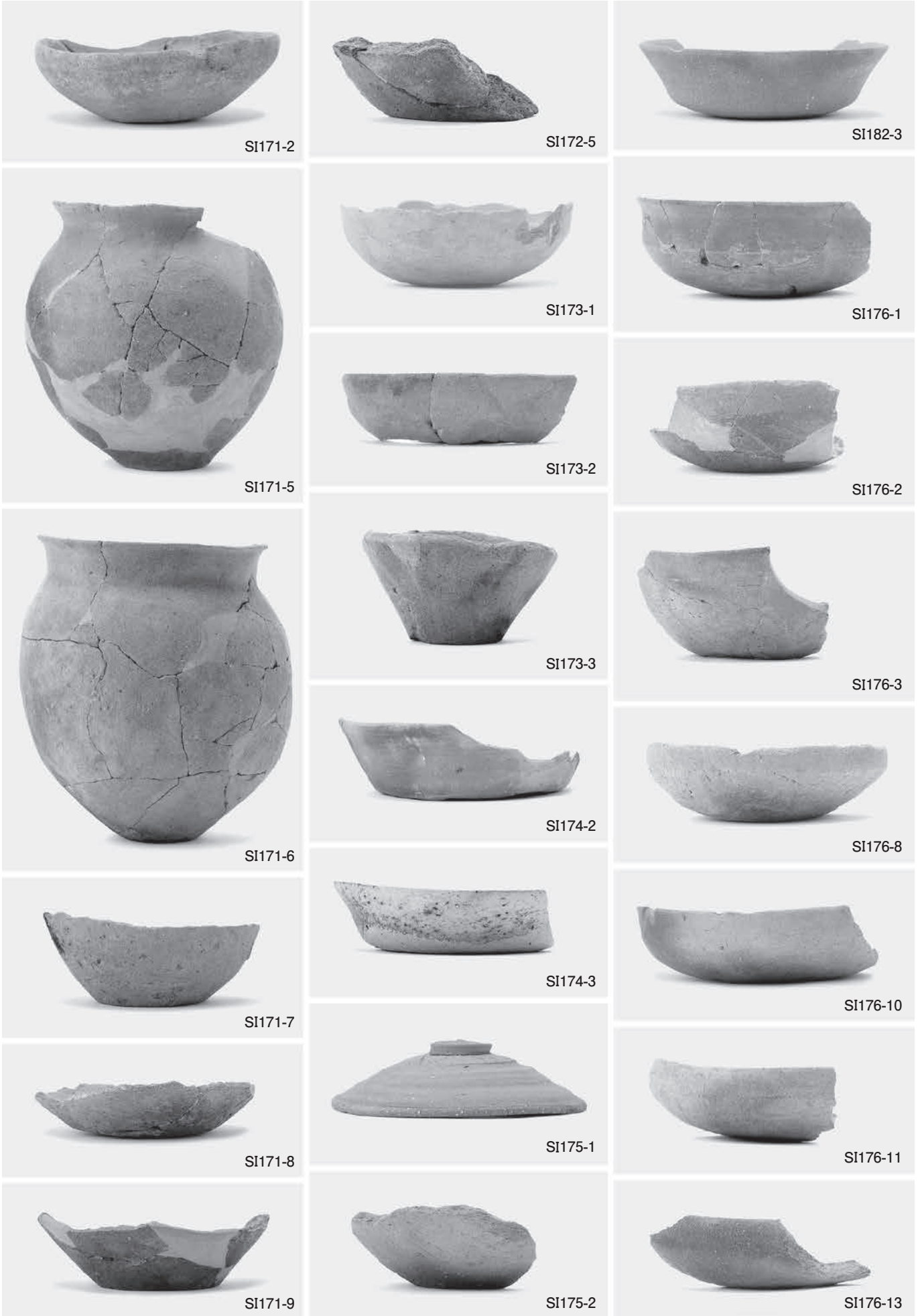
弥生土器（2）・古墳時代土器（2）



古墳時代土器 (3)



古墳時代土器 (4)



古墳時代土器 (5)



古墳時代土器 (6)



SI176-46



SI176-49



SI178-7



SI179-3



SI176-47



SI176-52



SI179-6



SI179-7



SI176-48



SI178-1



SI179-11



SI178-3



SI179-12



SI178-11



SI178-4

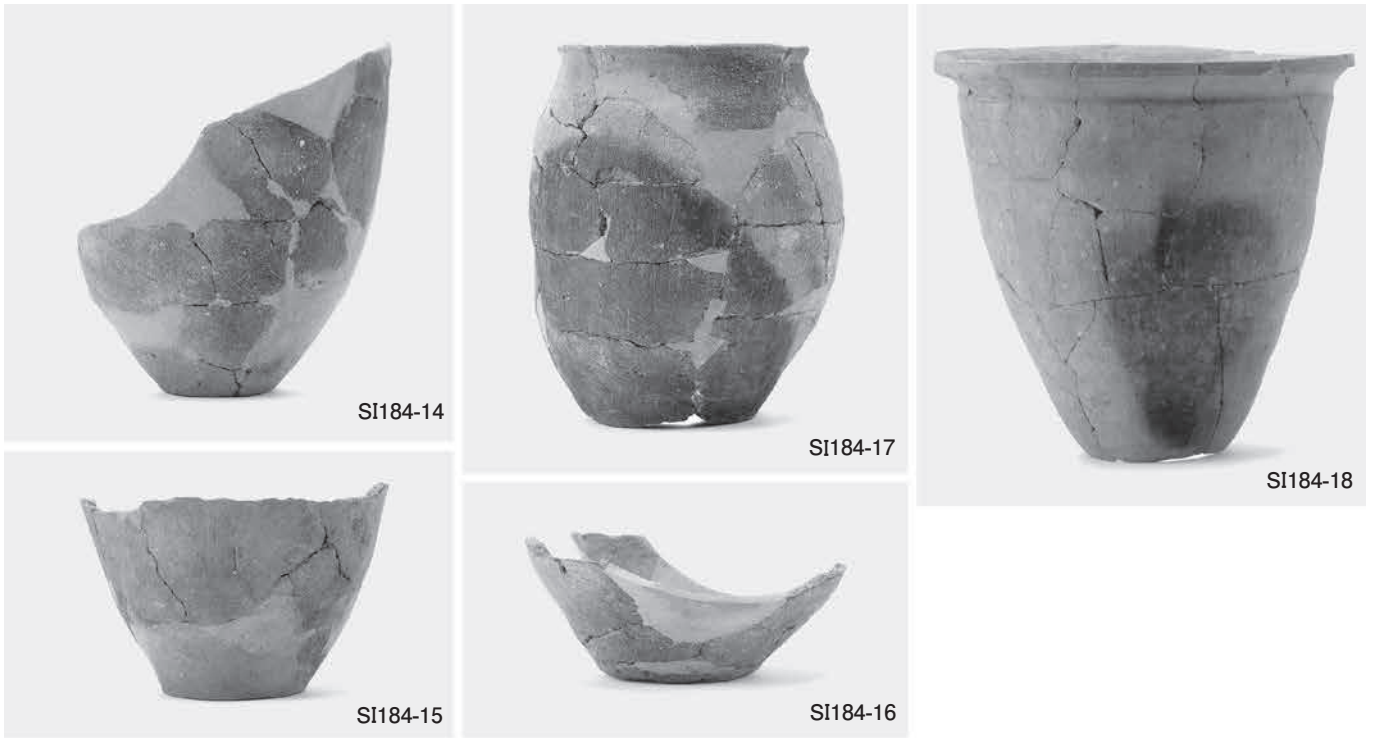


SI180-3

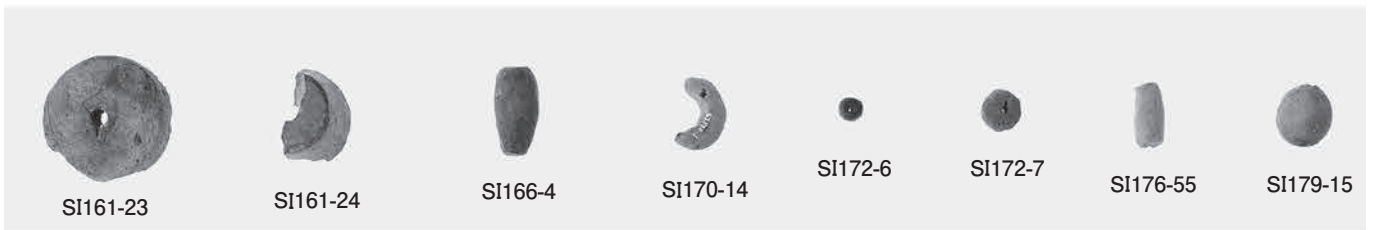
古墳時代土器 (7)



古墳時代土器 (8)



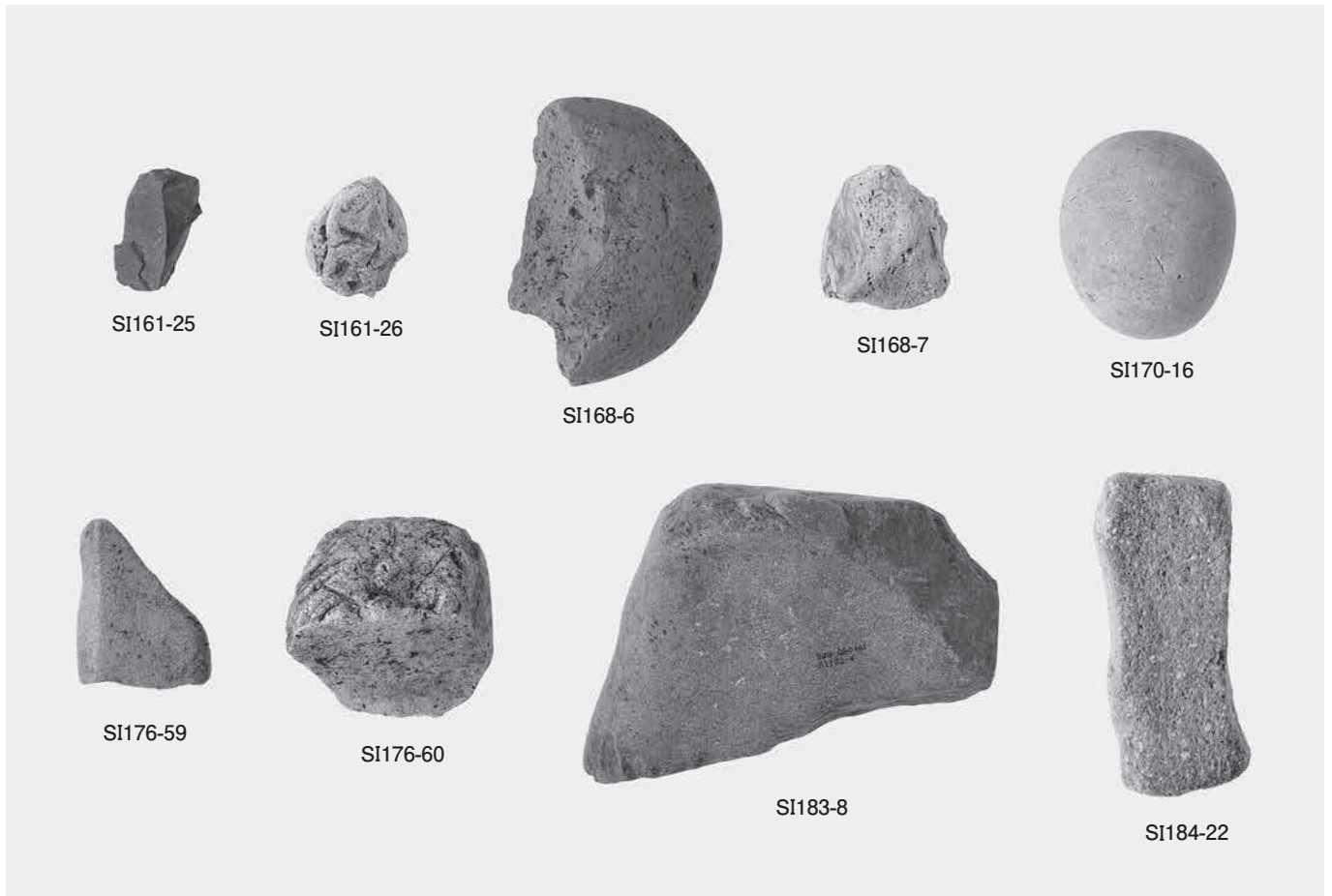
古墳時代土器 (9)



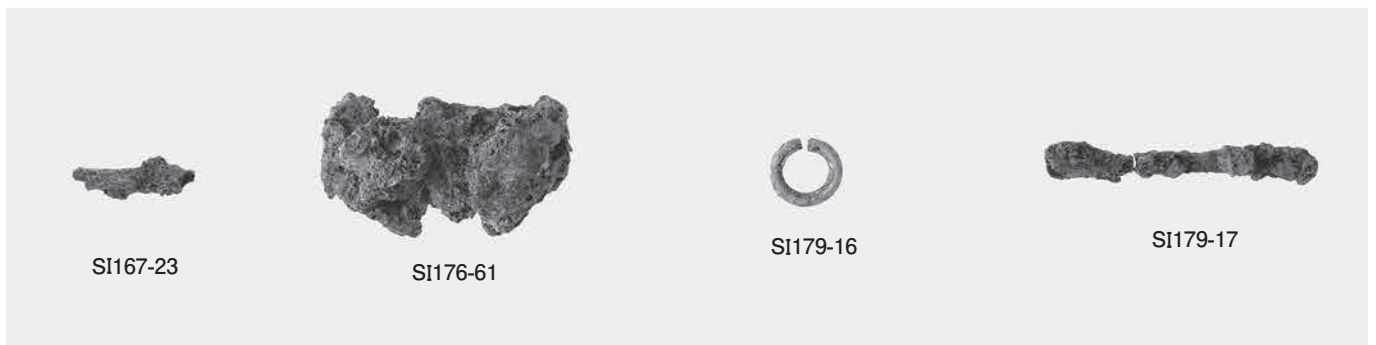
土製品



支脚



石 器



鉄製品等

報 告 書 抄 録

ふりがな	よつかいどうしたてのやまいせき (3)							
書名	四街道市館ノ山遺跡 (3)							
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	X X II							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第759集							
編著者名	木原高弘・田村 隆・香取正彦							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL.043-424-4848							
発行年月日	西暦 2016年9月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たて やまい せき 館ノ山遺跡 (6)	よつかいどうし 四街道市 ものい あざだて やま 物井字館ノ山 688-1ほか	12228	020	35度 41分 04秒	140度 11分 46秒	20140701～ 20141120	3,351㎡	土地区画整理事業に 伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
館ノ山遺跡 (6)	集落跡 包蔵地 集落跡 集落跡 集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良・平安時代	石器集中地点 堅穴住居跡 堅穴住居跡 土坑	1 か所 4 軒 15 軒 1 基	石器 縄文土器・石器 弥生土器・紡錘車・石 器 土師器・須恵器・土製品・ 鉄製品・耳環・石製品	館ノ山遺跡で初めての弥 生時代後期集落跡。 古墳時代～奈良・平安時 代の集落変遷を想定し た。		
要 約	本遺跡は印旛沼に注ぐ鹿島川支流の支谷に開析された台地上に立地し、平成9年度から平成11年度および平成23年度に調査が実施され、旧石器時代石器、縄文時代後期の集落跡、古墳時代前期～後期、奈良・平安時代の集落跡、中世の館跡が検出された。今回の第6次調査区は、過去の調査区の南側、鹿島川の支流に面した、細長い舌状台地上である。調査では、旧石器時代の石器集中地点1か所を南端部で検出した。弥生時代は、館ノ山遺跡では初めての後期の集落跡を南部で検出した。古墳時代～奈良・平安時代は堅穴住居跡を検出し、集落跡の広がりど時期による分布の移動が判明した。中世は遺構、遺物等は検出されず、館跡の境界が確認された。							

千葉県教育振興財団調査報告第 759 集

四街道市館ノ山遺跡（3）

－物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 X X II－

平成 28 年 9 月 5 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 独立行政法人 都市再生機構
首都圏ニュータウン本部
東京都新宿区西新宿 6-5-1

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 正文社
千葉市中央区都町 1-10-6
